

れに新三郎殿も御出有るに、又もののつかく、控へて居れ、市「へい、下の方に控へる、新「イヤ、苦しうらぬ、嘘かし此程は何かとお心痛、一寸お見舞とは存すれど、御閉門ゆるそれなりに、シテ少しなりとも香合のお心當りはムらぬかな、此内十次兵衛向うを見有て、新三郎がせ、十「ハ、ハ、ハ、さやうにムる、御大切な御家の重器、日夜油断は仕らねど、人に不時の禍有りど、その夜は雨の庚申待、酒もてうじて夜半迄お出の衆中は、貴殿の御舎兄丈左衛門ごのを始めとして、皆同家中のかたぐ計り、外より来りし者もなきに、夜明けて見れば預りの胡蝶の香合紛失ゆる、南無三ぼうと隅々くまぐさがせど、さして是ぞといふ證據もムらぬ身の災難〇心中御察し下されい、新「爾餘の品とは事はかり、お家の重器へ心をかけしは、貴殿へ仇有る者の仕業か、但し鴻野の家國を〇奥には使者の入来といひ、十「けふに迫りし寶の返答、新「かやうな折に、先達てお暇出し橋本次部右衛門殿勤め居られば、又外によき了簡もムらうもの、跡には誰とさし當る、我兄ながら丈左衛門心よからぬのみならず、慾に上なき最後の、十「ヤ、新「いふにははれぬ血筋の

兄弟、主と兄とへ〇十次兵衛ごの早う仰開かれませい、ト思入、相方に成る、下座より、十「新三郎が今の立被レ成たか、ツイと奥へでムり升るな、十「シテ市介、與兵衛とは、市「へい御城下で與兵衛様に御目にかゝると、此お手紙をあなたへお上申してくれど、ト思入、市「ナニ手紙、ト取て開、市「途上で一ぱいたのしまうと、いせ屋へ参るうしろの方で、見れば與兵衛様お屋敷へ行たいが、聞けば兄貴は閉門とやら、夫故これとのお手紙、成程又御兄弟とてあのやうにも似るものか、殊に成田へ願ほごきと御病後の長髪ゆる、ごう見ましてもあなた様、ト此内十次兵衛手紙、十「こりやこりやさうして與兵衛は城下にをるか、市「さやうでムり升る、銚子屋と申す旅籠屋に、十「ム、ト懐中硯を、何やら、市「イエサ餘程の大病さうにムりましたが、へだつた所と申すものは、ト此内十次兵衛思入有、十「こりや、市「へい、〇ト十次兵衛これへい思入、市介に囁く、市介はへい、市「コレ〇心得たか、市「かしこまりました、十「ドレ身共はお次まで、ト立上る、市

「さやうなら旦那様、ト下座にて、十「口外致すな、ト思入、、ト此内十次兵衛思入有、市「ハ、ハ、ハ、さやうにムる、御大切な御家の重器、日夜油断は仕らねど、人に不時の禍有りど、その夜は雨の庚申待、酒もてうじて夜半迄お出の衆中は、貴殿の御舎兄丈左衛門ごのを始めとして、皆同家中のかたぐ計り、外より来りし者もなきに、夜明けて見れば預りの胡蝶の香合紛失ゆる、南無三ぼうと隅々くまぐさがせど、さして是ぞといふ證據もムらぬ身の災難〇心中御察し下されい、新「爾餘の品とは事はかり、お家の重器へ心をかけしは、貴殿へ仇有る者の仕業か、但し鴻野の家國を〇奥には使者の入来といひ、十「けふに迫りし寶の返答、新「かやうな折に、先達てお暇出し橋本次部右衛門殿勤め居られば、又外によき了簡もムらうもの、跡には誰とさし當る、我兄ながら丈左衛門心よからぬのみならず、慾に上なき最後の、十「ヤ、新「いふにははれぬ血筋の

した事が、何事じや知らん、ト思入、相方に成る、下座より、いせんの神開きし手紙をくはへて来る、オ、慥此狎で有つた〇何やらくはへて来たわいの〇コイ、ト狎、、ト狎、、よう来たなく、ト狎、ト此内十次兵衛思入有、市「コレ〇心得たか、市「かしこまりました、十「ドレ身共はお次まで、ト立上る、市

殺される命を助かり後室様のお側勤、その仕合にあやかるやうに、ト抱付くを ぐめ「エ、いやらしい丹平殿、在所に居る内も付けつ廻しつ、こなさんのやうな意地悪に、丹、オ、こりやア尤、しかしさつきむごくしたのは奉公ぶりと了簡して、コレ畜類めどうだく、ト手を持つ ぐめ「エ、コレ放して下さんせ、そんな所じやないわいな、丹、そんな所でないならばこんな所を、ト懐へ手を入れる、おくめうるさがり、手をもぎ を、放す、丹平今の手紙を握み出しちよつと見て、コレ此手紙が今尋ねる、ぐめ「そんなら是を知つてかえ、丹、ヤ、トおも ひ入、ぐめ「よむさへこはい中の文言、丹、それ見られちやア、ぐめ「ドレマア早う、丹、こつちへくれろ、ぐめ「イヤならぬ、ト是より三味せん入の鳴物に成り、おくめ丹平世上り、よろしく見え、序の舞にかはり、此道具ぶんどす、

鴻野館の場二

本舞臺二間の間高足の御殿、一面の金襴、爰に繼橋御前壽に坐し、下の方に左近、ぶたい真中に十次兵衛、上み手丈左衛門、下の方右衛門刀を持て立かゝり、これを十次兵衛よろしくさへ居る、道具留ると下座より郡八先に、伴藏兵馬文次

出で来る、

十次兵衛「こりや倉岡氏、十次兵衛が紛失させし香合を、拷問なして行衛とは、丈左衛門「イヤ盗まれしとはそりや偽り、誠實は人手へ渡し、有右衛門「金子にかへたで、伴、兵、ムらうがな、十「ハテいづれもにはいなお詞、元より實は拙者が預り、人手へ渡しその罪の來るを知りつゝ、さやうな事を、丈「全くせぬともいはれまい、いづぞや鹿島詣の折、潮來の遊里に全盛盡し、それのみならず日頃のおごり、榮耀の金子に香合は質入したであらうがな、十「イヤその噂はみな虚説、此身に取ていさ、かも、有、覺えの有なしお使者の面前、後室様の御前に於て、郡八「今我々が拷問して、トみなみ る、繼橋御前「皆ひかや、皆々「じやと申して、繼「ハテ控へいといはばひかへぬか、ト押へる、みなく 左近「アム他家の拙者が見聞致すに、いづれをいづれといふ内に、詞をもつて鑑とやら、繼「誠はそれと〇知れねども、日頃を見るに十次兵衛、まさか主家の大事の寶人手へ預け、身の榮耀極るものでも〇守りての隙を窺ひ、盜賊のわざに違ひはない、丈「然らば紛失なしたる香合在家は知れしか、其行衛は、十「相知れませぬ、

皆々「なんと、文次「アモシさやうに仰ふりては、有、ハテ文次殿だまり召されい、申さば香合紛失よりけふまで日數立つ内に、郡「是ぞといふべき事もなく、ましてや行衛も夢さんぼう、伴「それでは婚姻猶を延引、兵「結納がはりの胡蝶の香合、相知れませぬで、皆々「濟み升かな、十「そも紛失の砌より、倉岡殿の執成にて直に閉門仰付られ、守り嚴敷門戸の内、禁足致した十次兵衛、鼠が申てくれうは格別、誰香合はごこそここにどうて聞かする者がムらぬ、左「ム、何様にもこれは至極、閉門致せし身の上では、尋詮議もならぬも尤、丈「さうしてお使者、後室様へ南方氏の申わけは、十「サそのいひ譯は〇かやう致して、ト腹切らうとする、繼 「それ留めい、丈「ハッ〇御意でムるぞ、ト抱留 繼「みづからがまだ言付けもせぬ内に氣儘に切腹とは、女子の主とあなごつて、さし付業な十次兵衛、アノ爰な不届者めが、トきつこ 十「ハッ、ト平伏 繼「切腹はならぬ程に、必ず〇イヤサ叶はぬ事じや、控へて居い、ト入にていふ、敵役 丈「アイヤ後室様、實の香合言譯に切腹いたす十次兵衛、おとゝめ有て豊島のお使者へ、皆々「御返答はいかゞ遊ばす、繼「サそれは、ト當惑 の體、左

近此内思 左「その返答承つた、丈「とは又どうして、左「ハテ千島の正様ははまだ御病氣、繼「ヤ、左「御病氣なれば詮方なう、御全快までいつまでもおどりはし印しは延引、有、それも香合紛失ゆる、左「サア紛失せうがムらうが、他家の身共は存せぬ事、一旦殿には御病氣と後室さまのお詞が、則ち使者への御返答、それも主人の後室様、偽り者と流布召さるか、有「サそりやア、左「結んだ御縁はご迄もほごけぬやうに、一軸は後室様へお預け申す、御全快さへ遊さば、その節お家の香合受取り、直に目出、ト掛物の三 繼「それで互ひに、ものゝふの詞も立つて何ほごか、十「我誤りの香合を、夫といはずに御病氣と、後室様の憐愍あるお詞といひ、荒川殿禮は何とも、左「これはしたり禮を受くべき覚えはムらぬ、丈「ハ、ハ、ハ、いつ出ようやら知れぬ香合、夫迄婚禮延引とは、テモ氣の長い使者のお捌、左「それ故短かう此席を、使者は御暇〇後室様、繼「そんならよきに、左「萬事拙者が〇いづれも方、皆々「御役目御苦勞、左「お別れ申す、ト唄に成り、左近十次兵衛へ思入有、向う 丈「後室様、使者はあれでも濟みもいたさう、十次兵衛が身のうへは、繼「香合詮議申付る、十「すりや

拙者めに御詮議を、繼「紛失させた科により、暇をく
 れた十次兵衛、早う寶を手に入れて、首尾よう〇婚姻
 整ふやう、十「そりやモウ粉骨碎身致し、日ならず求
 立歸り、その時お禮を後室様、丈「それがかんじんせめ
 ての事、命がはりにかけめぐり、有「早う尋ねて御婚
 禮、郡「遅いと不忠を重ねる道理、伴「神佛でもせつち
 やうして、兵「素手でおめく、歸らぬやう、文「十次兵
 衛ごの御歸國を、必ずともに相待ち升る、十「その儀
 は氣遣ひおしやるな、日本の内にさへあらば、早速身
 共が尋出し、いづれも方へもその節面談、先づさし當
 る江戸表、これより直に〇後室様、上立、繼「早う出
 立、丈「へ、へ、口では立派においやれど、何をあ
 てごに香合詮議、日數の立つに随つて、尾羽打からす
 浪人者、破れ編笠古扇で、合力受けぬ手段をしやれ、
 十「へ、へ、イヤモ倉岡氏の御深切、失念いたさず
 不日に香合〇いづれもその内、ト唄に成り、十次兵衛花道へ
 ツイとは入る、丈左衛門、繼「アノ時計は、皆々「末の時刻、丈
 「お家の舊例八わたの神酒、急ぎ頂戴遊ばされませ
 う、繼「腰元ごもその神酒土器持参しや、かへで「畏り
 ました、ト合方に成り、奥よりかへで以前の神酒、小萩、仰に任せ

八わたの神酒、女三人「持参いたしましたしてムリ升る、繼
 「武運を祈る八わたの神酒、時刻違へず頂戴せん、ト土
 取上げる、かへで小萩兩方よりつぐ、敵後みなく、丈左衛門と顔見合
 せ思入、丈左衛門に「たりと笑ふくむ、繼「御前土器を取上げる、
 此時揚幕に、新三郎「しばらく、ト言ひく出て、アイヤ
 後室様、その神酒暫く、ト繼「御前土器を下に置き、がてんの
 舞臺へ、丈「ヤイ、弟め、當家の吉例八わたの神酒頂
 戴遊ばす土器を、有「と召さるは、皆々「慮外でム
 らう、新「イ、ヤ慮外でムらぬ、すべて貴人へ奉る膳
 部は元より、神酒にもいたせ、おに役なうては叶は
 ぬもの、それゆるしはしとおとめ申した、丈「だま
 り居らう、夫式の事わきまへぬ丈左衛門ではなけれ
 共、八わたの神酒は八幡より直に主人が頂戴の心を
 以つて、おに役用ひすきこし召すのが是舊例、譜代の
 家來で有りながら、夫をも知らぬ愚鈍な弟、御せんに
 叶はぬ下りおらう〇イザ、頂戴、ト繼「御前土器は、新
 「ヤレ後室様、その古例は去事ながら、いつはともあ
 れ、今日の代参勤めし倉岡新三郎、異變もムらば拙者
 があやまり、是非ともその神酒おに役を、有「これさ
 これ新三郎殿、けふ代参は貴殿と郡八、その相役が

控へてをるに、郡「その元計りがさ、へ召さるは、近
 比身共を押付業、新「ムウおいやらば此神酒を、貴殿
 もごもぐにおに役めされい、郡「ヤ、トぎよつ思入、繼「橋
 入、新「呑まれぬ神酒の入譯も〇割つていはれぬ瓶子の
 内は、門へ思入、丈「古例の時刻を遅滞さす不禮な弟、遠
 ざけ召されい、伴「心得ました、ト伴「藏兵馬新三郎を引立
 さへる、有「右衛門引付て居る、新「まづアノ神酒を、ト二重
 新三郎兩人を左右へ投退け、
 へ驅上り、瓶、郡「イ、ヤその神酒、トついで上るを新三郎
 子を取る、新「お身も相役、相伴いたせ、ト瓶子の口より郡
 つこのみ、
 突放す、みなみ、郡「こりや身共に迄無理やりに、ヤア〇
 ア、ハ、ハ、ハ、ト血を吐き苦しみ倒れて死ぬ、繼「橋、
 御前かへで小萩、繼「文次、女形皆々、文
 「これは、ト此内新三郎苦、新「忠義と恩に毒酒のおに役、
 死ぬる弟が心を察し、不便と思つて兄者人、ト刀を杖に
 左衛門が傍へ寄らうとする、丈左衛門刀のこじりにて新三郎がむれ
 をつく、新三郎是にてたちく成り、アツと血を吐きその儘死ぬ、
 皆々も、繼「ヤ、郡八といひ新三郎、テモ恐ろしい非
 業の死は、文「こりや何者の業ならん、丈「ソレ腰元に
 繩かけ召されい、伴「兵「ハツ、ト立上、かへで、小萩、繼「ア
 アモシ何故、丈「ぬかすまい、代参勤めし二人の外、神

酒へ手ぶしをかけたはそちたち、サア何者に頼まれ
 て、瓶子へ毒は入れ置いた、かへで「イエ、私共はお
 床の間よりこれ迄持参いたした計り、小萩「どうして
 そんな勿體ない、元より誰にも頼まれた、絲「覺えは
 さらくムりませぬ、おゆるし被成て、三人「下さり
 ませ、有「イヤゆるされぬ、のぶとい女め、伴「兵「繩か、
 れ、ト此内下、くめ「イヤその毒の證據は爰に、に成り、お
 くめ以前の手紙を持ち、丹、皆々「ヤアわりやアさつきの、く
 平さ争ひながら出て来る、
 め「後室様、これ御覽遊ばしませい、ト手紙を繼「橋御前へ渡
 まい、立廻り、上より繼「橋御
 前「これを引取る、丹平思入、繼「慮外な下部、下らぬか、丹
 「へい、ト控へる、繼「橋御、繼「その下部に繩をかけや、文「ハ
 ツ、うごくな、ト立かゝる、丹「マア、お待下されま
 せ、こりや私には何の科でな、繼「悪事の一々毒薬をし
 めし合する手紙の文體、名宛は佐倉郡八より、上の宛
 名は切れ、次兵衛と残りし一字の詮議、有「ヤそりやア
 さいせん與次兵衛が、左衛門顔で押へる、丹「ア、モシ
 モシ後室様、一字知れない御詮議に、私がしばられて
 もどうして夫を、繼「知らぬものならなせに又、此手
 紙は争うたぞ、丹「サアそれはな、ト行詰、くめ「モシよ

う存じておられます筈、アノその手紙を、繼ハテモ
 ウよい、たとへ知らぬといふ迎も、厳しく責めてその
 宛名、丹「エ」、ト思入、此内丈左 丈「イヤ後室様、かれめ
 を吟味に及びませぬ、そりや知れて居り升、繼「ム、
 知れぬ一字のその名宛が、丈「憚ながらその一札、取見
 て、コレ上の一字は切れちつて、次兵衛と残るは、出立
 致した十次兵衛めでムり升る、くめ「エ、〇そりや又
 なんて、丈「丈左衛門が思ふには、胡蝶の香合紛失さ
 せ、閉門なしたをおのれが罪と、その身は悔ますおか
 みをうらみ、アノ郡八といひ合せ、毒酒をもつて後室
 様、殿をも失ふ所存と見えた、いづれもさうではない
 か、有「いかにも貴殿の仰の通り、さすれば香合紛失
 も、伴「さいせんこれにて申せし如く、兵「日頃ほたへ
 のこじりがつまり、丹「榮耀遣ひに質物と、やらしつ
 たのに極まつた、繼「そんなら手紙は十次兵衛とな、
ト思 有「なんぼ御最負強からうが、大罪おかした十
 次兵衛、これなりには相成り升まい、繼「分明ならぬ
 手紙の當名、何はともあれ出立した十次兵衛を、一ま
 づ屋敷へ、くめ「アノお跡を追かけて、丈「早速召連れ
 立歸らん、くめ「すりや香合紛失の科をつぐのふはし

にもと、思つた手紙が却つてあなたの、丹「科はのが
 れぬ悪事の密書、くめ「エ、情ない、引破つて、ト丈左衛門
 紙を引取る、丈左衛門すぐさまくめを引廻し
 てボンと切る、落散る手紙は有右衛門取る、 女三人、文「これ
 は、丈「主の悪事を訴人も同せん、繼「それゆる女を、丈
 「不忠の成敗、ト刀を納 繼「どはいへごうやら、ト丹平へ
 思入、
 丈「最早程経し、トつかく 下 皆々「十次兵衛、ト丈左衛
 門向を
 見
 て、 丈「いづれも用意、皆々「ハッ、ト立上る、繼橋御前コレ
 きつこ成る、カケ
 りにてよろしく、ひやうし幕、ト幕の内禪の勤に
 繋ぎ引返す、

侍塚の場

本舞臺三間の間松並木、少し上みへよせて地藏
 堂の様成道具兩扉格子、これに大小を畫し繪馬
 澤山に懸ならべ、前に線香立、檜の花杯立あり、日
 覆より松の釣枝、下の方霞實園の出茶屋、若い衆
 茶屋男にて茶道具を片付居る、都て下總の園侍
 墳の飾付、テンツ、にて幕明く、ト外座と向うより百
 來り、捨せりふにて
 雙方へ別れは入る、
 茶屋「モウ押付け入相であらう、ドレ一荷内へ運んで
 來ようか、ト行列三重に成り、茶屋男、繼櫃の内へ茶釜手杯を
 のせ、これを一荷にして下座へかへき入る、向うよ

り、旅乗物一挺六尺二人若黨二人、兩がけ挟箱持ぞり取り、いづれ
 も旅形にて出て來り、直にぶたいへ來る、此内花道より市介已前の
 形にてわらしを持ち、ト思入、 市介「オ、イ、お駕を暫く、
 大汗に成り出て來り、ト思入、 市介「オ、サ旦那に一寸々々、ト息
 草り取、 市介殿か、ト思入、 市介「オ、サ旦那に一寸々々、ト息
 物の内にて、 十次兵衛「ナニ市介、〇ト乗物の戸けた、まし
 明け、 御出立の
 い、何事じや、市「イエ何事か存じませぬが、御出立の
 その跡を取片づけて居り升内、お屋敷は大騒動、毒と
 やら茶粥とやらで、新三郎様郡八様はその座でお死
 被成ましたを、十次兵衛が業だと有て、あなたを跡
 から追手の衆が大せい見え升ると申す事ゆゑ、葛籠
 を半分片付けて宙を走つて参りました、マア早くお
 隠れ被成ませい、ト思入、みな
 みな思入、 十「すりや市介何
 と申す、毒殺にて兩人が即死なせしを我業と、是へ追
 手の参るとな、市「さやうでムり升、ト思入、 十「ムウこり
 や全く某を失はんとする佞人どもの巧み事と思はる
 る、此儘にして立退かば、いよ、我に決定せん、急
 ぎ屋敷へ乗物返せ、皆々「イヤさやうではムりませう
 が、十「ハテそち達がぞんせぬ事、ト刀を
 取て、 市介此刀は親
 重代、死後の筐は弟與兵衛に、市「すりやお屋敷へお
 歸り有て、十「こりやさいせん申した香合の詮議を、
 與兵衛へとつくりと、皆々「それでは、十「ハテ乗物を

返せと申すに、ト内より戸
 をさし、 皆々「ハア、市「こりやごう
 したらよからう知らん、皆々「ごうといつても旦那の
 仰、市「屋敷へお歸りなされたらこれ、ト乗物の内にて
 ト腹を切 皆々「ひよんな事に成りました、ト乗物の内にて
 思入、 市「ハッ〇せう事が無い、いづれも屋敷へ、ト又行列、三重
 な駕を昇上る、向うは、南與兵衛、やはり五十日、
 づら一本さしにて出て來り、乗物を見やり市介を見て、
 「そちや市介、乗物返してこりやごへ、市「お旦那の
 御意にお屋敷へ、興「イ、ヤそりや悪い、まづ、下
 に、ト乗物を下へ居る、乗物の内より戸を
 明けようとするを、與兵衛ちやつと押へて、アモシ戸を明
 けまい兄じや人、城下で只今承れば、ト駕の内にてすり
 物いふ心、
 や市介に委細お聞被成、夫ゆる屋敷へ〇イヤそりや
 悪い、たとへ事を明るうせんと、只今屋敷へお歸り有
 るとも、佞人どもがどのやうな〇かういふ内も心遣
 ひ、マア、あれ成る霞簀の内へ、早う、ト駕の戸
 を押へ、
 無理やりに乗物に付添ふ、時のかれ日ぐらしの聲にて、みな、ト一所
 に與兵衛よりすの内へは入る、又在郷唄に成り、向うより仕出しの百
 姓旅人下座と揚幕より出て來る、 〇「せなアごへ行くえ、
 〇「行徳の町まで行て來るわえ、△「なんど鎌がへまで
 暮れぬうち行かれませうか、△「モウ七七がどうに過
 ぎましたから、どうしても暮れませうて、×「おまへ

鹿島へ御參詣かな、▲「イエ佐原の方迄行き升のさ、□
「あそこ迄ゑるなら、ついでに參詣なされませ、△」わ
たし共は成田の歸りでムリ升るが、御利生は有ると
見えましたが、いつでも籠りがムリ升て、○「利生とい
へば、此侍塚が近年ははやり升てな、□「ヘイそん
らこれが侍塚かな、○「さやうさ、おんぢいあした逢
ひませう、▲「おらも見世を片付べい、△、▲、□「ドレわ
しらも急ぎませう、トやはりに頼頭にて雙方へ別れは入る、茶
を急ぎ下座へは入る、引ついで南兵衛の内より、以前の人数乗物
袴紫縮緬のしき大小の形に改め、市介付いて出て来る、
「こりやモウお茶もムリませいで、與「イヤ〜、大き
に見世の邪魔をいたした、×「なんのおまへ、トいひな
をま、ドレ歸て夜食にしべいか、トよし簀を、たげ下座へ、與
「市介、市「與兵衛様、與「こりや○兄弟顔の似たを幸ひ、
十次兵衛殿に成りすまし、追手のものを欺きて、事
のぞまば身ごもは切腹、市「アノ十次兵衛様に成りか
はつて、與「サア紛失の香合知る、までは、兄じや人
は此南與兵衛〇身ごもは爰で兎も角も相成るならば
兄の身に、マア氣遣ひはないといふもの、市「成ほど
あなたを追手のものに、いよく〜兄御の十次兵衛さ
まと思はせるには、譜代親仁の此市介が附添て、與「い

かさま、しかし與兵衛に附添ふは、市「ハテ生延びた
命、惜みはちつともムリませぬ、與「出かした市介、市
「與兵衛様、與「こりやど迄も十次兵衛じやぞ、市「へ
イ、ト思入、禪の勤に成り、向うより伴藏平馬いざんの形、
「ヤア十次兵衛、兩人「うごき召さるな、市「すりやあな
た方、ト思入、此十次〇兵衛に御用有つてか、伴「お上
の主意で、兵「貴殿の追手、與「とは又なせ、伴「貴殿が
出立めされし跡、八わたの神酒にて倉岡新三、兵「佐
倉郡八二人りは即死、市「夫を旦那が、兵「だまりをら
う、遁れぬ證據は毒の一札、伴「それお見やれ、トいざん
出ず、與兵衛 與「何〇兼て申談候貴殿所持いたされ候蠻
國射岡毒薬の一種班赤の蜘蛛、急ぎ御こし給はるべく
候、右の毒にて後室始め千島の正殿を、首尾よく失ひ
候に於ては、契約の通り貴殿お望みの儀本望たるべ
候〇上の一字は切れ散つて、次兵衛殿へ佐倉郡八、
伴「十の一字は散失しても、慥な女が訴へゆる十次兵
衛と事極り、兵「後室様の甚おいかり、かゝる悪事を
工むからは、かの香合とても人手へわたし、金子にか
へたに相違なければ、急ぎ追かけ打て取り、首は武州
の豊島家へ、伴「香合がはりに渡すと有つて、兵「我々

へ追手の役目、伴「サア尋常に、兩人「覺悟しやれ、與「イ
イヤ手紙は拵事、かやうな悪事を企つる十次兵衛〇に
はあらねども、申しかすめし上からは、たとへ屋敷へ
立歸り言ひらくとも御許容有まじ、丁度所も侍塚、死
後の面目切腹なす、十次兵衛が冥途の道連、お身たち
とも〜覺悟おしやれ、伴「ヤア追手に刃向ふ十次兵
衛、兵「市介もろとも、そりや心得申した、ト兩人拔連れ
りはげしき禪の勤めに成り、與兵衛拔合せ二人を相手に立廻りの内、
市介もちよつと有つて殺される、ト與兵衛伴藏平馬を當てる、此時
向うより丈左衛門走り出て来り、此體を見て有無をいはずに與兵衛
を後より切り下げる、與兵衛アツと思入、蟲の聲、かすりたる忍び三
重、丈左衛門「モウもがいても十次兵衛、叶はぬ事だ、覺
悟をしやれ、與「チエ、口惜しい、無實の罪に命を捨
つるか、ト思入、人手にやみ〜死なんより、武士の覺悟
に切腹せん、丈「どの道ころすお身が命、そりやごう
なりと勝手次第、ト白刃をおさめる、此時チヨンさ月出
次兵衛には高頬に痣が、ト與兵衛 與「イヤ痣はとくに
抜すても、劔難のがれず、丈「此場で切腹、與「今ぞ
南方十次兵衛、生年積つて三十七歳、ト此時伴藏兵馬こ、
かる、たち廻りよろしく引する、 丈「見届けた〇首は武州の
白刃を取直し腹へ突き立てる、

豊島家へ、丈左衛門が介錯して、ト抜ける脇を、與兵
衛「やんご留めて、
「聲かけるまで、ト突放す、是にて丈左衛門 介錯無用、ト諸手
にて引廻す、きざみ ひやうしまく、跡しやぎり、

當秋八幡祭二

第一番目四建目

仲の町の場
駐春亭の場

役人替名

- 一 山崎屋與次兵衛
- 一 鷺の長吉
- 一 三原有右衛門
- 一 藝者北石
- 一 同小猿勘次
- 一 講中川瀧や市兵衛
- 一 茶や廻り山谷の鐵
- 一 中間空助
- 一 藤や若者藤助
- 一 藝者仙吉
- 一 船橋丹下
- 一 藝者お梅
- 一 同おはな
- 一 同おいは

助高屋高助
澤村四郎五郎
新平
萬藏
栗藏
川藏
熊平
磯郎
富藏
仙藏
次郎
梅藏
春之助
岩次郎

- 一 同米吉
- 一 山崎屋手代權九郎
- 一 書齋佐渡七
- 一 ふちや娘おつね
- 一 藝者ふちやあづま
- 一 山崎屋與五郎
- 一 幻竹右衛門
- 一 奥女中關屋

米藏
市川宗三郎
市川才三郎
七藏
澤村田之助
尾上松助
尾上松緑
岩井半四郎

當秋八幡祭二

第一番目四建目 仲の町の場

本舞臺三間の間茶屋場、軒暖簾青すだれを懸け、長暖簾懸行燈藤屋と記し、正面柵組の障子、立派なる神棚、眞鍮の燈籠杯、極彩色の張壁家體、前揚椽青簾下り、ぼんぼり付の燭臺三挺燈し、毛氈懸たる長床几三脚直し、下もの方丸太の籬を結び、全盛遊と書きし高札を建て、揚幕の際へ大門を取付け、すがきやたい囃子にて幕明く、トぶたいの若者藤助にて、トぶたい片付け居る、トぶたい下座さ花道より侍町人の仕出し色々行ちがひ這入る、トぶたい此中へ交り向うより講中川瀧や市兵衛町人の形り、風呂敷包を持ち出て来る、トぶたい下座より山谷の觀茶屋廻りにて、挑燈を持ち鐵棒を引いて出て來り、藤助「三さん、御苦勞だね、山谷の鐵、藤公、太夫衆の盆踊りと法印の俄は揚屋町へ行つたか、藤、アイ今ちつとどぎれさ、鐵、今夜はがうぎな人でゐるじろぎがならな

の親方の所に遊んでゐる人だらう、鐵、さうさ、市、イヤモシわしはちつと逢はねばならぬ用が有る、是から大音寺前の湯治へ行つて待つて居るほごに、モシ逢つたらあれ迄、藤、お出なさるやうに、鐵、わしもさう申しませう、市、そんなら頼みましたぞ、トぶたい右にて、市兵衛は下座、山谷の鐵は向うへは入る、トぶたい此内すれ違つて向うより鷺の長吉船宿挑燈を提げ、跡より三原有右衛門侍の形り、權九郎手代にて、王子みやげを頭へ、權九郎「モシ三原様、此頃のお洒落はごこでムリ升、長吉、ごこいつたら五丁町中おなじみ、モウ大がいふさがつたには、此長吉もこまり名古屋さ、有右衛門」そこで此ごろはしやに片向ひで大色事、何とおぬしも、長、おつとうら山吹は古し、時に山吹で思ひ出した、わしが妹の藤やの吾妻、いよいよ表向はおまへの名前で、お國元の丈左衛門様が身請被成る御相談でムリ升か、有、サア表向は身共、内證で身受してひそかに國へ送らせてくれと、手附金百兩よこされたを、ツイ身共が、長、サアわしも妹を玉に樂がしたいから、昨日相談した通り、カノやつに言付けてやつたら、コレ此通り承知の手紙、トぶたい手紙を出してみせ、ムウ〇此間頼みの與五郎が紙入取つてやらうといふ文言〇長吉どのへ佐渡七〇是では慥かた、此手紙は

おれが預つて置かう、ト懐へ入れる、ばたくにて向、佐渡七より佐渡七巾着切にて出で、「オ、長吉さんか、長「佐渡七、首尾はどうだ、佐「どうだのこうだのどわしが呑込んだら、ごんな物でもやりやしない、五十間ですれちがひしなに〇なつたり」といふと直に此紙入〇とんだ品玉だ、ト出櫃「成程覺之の有る與五郎が紙入、佐「わしを頼んでさらはしたはごういふ理屈だえ、權「サア此御侍が金の入用、おいらも半口乗つて、思ひ付いた與五郎が此紙入には、此間御渡し被成た御拂米の金の請取、有、此間右の玄米三百俵相渡したといふ請取、此方へ取置いたを、金子濟んで其節引替にいたす筈を、折よく持参せぬを幸ひ、明日というて身共が所持して居る、此書付に物をいはせう爲、長「請取つた金も請取がなければ聞、おれは又妹めが所からやつた起請が入用、ト紙入より出し、たばこ入是をまき上げう計りに佐渡七おへ仕廻ひ、請取も出し、ト紙入より出し、たばこ入主を、三人「頼んだのだ、佐「したり、又おれが上を行く極上々のふと印め、時に約束の金はえ、有「ハテそりや此請取を百兩にした上の事、佐「ハテそりやちつと中位な咄だね、長「成程さう思ふも尤、そんなら請取のは入つて居る此紙入、金をやる迄の形に預けて置く、

そいつはちつと働くには邪魔だが、せう事がない、そんなら早く紙入の身受をたのみ升よ、ト懐へ入權「それは承知だ、是から藤やのみせで、有「俄を見てやらざア成るまい、長「七ばうも今夜は錢だ、佐「それさ、今夜はべらぼうに賑かな晩さ、トすかき成り、かすめた舞臺へ来る、佐渡七はうる／＼あち／＼ある居る、藤助拾せり本に挨拶して居る、此内向より此鳴物にておつれ茶屋娘、跡より關屋やしき女中、空助供にて皮文箱と御おつれ「關屋様、ちつとの用箱をわいおけにして出で来る、ト右の内俄を御らうじてもよいじやムりませぬか、關屋「御用先じやによつてごう有らうかノウ空助、空助「ハイあすの朝七ツ上りに被成たら大事ムり升まい、ト此内向うに竹右衛門「野郎め、引すつて行く、うしやアがれ、ト右の鳴物に成り、竹古衛門角力年寄の形りにて、いさみの若い衆を引すりながら出る、山谷の鐵是をさりさへながら出で、ト鐵モシ關取、間違でムりませう、了簡しておやんないまし、〇「それさ、ツイ喰ひ酔つて廳相申しやした、御めん被成まし、竹「何もおれがかまつた事じやアないが、ごこのか女中に毒をぬかすから、見て居る事のならないおれが氣性だ、會所へつれてゆく、うしやアがれ、關「ヤお前はまぼろし竹右衛門様じやムんせぬか、竹「オ、お主はおはや、ではない今はお屋敷へ行て

關屋どのとやら、けふはごこへ、關「アイちとお上みの御用で、〇それはさうとついにない、つれ「お前の腹立てさんすは餘程の事、竹「イヤサ此關屋殿の事を、こいらが毒をいふが頻りに癢にさはつて來たのよ、〇「モシ、間違ひでムり升、鐵「おつねさん、ごうぞおわびを、竹「イヤ、届ける所へ届けねば成らぬ、マアこな様達はあれへ、關「サア参りませうか、ト右の鳴なく本ふたいへ来る、佐渡七此人敷を見て下座へは入る、物にてみ若い衆ふり切つて逃ては入る、山谷の鐵ついでに入る、竹「エエひごいめに逢はさうと思つたに、つん逃がしたか忌々しい、關「ハテモウようムんすわいなア、有「イヤ是は關屋どの、今日は朝日の如來へ御代參と承つた故、途中で御出合申さうと御待受申した、サア、是へお出なさい、ト床几へおかけさせ、其次つれ「是は有さん始め權九さん、ようお出被成ました、藤「おつねさん長吉さん、今夜は有さんはごこへおつれ申さうね、方々で色が出来てさしをつかれるには、有「コレサ身共が何女郎買〇目端を開て物をいへ、長「それさ、只俄を御見物の御客、お盃の支度でもさつしやいな、氣のきかない、有「イヤ是藤八、俄といへばちつと頼みたい、行つて來てくりやれ、藤「そんならアノあづまさん

の口を、權「是さ口をきかすと行つて來やれ、藤「合點でムり升、トすかきにて關「コレ、空助、其御用箱に有る御佛へ参拜の金子、此紙入へ入れてたも、空「ハイ、ト關屋が紙入をとり、箱の中の金子を出して入れる、此内に佐渡七を見て、いろ／＼うる付き居る、關屋紙入を取關「先達て奥様御不例の折柄御願込め遊ばし、その御利生やら御全快、それに付佛前のお道具一式御寄附、御出入の山崎屋へ申付けしが、出来いたしたかな、權「イヤモウお詔より出来ばへ致しました、御參詣のせつとくと御覽下さりませう、長「イヤ月々の御代參も外々違ひ、賑やかな此吉原、關「其繁花な土地ゆる一しは途中の心づかひ、有「何心遣ひに及びませう、色と酒とで夜を明す身ごもなぞは、折々参つてもさんと心は移りませぬ、御屋敷内にもごんじ寄な女子がムつて、心中立に堅く身持何と關屋どの、よそ外には氣強い女子も有るものでムる、ツイオツと得心すれば手前もよし、跡のへる物ではなし、べつ甲細工より正じん正銘、上る氣はないか、ト手を取った寄る、關屋逃げながら立つ、是にて關「ア、あぶない事、有床几は返り有右衛門、ト右の右衛門様にはきつう御酒上りましたさうな、ト外の床ける、此内に佐渡七關屋が紙入を盗む、關屋一寸見て佐渡七が腕を取つて、かんざしにて佐渡七の手を床几へ突立て、佐渡七いたむこなし、

有右衛門 有「オ、いたい、」關「いたむ筈でムリ升、起上り、おたしなみ被成ませ有右衛門様、御代參の私、佛の罰でも此位な事は有る筈、不義をいたせば人がゆるしませぬ、ト佐渡七かんざしをゆす、得心もないものに心を寄るは、盗をするも同前、かならずつゝしみや〇とサア先の女子は此やうに申すでムリませう程につゝしみや、此上おたしなみ被成ませいナア、ト兩方へ、有「ア、是さ今のは酒狂、そこ元も御心にかけてられな、爰で御異見聞かうより、俄でも見物仕りませう、權ソレソレ關屋様には後程、サア長吉さんお連れ申しな、長「サアわしは大音寺前へ行つて參り升、マア藤屋へお出なされませ、トすがきに成り、有右衛門權九、關「サアわかい者、取りやつた紙入爰へ出しや、トかんざしをぬき、竹右衛門佐渡七、つれ「さつきにから怪しいと見て居りましたが、おまへさんがだまつてお出なされますによつて、竹ソレ〜おれも用捨して置いた、サアいけごろぼうめ、盗んだ紙入を出さないか、ト締、佐「オオいたい〜、出すわな〜、女だと油断してとんだめに逢うた、せう事がない紙入を返すから、爰を放さつせい、竹「マア出しやアがれ、佐「ソレ紙入、トなげ出す、竹右衛門

門取上る内ふごろぼう〜、ト逃げて下座、竹「ハテ逃り切つて、へは入る、足の早いやつだ、しかし是さへ取ればよい、ト關屋見て、關「ヤこれや男の紙入、わしがのこはちがうて有る、ソレ空助早う、ト佐渡七が跡追、竹「ハテどうして間違つたか、よい〜おれが又さがしやうが有る、關「何はともあれ先づ朝日の彌陀へ參詣して、つれ「町の内では人目有れば、大音寺前の駐春亭でお支度被成ませいなア、竹「その湯治風呂へはおれも用があれは、先へ行つて待つて居よう、關「そんなら竹右衛門様、つれ「かねてのおはなしは道々、關「コレ〇サア參りませうわいなア、トすがきに成り、關屋竹右衛門つれ下り權九郎有右、權「藤八、あづまが事はどうだ〜、藤「サア丁度獅子の俄は今仕廻つて、先口をかけてあづま様も來なさい升、有「そりや妙だ、まだ一二番残つて居る俄も見ながら、藤「モ一つお上り被成ませ、ト揚幕やうし木、權「コレそこへ來る俄はたれた、藤「米吉と仙吉でムリ升、有「こりやよからう、酒をもてこい〜、ト下りには成り、米吉師直の拵、仙吉判官にて文箱を持ち出て、舞臺へ來り、米吉「判官のおそいおそい、内に計りへばり付いてゐるによつて、御前の事はおかまひないじや迄、仙吉「ハ、ハ、ハ、是は〜

師直殿には、御酒機嫌か御酒參つたか、米「イヤいつもらしやつた、御酒下されても勤める所はきつとつどめる此師直、ト此せりふにて、耐やいふな侍やい、仙「すりや師直、今の悪口本性でおいやつたか、米「オ、本性、本所でいつたらどうする、仙「オ、本所ならば本所五ツ目、米「五百、仙「やくわん、トやくわんを出す、御茶上らんか御茶、米「まんぢうやおこし、ト兩人驅て下座響る、すがきになり、花道より與五、與五郎「さて〜、今度の俄のやうな人の出る俄もない、それはさうさあづまが俄はモウはてたか、ごこへ出て居るか知らん、仲の町中歩行たらごこのか見世に居るで有らう、ト思案して取返さうとする、此内大太鼓入獅子の鳴物になり、向うよりあづま手古舞の形、俄の弱を持ち、わかいし箱持にて留守居挑燈を持ち、送り出で來る、與五郎頼がぶりして一寸當る、あづま心得立留つて、あづま若い衆に叫く、わかい衆吞込んでふたいへ來り、若「衆「ハイあづまさんの箱、ト二重へ突出し下座へは、あづま「與五郎さんかいな、與「あづま、今夜の座敷はごこじや、あづま「内の座敷じやわいな、與「藤やなら又アノ屋敷の有侍じやないか、あづま「さう思ふゆゑわたくしもきざで成らぬわいなア、與「ナニおたのしみで有らう、早くゆきや〜、あづま「又かいなア、おまへに咄しも

有り、じらさすと聞いて下さんせいなア、與「サアおれも咄しが有るが、爰に立つても、あづま「それいなア、江戸町を廻つて咄しながら行かうかいなア、與「それでは座敷が遅う成らうぞや、あづま「何の、いやな客には待たすがよいわいなア、與「手こ舞じやと思つて氣がつよう成つたなア、あづま「諸事大つばらさ、與「おれも此形りでは茶やで目を付ける、地廻りのふりで、ト羽織をぬき頼がぶりして、あづま「請取にくい地廻りじやわいなア、ト三絃入の神樂に成り、兩人向、與「時にあづま、アノ有右衛門がいよ〜そなたの身受すると相談するかいのう、あづま「サアあの身請にも譯の有る事と思つては居るけれど、何の身受した迎どうした迎、行かうじやなし、與「身受されても行かぬとは、あづま「サア互ひに取かはした起請の通り、つまらぬ時は驅落しても、與「女房に成るか、あづま「ならいでかいな、たとへ二人が手鍋提げ、新内ぶしで暮すのが樂しみじやわいなア、ト此内下座より按摩出で來り、何心なく兩人が側に、エ、モ悔りしたわいな、與「時に吾妻や、我身もたしか五ツ月じやな、あづま「サアそれじやによつて、人さんの目に立たうかと思つて、大てい心遣ひな事じやないわい

な、與「さうで有らうよ、丁度正月が産月じやの、あづま
 「アイなア、與「コレあんまり酒を過しやんな、ひよつ
 と身にでも障らうかと〇しかし誰が子やら知れもせぬに、あづま「モシそりやおまへ何の事じやいな、與「大
 かたゑなは紋盡しの若い者中で有らうぞえ、あづま「コ
 レあんまりな事はしやんす、吉原の藝者は御客と
 色事するはきつい法度、それを知りつ、言かはし、深
 い印しはお中のや、モウくくわたりや嬉しう
 て、おまへに似たよい子をさたのしんで居るものを、
 與「エ、まじめに成つたやつさ、あづま「そんならやつ
 ぱりぢらしかないア〇エ、面白うもない、與「コレあ
 づま、慥かアノ左り孕みは男の子、右ならば女とや
 ら、ドレ一寸見てやらう、あづま「エ、モよして
 下さんせ、トびん、與「コレそんなにつんとする事は
 ない、ちつと見せて、ト引よせ懐へ手を入れる、此内東の花道よ
 折助「エ、畜生め、うまくするな、腹が立つぞ、はつつけ
 め、トよろくする、二人は是とす、あづま「ほんにいろく
 なやつが来て、與「さうよな、そしてまア男の子なら何
 ンど名を付けような、あづま「サアおまへの名が與五郎
 じやによつて、與三郎か與之松か、與「與次郎與吉與

勘平、あづま「それでは奴のやうなわいなア、與「もし又
 ひよつと女の子なら、あづまは江戸の事、お江戸でも
 有るまいし、ト此内下座よりすし賣出で、東のあゆみへかゝりは入る、あづま「紫のゑん
 もあればおむらかお崎、もしごうぞ成らうなら、わた
 しや男の子がほしいわいな、與「あづま、男の子がほし
 いなら男を産むまじなひがある、あづま「アノまじな
 ひが有るかいな、與「サア其兎ひは、トあたりを見廻し傍
 見て、藤「サアくあづま様が御出でムり升く、有
 「ヤアあづま、きつう待たしたなく、權「あづまさん
 待兼ましたく、あづま「是は有さん權九さん、けふは
 伏見町の一番じやによつて、いつち早いでムんす
 わいなア、權「さうさく待たうがどうせうが、お顔さ
 へ見りやたんのうするわいなア、あづま「ほんにお禮か
 ら先へ申しやせう、藤「そこがひとり勤めの吾妻さ
 ん、一つ締ませう、三人「ヨイくく、ト手を打つ、直に時
 より北石箔置釋迦の形、勘次天人の形、回
 向院の番傘を差し、道中姿にて出で來り、北石「天人か、勘次
 「おしやかさん、北「コレ〇戀といふのもぼだいの道、
 回向院の此寐じやかも、本堂のがう天井のそなたに
 逢ひ、勘「夜るく通ふ其内に、賽錢のつかひ過し、北
 「心中して死なねば成らぬ身に成つたか、ハア、〇同

じ釋迦でも嵯峨のしやかは開帳にムつての繁昌、夫
 に引替へ淺間しい、勘「モシおまへの遣ひ過しを嵯峨
 のおしやかさんに、無心いうてはごうじやえ、北「あ
 のやうに見えても、金づくの事、勘「しはいおかたかえ、
 北「さうではないが出来まいよ、勘「そりやなせかえ、
 北「ハテからだ中がしやくせんだんじやわい、皆「イ
 ヨくく、トほめる、兩人床几へかけて酒のみ、又ひやうし木を
 打つ時のかれ大びやうし神樂になり、お梅おいはお
 はな鹿島踊にて出で、花道にてふり有、有「成ほど妙だ、
 三人ぶたいへ來る、渡りびやうし、
 あづま「かしま踊もようムんす、權「何もかもよい内に
 も、一番といふはあづまさんの獅子のおんど、藤「ぶ
 つさらひでムり升、有「さればこそ、此有右衛門が心
 を懸けて口説き、得心さへすれば直に身うけ、コレ色
 よい返事は有馬の松よ、藤屋にまかれて寐とムる、あづ
 ま「モシわたしは藝者、女郎衆に何ほも美しいのがムん
 す、身請成りと店受成りとしなさんせいなア、有「ハテさ
 うびんしやんしないものだ、ト引張りしなだれる、下座より
 與五郎わかい者をつれ出で、あづま「ハテとん
 く、廻し若い者、ハイあづまさんの御迎ひ、權「ハテとん
 だ早い迎ひだ、まだ三味をべんともいはさぬ内、有「直
 し、權「イヤまだ湯治風呂に用も有れば、後の事
 後の事、あづま「左様ならばお近い内、廻し「庄八玉屋に

跡口が懸て居り升、あづま「嬉しいの、トすががきに成り、
 持ち付い、有「何の事だ、俄を見せに呼んだやうなもの
 ては入る、ト此内與五郎あづまが跡
 じや、ト見て下座へ行くを、ア、コレく、そこへ行くは
 山崎や與五郎ではないか、與「ヤあなたは御出入屋敷
 の三原有右衛門様〇權九郎か、權「私もけふは王子へ
 参りました所、有右衛門様に御目にかゝり、あなたに
 御用とおつしやるゆゑ、是でお待ち申しましたが、モ
 シ旦那、よい所で御目にかゝりました、藤「よい所と
 いへばモシ與五郎様、親方は江戸へ参りましたが、モ
 シあなたがお出なら、けふ迄の御約束、あづま様の手
 附百兩せひくけふ、與「ア、コレ〇その金の事も色
 色にしたれど、都合あひはわるし、五十兩持て來たほ
 ごに、ごうぞ是で、ト打がひより出、有「イヤそのあづまは
 身共も執心で、身請の相談いたしかけて有る、與五郎
 身受する金が有るなら、此方の金子返しやれな、與「此
 方の金子とおつしやるは、有「ハテ先達て藏屋敷の御
 拂米三百俵渡し置いた代金、與「エ、權「物覺えのわ
 るい私さへ覺えて居る、先月廿五日お渡し被レ成たソ
 レ三百俵さ、與「コレ我身迄其やうに、其代金百兩は
 此間お渡し申したわいの、有「ヤ何をいふ、此有右衛

門受取つた覚えはないぞ、奥「モシ」そりやマアどういふ事でムリ升、權「どういふ事はムリませぬ、受取らないから受とらぬとおつしやるでムリませうわさ、奥「何を其やうな〇いふても百兩、しかも當月二日お渡し申した受取もムリ升ぞえ、權「受取が有るなら、サア早々お出し被_レ成ませ、奥「サアそれは、どうも、有_レないか、奥「サア其請取を置きました紙入、落しましたか取られましたか、權「モシ若旦那、そんなにふががにふをいつて濟まさうかは、ア、こりやア何でムリ升な、吾妻どのの手附にこまり、渡さぬ金を渡したといひかけをおつしやるのだな、奥「權九郎、大切なお屋敷へ上る金、あづまでも色でもそんな事せうかいの、有「イヤさうで有らう、コレ身共が方には〇右御拂米三百俵受取つたといふうけ取が有るが、ト一札を出す、此時紙入より、ぜんのが、長吉が取つたる佐渡七が手紙を落す、サア此方で其金子請取つたといふ受取が有るか、奥「サアそれは、敵兩人「サアサア」どうだ、奥「エ、コレ見す」渡した金の請取をなくした計り、有「身ごもにいひかけひろごろぼうめ、權「盗人こんじやうさげさつしやるぞ、旦那といはさぬぞ、此權九郎がせつかんして、有「權九郎

藤八、ぶちのめして金をはき出させる、權「藤八合點でムリ升、ト兩人して奥五郎をぶつ、下座よ、イヤアあづまさん、權「番頭のせつかんを女の身で、なせ、皆々「邪魔をするのだ、あづま「イヤ、ヤわたしや女じやないぞえ、三人「なんど、あづま「サア俄の趣向といへど、コレ見やさんせ男の姿、三人「ヤ、あづま「男も男心に角の角繫、堅木の棒じやなければ、中の字きめた、一寸邪魔しに〇イヤさしやくを付けに來やんしたわいなア、ト男の身ぶり、詠の鳴らぬに成る、有「サム、そんならわれが俄の手こまひ、權「きほひになつて、あづま「サアこな様がたの喧嘩の起りは、屋敷の米三百俵、與五郎さん〇イヤ此わかいのに渡し、其代金を渡した、請取らぬといふのが、いざこざの序開きかえ、權「いかにも御屋敷から御渡し被_レ成た三百俵、賣拂つてその金を上げぬから起つた事、有「此方にはコレ右の米渡したと有る一札握つて居る、奥「コレあづまではない〇頭聞いて下され、其金は屹度渡したれど、請取を落したに付込み、あづま「ハテマテようごんす、わしも中じやくにはいつたからは、たとへ向うに角がはへおそれ入谷の鬼子母神、剛力稻荷をいほうとも、こつちも黒助苦勞人、たがひに了簡聖天

川岸、大さん橋の船じやアないが、じゆんわりとくんなんしな、有「おきやアがれ、鳶の者の聲色で、權「此場をちやアふうにしやうと思つても、有「こつちにはたしかな一札、あづま「ハ、ハ、ハ、一札々々ど貸本やの一作が開いてあきれる、ごりやマア其書付を、有「どつくりと見て物をいへ、トあづまあづま「成程こりや與五郎さんがわるい〇此やうな慥な物が有つては、おまへの言譯は立たぬぞえ、ト一札を燈臺の有「ヤア」ヤアコレヤイなせ大事の一札を焼いた、あづま「イヤ此書付は紙屑同前、三人「なんと、トあづま懷より關屋が持出し、中よりあづま「覺〇一つ金百兩、右は御拂米賣拂申候代金相渡され、たしかに受取申候、皆々「ヤア、あづま「山崎屋與五郎殿へ三原有右衛門、皆々「それがどうして、あづま「手に入る所で手に入つた此受取、なんと是でも與五郎さんが盗人か、皆々「サそりやア、あづま「サア」〇たれたと思ふ、水道の水でしやちほこと膝組の兄さん、おどけたやつらじやないか、皆々「ム、ト思あづま「是からは與五郎さんはいじめた仕返し、オイ」みんな早く來て貰はう、はな、梅、いは「合點でムんす、ト下座よりおはな、梅おいは出で来る、奥「ヤそんならわ

しが仕返しを、はな「にくい御人は、た、くよりつねつたり、女三人「こそぐるがようムんす、ト三人有右衛門權九つながら、下座よりおつれ出で、おつれ「こりやマアどうしたのでムんすえ、梅「與五郎さんをいぢめた代り、わしらが、女皆々「こいめのこそぐり、權「ア、ぶたれるよりにた、かれるよりせつない、敵皆々「もうゆるせ、ト三人おつれは入る、女皆々「ホ、ハ、ハ、オ、をかし、あづま「おつね様、おまへのお蔭で御屋敷の御女中様から貰うた紙入の書付が有つた計り、奥「此の與五郎が無實をのがれ忝うムリ升が、此中へ入れて置いた起請が、つれ「そりや又聞いて上げうわいな、時に其關屋様が今宵は駐春亭へ、あづま様おまへも支度して來て下さんせいな、あづま「さうしてアノ三朝さんも、ごこやらの御客でムんすじやないかえ、奥「コレあづま「三朝とは役者の三朝か、おぬしやアノその座敷へ行くの、はな「アレやばな、アノ三朝さんはナ、日本橋の御客で外の座敷、たとへ又一座じやというて何を其やうに、梅「それいなア、其三朝さんに似て居さんす與五郎さん、やきもちとは通らぬぞえ、あづま「おまへが行くのなら行くまいわいなア、奥「イヤさうじやないが、

どうかあやしく思ふから、つれ「おつと是から舞臺を二人にして口舌をさせたいが、おまへ方の濡れは、皆様が見あきて居なさんすといつた。はな、それじやによつて與五郎さん、おまへは今夜は歸らしやんして、あづまさんはやらしやんせいなア、與「さういふ事なら歸りは歸らうが、いは「大門まで送つて上げうわいなア、あづま「そんならわたしも髪結直して行く程に、道寄りせずに歸らしやんせエ、與「そんなら吾妻、あすの晩、あづま「待つて居るぞえ、女皆々「サアムんせ、トはやり唄に成り、おつれあづまは下座へ、與五郎女形三人は向うへは入る、ト下座より與次兵衛羽織町人の形、下駄おけにて出て、花道の方へ行くうして、ふつと有右衛門が落 與次兵衛「合點のゆかぬ此手紙をひろひ、明りに一寸見て、ト腹へ入れる、より下ごまは、羽織袴の侍に 丹下「それにお居やるは、山崎や與次兵衛殿ではないか、與次「ヤあなたは親共御出入の鴻野の御家中船橋丹下さま、丹「一別以來堅固で、與次「あなたも御きげんよう、マ、是へ、ト床几へ せ、扱今日は思ひもよらぬ當所へお出は、丹「サアその元にも御相談申したい儀ムつて、山崎やへ申遣したら、何とやらあじなお噂、只今は當所にご聞き、與次「それは遠方、私も商賣の世話がいやさぞ申すも我ま

ま、家出いたして居り升る、丹「さてこそ、時にそこ元へ○イヤ何、コレ家來、其方は大音寺前の申付けた料理やへ参り待つてをれ、家來「かしこまりました、ト下座へ 與次「シテ私へ御用の筋はな、丹「御出入ならは入る、では明さぬ儀なれど、お家には佞人多く種々の騒動有るが中にも、大切な殿に毒殺、與次「エ、丹「サア御運つよき加護にや、工みし者仕損じ、御身に恙もなく、十次兵衛と申す者に疑ひかゝり、落着して事は濟めども、分明ならず思ふ折から、此程御庭掃除のもの、飛石の下より取出したる一つの手掛り、トふくま包 かの毒藥を祕め置く器が、一角をもつて拵へたる器物、上包の書付が手懸り、與次「ドレ、ト取つて燈臺のあかり ヤ、こりやたしかに親淨閑が、丹「サ正しくばん國に用ひる、與次「射岡の毒藥、丹「包紙に山與の所持と書付け有り、與次「ア是がどうして、丹「覺えが有るか、與次「サそれは、丹「覺え有らば引く、つて御國元へ引かねば成らぬ、與次「イヤ全く覺えはムりませぬぞ、御出入と申し拙者めへ御内談、何卒此詮議は、丹「申付けて呉いか、與次「御恩をおくる拙者が働き、尋出して差上げませう、丹「オ、さう有らうと是まで参つた、しかし

大切な科人、與次「たとへ一門一家たりとも用捨いたさず、丹「糺明なすか、與次「御家へ忠義を、丹「一筋に、トさり繩 與次「からめて出すが、丹「男のたましひ、與次「みかき上げてお目にかけてませう、ト繩さばきする、唄に成り此道具ぶん廻す

駐春亭の場

本舞臺上みの方九尺の障子家體、内に床の間駐春亭の額、下の方一間の離れ座敷向う障子、此間柴垣植込手水鉢杯、いつもの所に門口、爰に關屋おつね北石勘次牽頭持、にぎやか成る鳴物にて道具留る、あづまも藝者の形りに着かへ、ともども關屋を取持居る、向うより四つ手かごかつぎ出で來り、

△「アイちとお頼み申し升、つれ「アイく、○アレおみつさんお客様が、トいひながら、 よう入らしやりまし、トここの 三朝「ア、モシお常さん、御客じやムりませぬ、三朝でムり升、つれ「オヤ三朝さん、ようまアおまへおひどりかえ、三「イエけふは日本橋の御客が御約束ゆる、早く参らうとぞんじました、ちどがくやに用が有つて、ト此内關屋三朝が來た

て立上り、のぞいて見たリ あづま「そりやモウ随分、まアわ何かして、あづまに叫く、トこち 三朝「さん此間は、三「オ、あづまさんか、おまへに聞かせたい、親父が新物が有るよ、あづま「ほんにかいなア、おまへ知つてならどうぞ、三「イエモウわたしもまだ本とうには、北、勘音羽屋の親かたよう、三「オ、是はごなたも、あづま「モシお常さん一寸耳を、トさ、つれ「アイく、○モシ三朝さん、おまへのお出を聞いて、お屋敷のお方がお近付に成たいとおつしやるが、どうぞちつとの間こちらへ付合うて上げて下さんせぬか、あづま、つれ「わたしらがおたのみじやわいな、三「それはまア有難うムり升、しかし柳枝様の方がどうも、つれ「エ、柳枝さんなら、わたしがいやうにいふわいな、三「そんなら一寸参りませうか、あづま「嬉しいね、サアく、トこ おつねさん、おやごからお包が、つれ「ほんにお世話でムんした、ト此内お 盛してある、あづまおつね三「關屋様、あづま「三朝さんが見えましたわいな、三「ヘイ御めん被成ませ、北、勘「サアモシ親方、こちらへ、三「あなたよう今日は、關屋、ハト恥、あづま「サア關屋様、其お盃を三朝さんへ、ト、三「いたゞきませう、關「憚りながら、ト、三「どうぞ又

相替りませす○あづまさん憚り、トのんさやうなら是はけんじませう、ト關屋へ益を戻す、關屋心のうちにて返あたちと御見物に入らつしやりませ、關「どうもお屋敷がむづかしうて、夫でも此春はやうく」の事で、三「入らつしやりましたか、關「二番目がいつそようムりしました、つれ」おまへが左七の折お出じやさうなわいな、關「いつそ田之助が殺される所がかはいさうでムりました、北「おやかたアノ中の字はきつい御出来ね、關「中の字とは何の事じやえ、あづま」アノ中の字とはきはひの事を申し升わいな、關「わたしは又やいどの事かと思つて、勲「北」こりやアよい、ハ、ハ、ハ、ハ、北「モシ親方、中の字で一つ咄しがムりませう、勲「大かた宗叔のやき直して有らう、つれ」是いなア、其咄しは日待の晩にして、あなたもさつきにからわるいしやれもたんと受けてお出なされたによつて、あづま」ソレンレ是からお盆をぐるく廻しにして、おひらきはごうでムんせう、つれ」それがよいわいな、しかしわたしやお歸りのしたくや何やかや、あづまさんおまへ跡をよいやうにたのむぞえ、あづま」そりや合點じやわいな、北「さやうならあなた様、是におこり被レ成すと

又近日、關「アイ又近日ゆるりと、勲「三朝さん、此間に參つて大のみにいたしませう、三「ちと又内へ來なさい、北「そんならあなた、モシ親かた、勲「かさねて逢はう、トリ「つれ」エ、おかしやんせ、トはやり唄に成り、おま三朝殘る、三「さやうなら私も○あづまさんちと二丁町へも來なさい、ト立たうとする、此内關あづま」アモシ三朝さん、まアよいじやないかいな、三「それでも又あつちらが、あづま」ハテあつちは、お常さんがよいやうにいふといはしやんしたわいな、關「あづまさん、それでも折角お留め申して、おたのしみの邪魔をしては、三「何サ、そんな事じやムりませぬ、あつちのお客は男ばかり、皆私を御ひいきの、あづま」三朝さん、あつち計りが御ひいきではないわいな、あなたもきつい御ひいきで、おまへの錦繪計りが御文庫に三つ有るといふ、三「それは有難うムり升、あづま」それじやが、女房さんの有る事を此間御聞きで、ちつとにきいさうなわいな、三「なんのおまへ女房は女房さ、關「あづまさん、ありやみんな啞じやぞえ、三「何おまへうそをいふものでムり升、關「ほんにかえ、ト三朝を見三「大誓文親のあたまに松三本、關「あづま」ホ、ハ、ハ、ハ、

ト笑ひ、あづま立 關「ア、これおまへ、あづま」イエちきたうとするな、關「ア、これおまへ、あづま」イエちきはわるいによ、あづま」何がいな、おんなじやうに、ト二人を次の間へやり障子を締る、叫權「有右衛門様、今の成り、此内有右衛門權九郎出て來り、權「有右衛門様、今のやうす御らうじましたか、有」さうさ、身が惚れて居る奥女中の關屋め、權「朝日のみだへ御代參の途中、此湯治風呂へ立寄て今の放埒、有」何と權九郎、どうしたら腹がいよな、權「どうといつたら、アノ關屋が假親と聞いた船橋丹下が、奥へ來て居るこそ幸ひ、有」引ずり出して恥づらか、せ、腹をいえよう、權「有右衛門様、有」合點だ、ト障子を明ける、内に屏風たてまはし、此合點目のはしをさぐり見て引張る 關「誰じや、ト此内權九郎手ひやうし、屏風の内に、關「誰じや、ト燭を袖に隠し思を引張る、屏風の内より出で、何者じや、關「屏風が守をひき出すは盜賊か、有」イ、ヤ三原有右衛門、關「屏風が放埒見届けた、關「エ、有」丹下殿、放埒者じや横道者じや、出合はしやい、吉もつね出で來り、丹「有右衛門どの、こわ高に騒ぎ召さるは、長」ごんな騒動が出來ました、權「どうといつたら、奥勤の關屋殿が男ぐるひ、有」爰の座敷でち、くり合つても事が濟むかな、つれ「ヤアそんなら關屋様は、丹「何とおいやる、身が娘同

前の、ト關屋がそばへつこりや關屋、そちや放埒の覺え有るか、關「サア、丹「覺えなくばないといへ、女中預りの身ども、殊にはそちと縁有れば猶更濟まぬ、サ、言譯せい、ト 關「サア、長」イヤこりや言譯はムり升まい、なせとおつしやりませ、此お女中が出たあの屏風に、男の帯が懸けて有るからは、寐て居たにちがひムりませぬ、つれ」コレ長吉さん、ありやわたしが平ぐけ、そんなお方の帯ではムんせぬわいな、有」何を何を、よい所へ長吉、その男を引ずり出せ、長」合點でムり升、ト行かうとするをおつれさへるを突退け、明きか、つた障子を明けは入らうとするを、内より此手をしつかりにきつとして、ヤイ、今放埒の合すりめを引出さうとするおれが腕首を、つかまへたやつはだれた、トいふ、與次兵衛「オ、山崎屋の總領、今は無宿の與次兵衛だわ、ト合方に成り、障子を明け、與次兵衛ゆかた置手拭湯有、權「こり上りの見えにて、長吉が手を取つた儘に出で來る、有、權「こりやア、與次「俄の世話もほつとして、此大音寺前の湯治上り、あせを入れる御座敷へ、すね腰をふん込むうぬは何といふ猿松だ、ト突放長「口に地代が出ないと思つて、大きな熱を吹くが、コレエ、おれを知らないか、われが恥だが知らないか、與次「イヤ夢に見た事もない、長」恐らく女郎の一つ買ひもする吉原通は、長吉

船の乗心を知らぬは野暮と唱へる、わしの森の長吉
 といふ三谷堀の土地ッ子だわ、與次「其鷺の森の長吉
 が、なせおれが酒をのむ座敷へ泥すねを踏込むのだ、長
 「サアそりやア、有右衛門様といふお侍、おれがお客の
 言付ゆる、與次「侍ならば無禮といふ事を知つて居よ
 う、夫を知りつゝ、慮外ひろげばまつくらやみ、勘當の
 一徳、親もなければ兄弟もない此與次兵衛、それでも
 すねを踏込むか、オ、ちつと古いが江戸ッ子だわ、長
 「サそれは、與次「サア〜〜〜どうだ、長「ム、有「イ
 イヤたごへ證據なくとも、此所へ立寄つたが放埒の
 證據、丹「こりや關屋、此所へ立寄つたは外に何ぞ御
 用有つてか、さうか〜、かり親なれど親は親、明白
 にはにや武士が立たぬぞ、關「義理有るあなたへど
 うも申譯はムりませぬぞ、いかに有右衛門どのの
 おつしやる通り此身の放埒、つれ「イヤモシせきや様、
 私は何にもぞんじませぬが、さういはずともどうか
 いひわけ、有「何を〜、關屋ちがひは有るまいが、丹「ハ
 テ是非に及ばぬ、ト思案 權「イヤあきれたものだ、さ
 う聞いては、早々請取るものも受納せねば成ませぬ○
 モシ朝日の彌陀のづし佛具一式、奥様の御寄附御用

仰付られた五十兩、御渡し被_レ成て下さりませ、關「い
 かにも落度は落度、御用は御用○ナニ空助は居らぬか
 居らぬか、ト空助 李「ヘイ〜、關屋様御用でムり升る
 か、關「御用箱に入れ置きし五十金、是へ持ちや、李「ア
 アモシ其御金は、最前あなたの御紙入へ入れて上げま
 した、關「エ○紙入へ入れさせたはおそば衆其外より
 銀包の御さんもつ、李「イエ〜、彌陀へ上げる金とお
 つしやつたゆる、五十兩を入れました、ト御用箱より銀包
 を五つ六つ出し、
 コレ〜御さんもつは爰にムります、關「ヤすりやい
 よ〜五十金は紙入、トあご 丹「其紙入いかいたし
 た、關「サア、丹「サアでは済まぬわ、關「じやと申しま
 して、トうろろ 丹「様子はどうじや、關「盗人にとられ
 ました、丹、有「ヤア〜、なんと、李「最前の巾着きりめ、
 ぞこへうせたか何でも尋ねて、こりやかうしてはる
 られねえ、トうろろたへ向うへあ 權「ハテかさね〜の御
 愁傷、察し入り升、ト嘲弄する、丹下 丹「エ、爰な不所存
 者めが、身が方へ出入の竹右衛門が頼ゆる、奥方のお
 そばづかひに差出すには、町人では叶はぬゆる、身が
 養女ぶんにして差出し、わづかのうちに立身、今は重
 役の御奉公を勤めながら、いか成る天魔が見入つて、

かゝる場所へ立寄るゆる、大切な御寄附金迄ぬすみ
 取らるゝは、見下げ果てたる不所存もの、えこひいき
 なき身が成敗、局中へは身が届け、此所より永の御
 暇、有「こりやさうなけりや叶はぬ、權「イヤお暇が出
 ましては、私へ受とる五十兩は、丹「此丹下が返濟まで
 おまちやれさ、權「イ、ヤさうは成りませぬ、しわん
 坊の親方淨閑が手まへ、與次「イ、ヤ親父どのの吝嗇
 は兎も角も、悴の此與次兵衛が待つて上げませう、權
 「イヤコレ悴とは誰が事、もつともこなたは淨閑様の
 本の子なれど我儘氣儘、親に暇をくれと願つて勘當
 うけたれば、山崎やのやの字もこなたの自由には成
 り升まい、與次「サそれは、權「サア〜〜〜○關屋さま
 丹下様、たつた今片付けてもらひませう、與次「さて○
 いま〜しい、せう事がない、ほんの親でも心いきを
 わるく金を溜め、それをとんとく〜人くひ馬にむねが
 わるさに見限つて勘當受け、風來ものゆるいふ事が
 立たない、此場のおしのきくやうに、今日唯今勘當ゆ
 るされてくれるわ、權「なんと、與次「モシ講中の市兵
 衛どの、一寸来て下さいまし、市兵衛「オイ〜、ト相替
 たり成り、
 市兵衛風呂敷包み、與次兵衛殿、わしを呼つしやるは、奥で

段々いつた通り親淨閑どのの頼み、講中一統世話を
 やくを聞届け、勘當ゆりて内へ歸る心に成らしやつ
 たか、與次「サア是までだん〜親父が手を下げるや
 うす、おまへ方の咄しで聞けど斷りをいひましたか、
 急にちつと山崎やの旦那に成らねば理屈のわるい事
 が有つて、市「得心して内へ歸る氣に成れば皆の悦び、
 コレ〜よく〜成ればこそ、爪へ火をともす淨閑
 どのが、身形も悪からうと、羽織着物まで心付けてよ
 こされた、トふるしきを明ける、 有「着物といへば、お暇
 の出た不首尾の關屋が着ておるはおやしきの御紋
 付、長「仰付なら引ばぎませう、ト立 っれ「ア、モシ
 そりやあんまりな、長「何があんまりだ、よい事をし
 た跡は、いつでも赤恥をかくが見せしめ、用捨なく引
 つかむが鷺の森の長吉だ、ト關屋をはく、關屋 有「われつ
 らからば人にもつらし、長「見じめなごまだ、關「ハア
 ア、ト締泣に っれ「エ、憎々しい、關やさんサア〜、最
 前のわたしが着物が爰にムんす、是など着なさんせ、
トそこに有る着物 市「サア與次兵衛どの、こなたも着替
 なさせ帯を締る、市「サア與次兵衛どの、こなたも着替
 さつしやれ、與次「こりや御慮外でムり升、トやつし羽
 織に成る、
 長「與五郎の兄御なら與次兵衛どの、鷺の長吉が一寸

あひたい、與次「アノおれに、長「いかにも、與次「ム、ウ、
ト肩で笑ふ、合方に成り、わしの長吉、此與次兵衛に用といふ
ハ、長「外でもない養ひ金が貰ひたい、與次「なんと、長
 「おれが妹の吾妻が蟲與五郎にいつても、部屋住の一
 文なし、兄は弟をあはれめと御條目の通り、弟にかは
 つて養ひ金くりやれ、與次「ハ、ハ、ハ、吾妻は遊所の
 藝者、色戀はかけはなし、それに養ひ金取らうとは、夫
 婦どでもいふ堅い證據が、長「なくつてはいはうか、そ
 ん所そこのお侍、よい身に成るをかぶりさせるこの起
 請、ト出し、其元様と夫婦のけいやく致せし上は○跡は
 よむに及ばぬ、與五郎様へあづま○何と證據で有ら
 うが、トさし出す、與次兵衛「與次「これ、ト取つなるほど
 急度とした、長「證據で有らうが、與次「成ほど○是が役
 に立つものか、ト折つてふさ、長「ヤイ與次兵衛、なせ
 其起請卷上げた、與次「役にたぬ、ぬ反古ゆるに、長「イ
 イヤおぬしは反古ともむだ書とも、役に立つ所で立
 て、見せるわ、ト與次兵衛がふさころへ手を突込むを、一寸
 立廻りに長吉起請と思ひ手紙をひき出す、與
 次「それ程はしくばやらうが、其一札讀んでみやれ、
ト長吉の長「先刻御頼被成候かの者の紙入、急度ぬ
 すみとり差上申べく候、與次「わしの長吉様へ佐渡七、

長「サこりやア、ト思入、有右衛門懐を、與次「養ひ金しつか
 りと請とれ、ト持たるきせるにて長吉、長「ヤ男の生づら
 を、與次「男とは盗人根性人のすたりもの、紙入の詮議
 仕抜かうか、長「なんと、與次「言ふんあらば與次兵衛
 が聞かうか、長「長吉がいはいはうか、ト兩方立懸らうとする、關
 關「ア、モシ、わたしが事から爰へきなさんした與次
 兵衛様とやら、紙入の詮議もすればするほど此身の
 はぢ、思しめして下さり升なら、とかく此場を事ゆる
 なう、與次、長「デモ、關「ハテ長吉どのとやらも、詮議さ
 れぬが爲めで有らうが、つれ、與次兵衛様、おまへも今
 までとは違ふ、けふからは山崎やの子息じやムんせ
 ぬかいなア、與次「成ほど、こりやわしが誤つた、勘當
 ゆりてまじめな商人を忘れて、でんぼうか何ぞのや
 うに、長吉どの、氣にさはつたらゆるして下さい、長「ハ
 テゆるせと有るに角付合も成るまいかえ、與次「心が
 折ればつい向うみずの額の疵、膏藥代ではない持古
 しの此きせる、トなげ、長「こりやア、與次「四十五匁、
 ちと重くとも持つて下さい、ト長吉おも入、丹「そちら
 が濟めば關屋が身の上、奥方の手前不便ながらも頼ま
 れた元へ引渡さしや成らぬ、ナニ竹右衛門々々々々、

ト合方に成り、障子の、竹右衛門「丹下様、委細はあれにて殘
 内より竹右衛門出て、らず承りました、關屋殿ではない、お暇の出ればおは
 やが身の上御尤、まぼろしの竹右衛門めたしかに引取
 りましてムリ升、權「此場の一件は是で濟みましたや
 うじやが、濟みませぬのは五十兩、與次「そりや此與次
 兵衛が丹下様と相對、丹「彼が諸道具賣代なして追て
 返進、もはや身共立歸るが、有右衛門どのには、有「イ
 ヤ身共は跡に用事ムる、まづお先へ、與次「コレお常さ
 ん、もし與五郎に逢つたなら、此紙屑も小判のはし、身
 を持つきせうに成りをれと届けて下さい、つれ、かし
 こまりました、ト起請を、權「王子歸りに何かのかた
 と思つたに、こりや化かされたか知らん、與次「權九
 郎、王子には相應な一つ穴の野ら狐、きよろしく、せず
 と供をしる、市「サア、はやくムれ、ト丹下關屋が、着物
 兵衛權九郎花道へ懸、關「アモシ丹下様、是迄の御恩を無
 る、關屋あさ見送り、下「此身の不所存、御免被成て下さりませ、トのこり
 竹「心がらとはいひながら、有「おはき、の奥女中が、
 關「見すばらしい此すがた、權「勘當の極樂とんびが、
 與次「分限の旦那と早がはり、つれ、悟れば佛、長「迷へ
 ば修羅、關「夢と思つて、トほろり、丹下有右衛門、與次、長「サ

アムりませ、ト眼に成り、丹下與次兵衛市兵衛權九郎向へは入
 與五郎そつこ、有右衛門長吉奥へは入る、屏風の内よりあづま
 出で來り、與「おはや様、まんまど首尾よう、あづま、
 つれ「おいとまを、關「モシ、ト時の鐘、御首尾がようてモ
 ウ取りにくいお暇も、おまへ方のせいで望みも叶ひ
 嬉しうムんす、竹「ヤア、是はおはや、お暇の出る其
 身持、異見いほうともおもふ所に、こりやごうだ、あづ
 ま「サアおはや様の不身持は、お暇のぞむこしらへ事、
 竹「なんだと、はや「わけをいはねば御がてんが參り升
 まい、竹右衛門様堪忍して下さりませ、お前を頼ん
 で鴻野のお屋敷へ御奉公に上りましたも、いひかは
 した男が有るゆる、與「せつかく上りなすつても、其御
 人はお國詰とやらで、顔を見る事さへならず名計り
 聞くをたのしみに、勤めてお出の其所が、あづま「不慮
 の事で其御方は他國被成たさうなゆる、たどへいづ
 くの果までも、跡を慕うて行かしゃんすお心で、つれ
 「御恩の有るあの丹下様とやら、まぼろしさん、おまへ
 さんが御屋敷のお首尾がよいさうにムんすゆる、お
 暇も願はれず、それであつちから御いとまの出るや
 うにどけふの趣向も、はや「みんなわたしが此お方々
 にわけをいうて頼んだゆる、竹「それでもアノ三朝と、

與「サア其三朝は此與五郎、おつね様がのみこんで、音羽やへ人をやつた所が、けふは二番めの稽古とやらで、よんどころない斷りとやら、あづま、わたしに相談をなささんすゆる、幸ひわたしがいひかはして居る與五郎さん、色の慾目じやないが、三朝さんに生うつし、いつそ與五郎さんを三朝さんにしたて、かうかうしてはごうで有らうと、作者はわたし、つれ、それから音羽屋へ人をやつて、三朝様の羽織や着物をかきよせ、急に役者衆をこしらへて、お早さんの望みの通り、與「お暇の出るやうに三朝氣ごりでごうかかうかやりつけ、おはやさんの望みも叶つたといふもの〇やうすといふは、女三人、此通りでムんすわいなア、竹「したがいひかはした男の他國、行衛を尋ねて逢ひたいはかり、けつかうな身の上を、拵へ事して暇を取るとは、男の意氣地も女の操もそこらだ、おはやぼう出かした、は、おまへに咄したらしからさんせうと思ひの外、悦んで下さんして、モウ日本晴れがしたやうに、嬉しうムんすわいなア、竹、時に改めいふには及ばねど、おぬしが親甚五兵衛とは香友達、死ぬ枕元へおれを呼んで、兄の甚兵衛めはアノやうな惡

もの、親のない後はどのやうな見苦しい奉公にも出し兼ねないやつ、わしが死んだらあまめを世話してくれと頼んで往生、それからおれが引取つて置く内に、兄めは江戸を帆をかけて、上州あたりへ行つたと聞いたが、今は千住の先の竹の塚に居るとの噂、心が直つたら是にも尋ねて逢せようと思つて居るが、は、イヤもう兄様の事はあとへ廻して、竹、その男の行衛をたづねる、といつた所が長の旅、與「路銀の用意は、あづま、ムんするかいなア、ト奥、佐渡七「其金はわしが持つて居り升、ト合方に成り、佐渡七出、與「ヤこなたはさつき、の、佐渡七といふ巾着切さ、あづま、つれ、エ、佐、わしがこなたまで晝齋と聞いたたら、こはい者とも思ひなさる筈、成程是迄はきやうじやうきさる度遠島へも七度ゆく所を、ごういふ廻り合せかのがれたゆゑ、人が佐渡七々々と仇名を呼ぶ程にわるい者であつたが、けふ奥山の茶屋で、アノ御女中様が片蔭へ呼ばしつて、かうくした入わけ、言かはした男の行衛を尋ねに出ねば成らぬが、御奉公の身分なれば、着類諸道具も賣しろ被成ぬ、それゆゑ御上みの御金なれども、こなたの盗んだぶんにして戻して下され、御屋敷

への濟方は右の品々が引あて、男と見かけて頼むの一言、竹、そんならおはやおぬしを頼んで、佐、サア女でさへ一旦言かはした男を變せぬ深切、是を思へばア、おれは淺間しい根性、元ぬす人は不義理からと、ふつと思つて惡念發起、呑込みましたと請合ふやさき、長吉ごの又候たのみ、は、様子聞いて最前の紙入も、皆此人といひ合せ、與「すりや此與五郎が難儀も佐渡七ごのが、佐、根性を直す、手始めの立役、摺かへて驅出したおまへの紙入は茲に、サアよく金をあらためて受取つて下さいまし、トいづんののみ、入金を渡す、あづま、ほんに見た所はこはいが、つれ、やさしい心ざしじやわいのう、竹、惡に強いは善にもつよし、是からおれが無盡でもして商でもさせてやらう、佐、關取、お頼み申しませう、つれ、イヤもう何もかも首尾よういたおはやさんの身のうへ、是から其御方にもツイあはしやんして、あづま、それいなア、相ぼれ同士中のよいのが見たいわいなア、は、さういうて下され升と、ごうやらモウその御人に逢うたやうな心がして、與「イヤ嬉しがり様め、は、ア、レモウなぶつておくれ被成升な、それはさうと其御人に逢うたら、眉も落し、竹、女

房風にやらにやアならない、は、形りも高等にせにや成るまいし、佐、飯も朝夕とりせんで、與、あづま、つれ、エ、エ浦山しい事じやなア、竹、時に肝心の事を聞かなんだ、おはや、おぬしがいひかはしてゐるといふ人の名は、は、鴻野の御家中南方十次兵衛様といふお方、佐「待ちなさい、其南方十次兵衛といふ人は、八わたの侍塚で腹を切つて、其首が千住で獄門に懸つて居升ぞえ、は、エ、竹、成程さつき丹下様の咄し、うはの空で聞いて居たが、其十次兵衛といふ人は獄門に懸つたこの噂、は、エ、そりやマアほんの事でムんすかいなア、竹、何啞をいふものか、は、モシおまへもほんの事でムんすかいなア、佐、何偽りをいふものかな、は、ヤ、そんならアノ、竹、死んだよ、は、そんならいよいよ、佐、首になつてゐるよ、は、ヤア、きよきよのふ迄も今までも、行衛を尋ねて逢はうと楽しみに暮して居たが、こりやマアどうせう何とせうぞいな、ハ、ト狂風のこさくうろくして泣落す、與、あづま、モシおは、五郎あづまおれもあちこち付まじひ、おはや、モシおは、おはやさん、そりやもつともムんすが、其やうに氣をもんでは煩ふわいなア、與、ソレ、何事も約束事とあきらめるがよいわいのう、つれ、こりやマア氣の毒

な事に成つたわいなア、毒なる思入 竹「コレおはや、
 どうするものか、いつた迎死んだ子のごし、マア、
 さうして居て癪でも起ればわるい、コレ佐渡七、是
 をおれが内へ送り届けてくりやれ、佐、合點でござんす、
 サアおはやさんとやら、わたした一所にあゆびなさ
 い、トおはや物ははずに、背負守りの紐にて腹帯して、 藤助「モシ
 ぼう然と思案して居る、此内向うより藤助出で、
 モシ與五郎様、親方才兵衛が歸りまして、あづま
 んの手附けふ迄の御約束、婿が明かねばこちらの
 侍有右衛門様の手附受取る、たつた今返事聞いて來
 いといひたて、の催促でムリ升、與、サア其手附に五
 十兩は用意して持つて居るが、マア半金受取つて、藤
 「イエ、百兩でなくば請取るなど、此おつねさんに
 は似ない兄御の氣質、あづま、與五郎さん、手附が濟ま
 いでひよつと侍の手附がすまば、わたしや生きては
 居ぬぞえ、與、サアそりやわしも同じ事、どうぞお常さ
 ん、任様は、つね、サア兄さんでもあいその盡きた無得
 心、與、こりやまアどうしたら、あづま、つね、よからうぞ
 いなア、ト此内おはや、 はや「それ、トいせんの五十 與「こ
 れは、はや、申し與五郎さん、けふのお世話も他生の
 縁、手附の高は百兩とやら、足らぬ五十兩はわたし

貸して上げませう、あづま「ヤ、そんならアノおまへが、
 佐、わしが持つて來た此金を、竹「貸しておぬしは、はや
 「サア言かはした男が生きて居るといふではなし、ご
 うで此身は、ト思入、 いらぬ金、せめて役に立てるが、ア
 ノ世のため、ト金と與五郎が、 與「そんなら貸して下さる
 か、竹「ア、いひ出してはてこでもいかねえ、與「かた
 じけない、コレ爰に五十兩、トふさこのうち、是でちやう
 ご百兩、あづま「お常さん、急度渡して下さんせえ、藤「わ
 しは有右衛門様に、此事をお届け申さねば成らぬ、
ト下座へ、 つね「イヤモウ此金さへ有れば、兄様に無理は
 入る、いはさぬ、請取はわたしに急度イヤ請取といへば、
 最前兄御の與次兵衛さんが、おまへに上げて呉いと
 コレ、ト起請を、 與「こりやあづまが起請、あづま「失うた
 と思うたに居るといひ、手附も濟んで此やうな、與「嬉
 しいか、あづま「是が嬉しうなうてかいなア、竹「二人リ
 の悦びに引かへおはやが身の上、はやく内へ行つて
 酒でも呑みやれ、あづま「おはやさん御恩はわすれぬ、
 與「佐渡七のごとやら、頼みましたぞ、つね「わたしは
 手附の事を兄様へ早う、竹「おれも一所に、コレおは
 やモウ與へ行くぞよ、トおはや、 はや「モシその干

住へは、爰からどう行き升ぞいな、佐「小塚原へは三
 谷を下りて中田をぬけ、竹「左リへ附いてまつすぐに
 行けば、はや「御仕置の場所とやらかえ、竹、佐「さうさ、
 はや「かたじけなうムんす、ト時のかれはやき唄にて、おはや
門おつね思入有つて、奥へは入る、 ツイと向うへ走りは入る、竹右衛
門おつね思入有つて、奥へは入る、 與「こりやあづま、
 あづま「ヤアこりや與五郎様をどうするのじや、有「手
 附が濟んだらやぶれかぶれ、山谷の鐵、與五郎、われに意
 趣がへし、藤「た、んでくれろと頼まれた、三人「うし
 やアがれ、トもみ合ふ、あづま、これささへる、下の方より長
三人をなぐりする三人、 與「ヤアごなたか知らぬが此場
 はうく下座へ逃込む、
 のなん儀、あづま「救うて下さんして有難うムんす、長
 「禮に及ばぬ、妹おれだ、ト頼む、 與「ヤ長吉ごのか、
 あづま「兄さん、日ごろおまへがおくる侍づらをと、か
 しやんしたは、長「氣遣ひせまい、けふからおれも與
 五郎さん方、あづま「そりやアまアどうも、長「うたがふは
 もつともだが、さいせん兄御の與次兵衛さんに逢ひ、
 頼むとの一言、呑込んだ證據は貫つた此きせる、ト與
衛にもらひしき、 與「成はごこりや兄貴の好み、覺が有る、
 あづま「そんならおまへもともく、に、長「世話をする
 のも侍へは内證、コレ手附の濟んだら腹立ち、與

五郎さんにどんな仇をせまいものでもない、ちつと
 もはや此所を、トつれて行、 いやあるいては不用心、
 かごの衆や、ト下座よりいせんの、トこ、 ハイおめし
 被レ成ませ、長「サア、是へのつてちつとも早く、與
 「そんならおれは歸るほごに、トかごに、 あづま「あすの
 朝は早う便りを、長「ハテおれが送つて、歸りに返事は
 ○かごをいそいでもらはう、ト三重時のかれにて、與五郎乗
る、あづま跡見送り居る、 つね「モシ、あづまさん、今侍
 と勘治北石が咄し、與五郎さんをだましてつれ出し、
 ぞんぶんにすると三人連だつて、土手の方へ行つた
 わいなア、あづま「ヤ、そんならやつぱり兄さんも、つね
 「侍と一つ、與五郎さんが氣遣ひな、あづま「こりやか
 うしては居られぬわいの、ト帯引締め行、うさする、 兩
 人「さうはさせない、トか、 竹右衛門出で、ト竹、 久しぶ
 りでもんでやらうか○ヨンヤサ、ト山谷の鐵を見、 あづま
 「これは、つね「かまはずとムんせ、あづま「さうじや、
ト家置離子に時のかれにて、あづま一さんに向うへはしりは入る、竹
右衛門は藤助をひき付ける、山谷の鐵おき上るころをみつれおさ
へる見、よろしく幕、ト幕の内聖天はやしに、
 得にて、

本舞臺三間の間高足の土手、なだれに棕櫚の葉にて仕たる草生茂り、尤此ごて廣くして能き所に前へ出し、後ろ黒塀に白壁の土藏二つ、田町の裏を見せたる道具、爰に北石勘次鉢巻尻からげ、息杖を持ち駕籠の傍に立かゝり、長吉有右衛門は與五郎を引付け居る、家體ばやしにて幕明く、與五郎「すりや此與五郎を、こなた衆はだまして爰へ連れて来たのか、有、知れた事だ、あづまに身ごもがほれたといふは啞、まことは御國元の重役倉岡丈左衛門ごの執心で、たのまれて身うけの相談、北石「得心して行けば仕合、藝者中間のともく、あづまへす、めても、おぬしといふ蟲が有るゆる不得心、勘次「内は名代の分限でも、自由にならぬひつてん客、そこでおいらが有右衛門様に附いて、おぬしに思ひ切らせるのだ、長「妹が出世をさまたげるのみならず、最前うぬが兄の與次兵衛に、みけんを割られた意趣がへし、さいなんて腹をいなのだ、妹とのいたとぬかしてしまへ、與「ムウ兄貴のさせるを證據に實らしく見せ、人をだます人でなし、ごのやうにいほうと、あづまをのいたといふものか、有、何をこしやくな、いはねば有

右衛門がかうするわ、しにぎりこぶ、勘「ソレ〜のかねば、小猿勘治がかう引かくわ、北「あたまは丸いが氣は角の有る石井北石、有、はなしのたねだ、此野郎をぞんぶんにしる、皆々「合點だ、ト皆々して與五郎をさいなむり、あづま走り出で來、長「わりやア妹、三人「あづまどうして、あづま「どうとうたら此やうす、聞く所で聞いて來た、サア有右衛門さん、其外ごなたも男のやうにもない、たつた一人りの與五郎さんを大勢して、ほんにお手柄な事でムんすなア、三人「サそれは、あづま「サアわたしが来るからは、ゆびでもさゝす事は〇というた所が女子の事、殺すなりと突く成りと存分にしなさんせ〇わたしに疵が附いたなら、おまへ方もたのまれてムんした丈左衛門さんとやらへ濟まうわいなア、三人「サアそれは、あづま「知つて居やんす、おまへは表向き、内證は丈左衛門といふ田舎の御侍、玉屋で一度出たお客の差がねといふ事は知つて居るわいなア、有「ア、コレ、與五郎こそぞんぶんにすれ、おぬしにちつごでも手出しをしては、重役の丈左衛門ごのへ、あづま「サア濟まぬによつて切らしやんせぶたしやんせ、ト有右衛門へ身をすり付け、有右衛門「いさく成る、サア勘治さん、おまへも猿智

惠な、與五郎さんをするやうにわたしをた、かしやんせぬかいな、ト又勘治へ右の通りす、サア北石さん、おまへもかみ新といはれた時分の力こぶを出して、ごうぞしなさんせぬかいな、ト北石に右の通りする、北石「ホ、ホ、ホ女子のわたしが夫ほごにもこはいかえ、與五郎さんご一所に殺さるれば本望じや、吉原の藝者にもちつごは蟲が有るわいなア、三人「こりやアてこでも行かねえわ、長「ようござんす〜、此料理方はわしがするほごに、おまへ方は此長吉に任して、八百善へでも行つて上つてムりまし、勘「そんなら親ぶん、八百善をたゝき起して、北「有様ご一所に待つて居るほごに、有「必ず吾妻が得心するやう、長吉ぬかるな、ト脇差を長北、勘「サアムりませ、ト時の鐘にて三人與へは入る、あづま思入有つて長吉がむなづくしを取る、合方に成、長「こりや何をしやアがる、あづま「何をするとお兄さんエ、おまへはナア、あらためいふではムんせぬが、元お前はほんの兄さんじやムんせんぞえ、わたしがちいさい時二親に死わかれ、田舎の伯父さんが引取つて行かしやんすところを、かごわかすとやら〇江戸に身寄のなさに、其まゝ、いつともなしに妹と

め、わたしや餘所で聞いて知つて居るぞえ、デモ兄といふ名が有ればこそ、ぬしにいひかはしても是迄のみつぎ、マア何ぼじやと思はしやんす、それにまアあのやうな悪者と一つに成り、ようも與五郎さんを、長「やかましいわえ、昔はごんな事を仕やうと今は妹のうぬ、部屋住のしみつたれにくつ附けては置かれな、サア與五郎め、思ひ切つたごぬかせ、與「それほごいふなら思ひ切らうが、コレ此やうに起請までよこしたあづま、あれが得心する心なれば、そのうへに返事しよう、長「サアあまめ、與五郎と切れてしまへ、あづま「いやじや〜、長「いやだごぬかせばかうだ、トぬおみにて、與「こりや又あんまり、長「寄りやアがるな、おれが妹をおれがせつかん、うぬも邪魔をすればかうだわ、ト與五郎「あづま「こりや與五郎さん迄を、長「ぶつてもよい、おれは小舅、我れが爲めにも兄だぞよ〇コレ、ト與五郎がもつて居る、起請を引たくりよむ、夫婦の契約いたし候〇女房の兄ならうぬが爲めにも目上だ、弟め妹め、ト兩人を、手出しをして礫にかゝりたいか、あづま「すりや兄をかせに、與「舅をいひたて手出しも成らぬか、兩人「エ、ト口惜しがる、長「其つらはなんだ、くやくばサア是で切れ〜、

ト與五郎がわざしをぬき、與五郎にもたせ我からだへすり付、おれを切るとも縁を切るとも、二つに一つの返事をしやアがれ、あづま「いやじやいやじや、ごのやうにいうても起請に書いた神おろし、夫婦のゑんは切らぬわいのう、長「エ、いま〜しい、さうぬかせば此起請かうして仕まふわ、裂き、かうしておれが縁を切つてくれるわ、與縁が切れるれば他人の長吉、覺えたか、ト長吉が突付けたわき差を取つてぐつ立、長「ヤ切つたな〜、トしがみつく、たち廻りよき切つて、手の上にてつかみ合ふ模様の眞の面白き立、此内長吉與五郎が小指なくひ切る、トあづまも手傳ひ思ひのまゝに仕さめる、時のかれ忍び三重にてさめぬをさし、是より兩人震へ出し、こはげ立つて腰の立たぬ思入にて、起請の破れしを拾ひ、よいほごに兩人花道へかゝる、ト奥より土手の上へ與次兵衛小提燈を燈し、何ごころ、與次「こりなく出て來り、長吉の死骸につまづき明りにて見て、

やしが、與、あづま「エ、トあづまろくひやうしに、與次兵衛手挑燈打つ、與次兵衛 與次「ハア、生酔ださうな、ト是をさざこなし有つて、

幕の内時のかれ三重にて與五郎あづま向うへは入るこ、

シヤギリ

當秋八幡祭三

第一番目五建目

千住札の辻の場 同御仕置場の場

役人替名

- 一 甚兵衛女房お賤 市川團之助
- 一 入間彦助 鶴十郎
- 一 質屋善六 善次
- 一 野臥 栗藏
- 一同 熊平
- 一同 仙藏
- 一 奥女中關屋 岩井半四郎
- 一 南與兵衛 坂東三津五郎
- 一 駕の甚兵衛 松本幸四郎

當秋八幡祭三

第一番目五建目 千住札の辻の場

本舞臺三間の間上の方へよせて高札場、下の方 葎簀張の掛茶屋、後ろ黒幕、茶見世の床几に仕出し三人、善六質屋にて腰をかけ、銀平茶屋の亭主にて茶を汲み居る、在郷唄にて幕明く、

銀平「サア〜、ごなたもお茶をお上りなされませ、△

「時に御亭主、けふは此千住の札の辻に追放者が有ると聞いたが、ほんの事でゑるか、銀「さやうでムり升、ごんなわるい事をしたやつか知りませぬが、以後のみせしめ、此御條目の下で拂はれるとの御沙汰がムり升、○「此ありがたい世の中に、ゆすりをしたか申着を切つたか、□「但し親の腹の上でも乗つたか、何でも悪いやつでムらうて、善六「イヤけふ爰で拂はれるやつは、駕昇を商賣にする甚兵衛といふもの、わしやア念頃だが、牢へは入る科を仕出すとは、人の心は知れないものさ、□「ごんなやつか見て行きたうムるが、モウ日脚も七ツ下り、○「拂ひ者より腹の用心、麥飯

でも喰ひませう、仕出し皆々「サア〜ムれ、ト又在郷唄出しは向うへかゝる、此内花道よりお賤やつし世話女房にて、前だれに着物を包み抱へ出て來り、仕出しは摺違つて揚幕へは入る、お賤ぶたいへ、善「オ、こりやおしづごの、何をしてムる罎の明かぬ、お賤「オ、善六さん、そんならモウこちの人は見えられましたかいな、善「イヤまだ來はしないが、甚兵衛の來ぬ内に、何かよく極引をしようかと、わしはさつきから來て待つてゐるわな、賤「サアわたしも早う來ようとお氣はせけど、五十日餘りも牢舎して居る甚兵衛殿、内へ連れて往かぬ迄も、着るものや何やいや見苦しいとせわしいで、爰へ來るにも道を違へ、ほやら、嬉しいとせわしいで、爰へ來るにも道を違へ、ほんに急げば廻り道して來たわいなア、善「そりやア尤でござんすが、甚兵衛ごのが赦免するも、此善六がかけでムるぞや、賤「そりやモウいはいでも知れて居り升わいなア、善「夫計りではない、五十日餘り内のくらし、賤「それも存じて居り升わいなア、善「まだ〜牢見舞御町役人のつけ届け、賤「急度忘れは致しませぬわいなア、善「サアそのつゝまる所を相談して置いたが、夫はよいかえ、賤「ハテ女子でこそあれ、わたしも甚兵衛が女房しづ、御たいだん申した事を間違つてよい

ものでんすかいなア、善「夫さへ極れば〇ア、しやべつて咽がかはく、御亭主茶を一ぱい下さい、銀ハイ〜ぬるくして上げ升、善六茶善「時に御亭主、科人はモウ来ようかの、銀「さればでムリ升、御代官様の事私どもには知れませぬ、善「程の知れない事、殊に亭主が追放に逢ふをそばで見ても居られまい、ノウおしづ殿、賤「さやうでムリ升、ちつとの間なら、主の心も直る爲め、天王さまへでもお参り申して参りませうわいなア、善「そんなら牛にひかれて善六も一所に〇御亭主天王様はごつちだの、銀「私も水を一さげ汲みながら教へて上げませう、善「そんならおしづどの、賤「御一所に参りませう、何じややら足も地に付かぬほど嬉しうムリ升、善「あのやうな恐しいものでもそのやうに、賤「ハテ亭主と思へばかはゆうムリ升わいなア、下唄に成り、銀平手桶を提げ先に、善六お賤付いてうぶがは股立の侍二人棒をもち、跡より甚兵衛おしきせを着たる科人にてしげられ出る、此繩をせうぶは股立の侍ひかへ、跡より彦助股引ぶつさき羽織の侍にて警固し、侍皆々「下に居らう、甚「へエて出で来り、直にぶたいへ来て、彦助「コレヤイ甚兵衛、その方イ、トよるく下に居る、彦助「コレヤイ甚兵衛、その方事、此方領分竹の塚にて辻駕を渡世にいたし、商賣は出精せず、喧嘩博奕を心がけ無法の舊惡、殊に此方領

分草加宿にて金百七十兩、かたり同前の掠金、残らず酒食諸勝負に遣ひ捨て、死罪にも仰付られべき所、妻しづ右の金子先かたへ相濟し、雙方より度々の御慈悲願といひ、此度鴻野家のお目出たに付、命を助け此所より追放仰付らるゝ、御慈悲ありがたう存じ奉れ、善「有難うムリ升、彦「向後生根をあらため、おのれ眞人間にならぬと、聊な惡事でも今度科を犯し入牢なすと命がないぞ、善「イヤモウ血の氣の多い向う見ず、人の異見も空吹く風、喧嘩かうじてぶつたくりゆすりかたりの詞質、とつても〜焼石に水責火責はなんの事、二言めには大それた、くらい所で御扶持の飯が喰ひたいと、口から出次第無法がかうじて、是で丁度三度めなりや、今度は赦免は有るまいと、身にしみ〜と後悔いたしてをりました、慈悲は上みから御追放とは、有がたいやら冥加ないやら、イヤモウ是にこりぬ儀はムリませぬ、トそら泣、彦「後悔し居つたとはまだしも、已後をきつとつゝしめ〇ソレきやつがいましめとけ、侍皆々「畏つてムリ升、ト甚兵衛が、サアいづれへ成りとも立のきをらう、ト甚兵衛立たうとして立たれぬ思入、

に足腰がたちませぬ、侍皆々「のぶとい事を、早く立ちをらう、彦「こりや〜荒氣にいたすな〇そりやその筈、しばし猶豫はいたしてくれう、氣を休めて早く立のけ、善「有難うムリ升、彦「身は當所の庄屋へ外御用にて立よれば、その方ごも直様役所へ、侍皆々「かしこまつてムリ升、彦「こりや甚兵衛、必ず領分へ足踏はかなはぬぞ、ト合方時の鐘にて、彦助は下座へ、わかいしゆの侍は向うへは入る、甚兵衛跡見送り立上つて舌を出し、善「きやうせうをきる時、弱い音を出すは科人の付目、すね腰立たぬといつたら、ほんの事だと思やアがつて、荒氣にするなどは大笑ひだ、おがらでこしらへたからだでは有るまいし、こんな事で弱つておたまりが有るものか、大べらばうめ〇時に赦免して出やア出たが、ちやんころなしでもつまらない、是から千住の權が所へいたぶりに行かうか〇但しはかたりを思ひ付かうか、なんでも金のつるを工夫せねばならない、ト手をくみ思案、此内、彦「甚兵衛、おのれまだ心が直らぬしるへ彦助取つて返し、彦「甚兵衛、おのれまだ心が直らぬな、善「ヤ、彦「かほどの糺明にも魂を入替へぬは、甚「又繩かけてひかつしやるか、彦「イ、ヤ目をかけて最負する、善「ごうしましたとえ、彦「サ身ごもは入間彦助というて、鴻野の重役倉岡丈左衛門殿と同腹中

の者、則ち丈左衛門殿の密事、善「モシ、ト合方に成り、甚廻しすりしてその仔細は、彦「兼てその方もぞんじをる寄つて、と承り及ぶ、丈左衛門殿の主家を窺ふ手始めに、南方十次兵衛めが預りの胡蝶の香合、先達で盗み取り、まんと科を十次兵衛にぬり付け、八幡侍塚に於て自滅させ、首はすなはち昨日領地千住に於て獄門にかけさせ事はすめども、なを詮議きびしい右の香合、密にその方にあづけ置きよと、けふの赦免も達ての執成、善「成程、その丈左衛門様に前かた若徒を勤めをつたわたくし、その縁を以て度々御用も勤めた此甚兵衛、左ほど主従の事を思はつしやるなら、街の金百七十兩つぐのはいでも、御赦免のとりなしは有りさうなもの、彦「ハテおろかな事を、たごへ金をつぐのはうが、いは、大金命助かつたは全く丈左衛門殿の執なし、善「成程、今々思へば、わしもごういふ事で赦免したかと思つて居ました、彦「命の恩を重いと思は、善「その胡蝶の香合とやらを、彦「しばしが内大切に預かつて居やれさ、トふころより香合の箱を出、善「すりや是が大切の〇鴻野の重寶胡蝶の香合、ト思しつかりと預かつた、彦「必ず人手に、善「ハテ馬鹿念おさすと落

付いてムりませ、彦「我々はじめ丈左衛門殿の望み叶は、甚「わしも駕昇をやめて、彦「息杖も鍵にかへるわ、甚「こいつはやばでない相談だわえ、ト香合の箱をふしつ善六出て来り、 賤「ヤアこちの人甚兵衛殿かいなア、甚「オ、わりやア女房の質やの善六さん、賤「ようまめで居て下さんした、逢ひたかつた、わいなア、ト取りすかり嬉しなきに泣く、 甚「エ、べらぼうめ、外聞がわるいわ、ト突の 賤「じやというて、是が逢ひたう有るまいか、なんぼ邪見なおまへでも、夫じやと思や、牢屋といふ所はきつうこはい所じやと、悲しく有るまいか案じまいか、甚「やかましいわえ、よまい事なら内へいつてほえやアがれ、彦「イヤ、女房の身では尤、たんのうするほど聞いてやりやれさ、賤「申しこちの人、あなたはこのお侍さまじやえ、甚「サアあなたはけふおれを追放の、彦「入間彦助といふ鴻野の役人、賤「ム、そのお役人様と科人のこちの人と、念頃な今の挨拶、彦「ヤ、甚「イヤ何念頃な事が有るものか、悪事をおかした此甚兵衛、御領分にはなぬ、爰に又何かかぎ出してご異見〇サアゆけ早く歸れと仰付られて居る所だ、ト彦助に 彦「成程々々、爰に長居は叶はぬ、身ごも

も立歸るほどに、かならず今の儀を、甚「サア今仰渡された儀はきつと相守り升る、彦「然らば甚兵衛、甚「お役人様、彦「必ず領分へ立歸るな、ト唄に成り、彦助 善「扱甚兵衛どの、無事で赦免して目出たうムる、悦やら何やかに、甚「善六さん、面目したいもない、五十日ぶりで娑婆の人に逢ひ升、賤「エ、ゑんぎのわるい、死だものかなんぞのやうに、サア、その着り物ぬいで、是と早う着かへさんせ、ト前だれより着物鼻紙をサア、鼻紙もたばこ入も持つて来たわいなア、甚「こりや御臺所お出かし、なんだ着物は結城木綿、鼻紙は半紙の四つ折、たばこ入はせいしつのおぶみ、 賤「ほんにそれで夕べからいそがしいめをしたわいなア、善「イヤモウ鬼の女房に鬼神ではない、佛といはうか神といはうか結構な御内儀、かならず仇に思はつしやるな、甚「どんごがてんが行かない、おれが内済の尻金が百七十兩、牢見舞も三日にあげず、けふのしたく何やかや、しめて見ればよつぼごな金高、此金の出所は、賤「サアその金の事も案じさんすは尤じやが、まア、目出たい、無事で赦免さしやんした祝ひに、ナ善六さん、善「ソレ、一寸さかづきをささうと、あそこへ買う

て来たこながらと中がさ、ト袂より貧乏徳利 甚「こりやアよく気が付いた、牢内へいつてから據なく禁酒、ドレ久しぶりややつつけば、アに茶じやアない酒にせう、ト善六つぐ、甚兵衛呑で、おしつ思入にて此酒をの内、 善「さらばお肴を進上いたさう、ト腰より證文を出して甚兵衛 甚「遊女奉公人請狀之事〇一此しづと申女、三年季二百兩に相定、遊女奉公に召抱候處實正也〇ヤ、そんならわりやア身を賣る氣か、賤「こちの人堪忍して下さんせ、是が別れでムんすわいなア、甚「べらぼうづらめ、駕かきこそすれおれも甚兵衛様だ、女房賣つて濟まうと思ふか、なせこんな事をしやアがつた、賤「是もみんなおまへの心がらじやわいなア、ト胸ぐらを取る、合方、 コレこちの人、是がいやさに不斷わたしがいはぬ事か、知らぬ呉服より知つたこぬか、商ひとやら細いもうけも、正道に精出して下さんせ、夫婦ともかせぎにしたならば過ぎられぬ事は有るまいほどに、悪る氣をやめて下さんせと、異見いふのも糠に釘、まだしも慰みわる酒あげくの果に、ト思入有 て、此様に牢屋へは入る科を仕出かし、つぐのひ金何やかや、力づくにも器量にも、つばめた所が二百兩、何のわたしが手仕事の女髪ゆひ位して、大まいが調ひ

ませうか、あかぬ別れも不埒ゆると、心を入れかへて下さんせエ、〇苦界といへど現在の、おまへの命がはりと思や、わたしや笑うて勤めに行き升わいなア、ト泣 甚「べらぼうめ、ごんな事が有らうとも、我をふんばりにうつて濟むものかえ、善「イヤ甚兵衛殿、お詞のうちだが、知つての通りわしやア質やの手代、せげん中次では有るまいし、こんな世話をする筈もムらぬが、心安くするおしづ殿、さてかういふ金の入る道、どうしたらよからうと、ぶつけて相談されたが因果のはじまり、そこで思案を付けて、心やすい判人に約束し、こなたが出てさへ来れば直に約束だ、親方の金を二百兩、證文書いて間に合せたが、女房に付どめがさせられぬといへば、こなたが此二百兩濟しただけにふまれまいが、甚「サア、善「サア、此金の筋道は、甚「ハテやかましい事はない、質をやらう、善「エ、甚「おれが大事の預りものだが、實は身のさし合せ、ソレ二百兩のかた、トいせんの香合の箱 善「是を二百兩の質とは、甚「それこそ下總鴻野の寶胡蝶の香合、ト善六あけ 善「成ほど聞及んで居る此香合、いかにも

二百兩の質に取らうが、道具質は十日切り、賤「モシ何じややら譯も知らぬが、又咎の來るものじやないかえ、甚「ハテまだお仕着せぬがないうち、尻の來る事をするものか、賤「じやというて最前の侍のそぶりといひ、勤めせぬのは嬉しいけれど、甚「ハテ底の底迄念をおす女だ、賤「シテまア十日が内に、甚「十日が内には又面白い風も吹くわえ、善「此香合が二百兩の質と極れば、こんな物には取かはせの一札が入る、一寸爰で、ト矢立にて鼻紙、こなさん方からも間違ないといふ一札、又わしが方からは質物を質に取つたといふ、ト判をたして甚兵衛に見せる、甚兵衛取つて、甚「一金二百兩、右は胡蝶の香合質物に預り置候處實正也、十日切に受戻させ候對談に御座候、甚兵衛殿へ、質や手代善六〇成程こりやアよいが、わしが方からやる一札には今印形が、善「ないも承知、跡からおしてよこさつしやい、甚「そんならさうよ、か、ア預つておきや、善「時にそんならわしはモウ歸りませう、賤「これは何かと大きにお世話様でムんした、善「甚兵衛殿、十日切を忘れさつしやるな、ト相方時のかれにて、善六香合の箱をふさ、甚「ハテよく馬鹿念をおす野郎めだ、賤「そのやうにいはいしやんす

な、あの人が世話したりやこそ金も出來たといふもの、甚「べらぼうめ、夫も利足や分一を取る慾づらだわ、賤「夫はさうと、おまへも歸らしやんせぬかいなア、甚「イヤモウちくらに成つて來たよこれ、かへつたつらを友だちに見られるもきざだ、とつぶり暮れてから、賤「そんなら着物をきかへさんせいなア、甚「どうか夕だちが來さうだ、仕立おろしをぬらさうよりは、お仕着せで歸るべい、賤「エ、ほんに人の苦勞を無にして〇さうしてまア、暮れてからでは髪結床も仕廻はうぞえ、甚「仕廻つたらあしたの事よ、賤「じやというてちつとの内もむさくろしい、甚「むさくつてもきたなくつても、濡髪のおしづと名を取つた、おぬしといふ美しい女房を持つて居るわえ、ト引よ、賤「エ、モウ面白さうに、置かしやんせいなア、トふり切りこちへ寄せて、オ、こは、ト甚兵衛に、甚「ハテ野暮でないかみなりだ、トおしづを引寄せる、時の鐘の音にて、此道具ぶん廻す。

千住御仕置場の場

本舞臺三間の間、上の方へよせて石の地藏、正面獄門臺切首、側に誂への捨札、地藏の前に花立水

向茶椀なご有り、うしろ黒幕薄原、よき所に据物の松、上の方流灌ちやう誂への通り、爰に關屋茶屋場の形り、手拭にて顔を隠し立かゝり居るを、仙藏栗藏熊平つゞれ菰野伏にて、關屋が小がひなを取つて居る見え、右の鳴物にて道具留る、栗藏「サア、みんな、此女を薄の中へかつぎこめ、熊平、仙藏「がつてんだ、ト引立て、關「マア、待つて下され、こなさんがたに見付けられたらせう事がない、いかにもわしやあの首を盗みに來たもの、三人「そりやこそな、ト首に、關「モシ十次兵衛様、淺間しいお姿にお成りなさんしたなア、わたしや言かはしたはやでムんす〇此場の様子を聞くよりも、恐ろしいやら口惜しいやら、おのれやれ女子でこそあれ夫の死恥、いつまで人にさらさせうぞ、人知れず取隠し、いか成る寺へも葬らんと、此やうなおそろしい氣苦勞をし升わいなア、ト三人に心遣、熊「聞は聞はど氣のわるい話しだ、仙「大聲立ても此繩手、熊「誰も外に來る者はない、栗「夜の明ける迄におつ放せ、皆々「それがい、ト關屋にかゝる、關屋突のける、よろしく立廻り、此内時のかれ合、たにて、向うより南兵衛半合羽股引脚半一本さしにて、紙合羽を肩へかけ三度笠をかさし、つゞれ、さ出で來り、花道にて獄門臺を見て思入有つて、ぶたいへ來り、此體を見て與兵衛三人を取つて投げる、

三人起き上つて與兵衛にかゝる、與兵衛有合ふ割木を取つて打散らす、三人是にてばらばらと下座へ逃げては入る、關屋息切れして茫然居る、與兵衛「ヤコレ、見れば女中さうなが、今のはたしかに乞食めら、こりや物取か理不盡か、コレお女中、トあたり見廻はし、地藏の前の水コレ女中、氣をたしかにも向茶椀にたまりし水を吞ませ、ト關屋人心地たつしやい、ト付きし思入、關「ハイ、ごなたかぞんじませぬが、今のなんぞお救ひ下さりまして有がたうムり升、與兵「何さ、わしは往來の旅人、來かゝる矢先今のしだら、高が乞食めら、追ちらしてしんせだが、ト關屋をよく、併しがてんの行かぬは夜更けて一人此繩手、女の身でどうして爰へムつたのじや、關「サアそれはな、與兵「道に迷うてか但しは驅落、連にはぐれたといふやうな事でこゝへ、關「成ほどおつしやる通り道に迷ひまして、與兵「シテ町所はどこでムる、關「江戸の淺草〇並木でなし藏前でなし、與兵「淺草といつても廣い事、ア、コレ送つてしんせたけれど、わしもちつと叶はぬ用で奥筋へ急ぎの旅、道も違ふといひ、氣の毒ながら一人り早くムるがよい、サア、又今のやうなわるものに出合はぬうち、ト首へ目を付け、關屋をせり立てる、關「サア參りは參り升が、ちつとわたしも、ト首を見、與兵「どうさつしやれた、關「今の難儀に足を痛めました

によつて、與兵、ム、痛所とあらば薬を進上、ト出さうにするを、
 關「ア、モシ薬はわたしも所持して居り升る、お急ぎ
 ならばあなたも早う、私にお構ひなくお出被_レ成
 ませいな、與兵「サア参りは参らうが○ア、コレ女儀、
 そこ元歸らつしやるを見届けねば不安心、關「御深切
 が却つて○イヤそれほどにおつしやる事なら、私もそ
 ろく参り升程に、あなたも御出被_レ成ませいなア、
 與兵「そこも行くつしやるなら、拙者も参るでムら
 う、關「さやうならばお旅人様、與兵「お女中、關「いかい
 お世話様、與兵「お別れ申す、ト合方に成り、與兵衛は東のあや
 入有つて、取つてかへし、抜道して獄門臺へ、關「花道へ、ハテナア、雙方思
 入有つて、取つてかへし、行きたり悔りして、やアこなたは今の
 女中、關「お旅人様、與兵「まだ行かつしやらぬか、關「あ
 なたもまだお出被_レ成ませぬか、トふる、與兵「サア身ご
 もはこなたの事が案じられてツイ爰へ、關「お戻り被
 成たは、與兵「サ袖ふり合ふも、關「他生の縁と、與兵「女
 中へ深切、關「ハテナア○御深切と有るなら、あなたに
 ちつと折入つてお願ひ申したい儀がムリ升が、お聞
 届け下さりませうか、與兵「そりやはや身に叶うた事
 ならなんなりと、早くいはつしやれ、關「サそのお
 願ひと申しますは、與兵「願ひといふは、關「爰にか、つ

てあるアノ首を、與兵「ヤ、關「どうぞ盗んで下さりま
 せ、與兵「なんと、關「サかうばかり申しては御合點が
 参り升まい、私はアノ首にゆかりの者、いかに御成敗
 じやというて、あのやうにさらされ死恥が悲しさ、夜
 半にまぎれ盗取らうと参りましたが、どういふ事に
 やあなたも爰に長うお出なさる、内、見咎められて
 は水の泡と、せひなう様子を、與兵「ム、此首にゆかり
 とは○シテマアこなたはごういふ縁じや、關「サアわ
 たしやあの首の女房でムリ升、與兵「ヤ、關「南方十次
 兵衛と印しあるアノ首はわたしが夫、與兵「コレ合點
 が行かぬ、その十次兵衛といふはすなはち、トいほうと
 して思入、
 關「エ、與兵「ハテこなたがその十次兵衛の女房でムる
 よなア、關「サアそれじやによつて、與兵「取隠したい
 といふも尤、去りながら女の身でそれほどに思ふは
 たしかに、關「言號けといふでもなし、祝言はせずお顔
 も知らず、恥かしながらふとした御縁、與兵「ついした
 ころび合ひといふやうな事か、關「思ひ出せば去年の
 秋、友達衆に誘はれて、與兵「鹿島へでも参らしやつた
 か、關「妹背を願ふ常陸帯、うきたつ旅の木おろしに、
 與兵「頃しも月の入江がた、關「はあやなき夜船のうち、

關「乗合同士の手がさはり、蘆間の風も戀風に○かは
 る姿の、ト獄門の首、與兵「死顔も、思へばはかない、首へ思
 入、關「サア夢に夢見る人の身の、與兵「水の流れと定
 めなき、關「戀は無常の、與兵「始のうそも、關「後の誠
 と、與兵「その馴染めが、關「二世の約束、與兵「一生の、
 關「かためも、與兵「かたい、關「わが夫、與兵「女房、關「舟
 玉かけて、與兵「かたらひし、關「その時の、與兵「女子
 は、關「男といふは、與兵「南方十次兵衛といふアノ獄門
 の首ではないか、關「サア○その時の荒増を、よう御ぞ
 んじのおまへは、與兵「イヤ今のはなしもありや身ご
 もがあてずいさ、關「ハテナア、與兵「いふにいはいれぬ
 此場のしぎ○唯一言のいひかはせを、死去のあと迄よ
 く守り、首を葬りたいとあらば、いかに盗み遣すま
 いものでもないが、なんと女中、こなた身が女房にな
 らぬか、關「エ、與兵「サアいは、盗賊盗人の加擔人、他
 人ではいたしにくい、關「成ほど御尤ではムリ升けれ
 ぞ、望み叶へた上からは、千筋と撫でし黒髪を、剃つて
 わたしは尼法師と、與兵「ハテ愚癡な、尼になれば別れ
 た夫が浮むといふ、きつとした事も有るまい、關「じ
 やというて、與兵「サア身共も氣がせく、アノ首級あ、

しておけば取捨てられ、齋や鳥の餌食と成るが何と
 も不便、關「それじやによつて、與兵「女房に成るか、關
 「サア、與兵「いやならこつちも此事を、あからさまに
 訴人せうか、關「ア、モシそれでは、與兵「是が誠に首
 とつりがへ、女中返事はどうでムるな、關「是非に及
 ばぬ、そんならおまへの、與兵「詞にまかすか、關「サア
 それも年切つて三年が内、與兵「ム、三年切りとは夫
 の年忌、關「それが過ぎたら三下り半、與兵「半座を急
 ぐ法の道、年切りの女房承知した、關「シテおま
 への所名は何と、與兵「サア名もいはねばそれぞと
 も、行衛定めぬ浪人同前、關「わたしも丁度その通り、
 與兵「ハテ似たものはから夫婦、關「シテマア此末何を
 あてに、與兵「ハテ互ひの心は此石ごさ、ト合方に成り、最
 前の水むけ茶わ
 んへ流れの水をく
 んで、關「これは、與兵「茶碗へかう水を汲
 んだ所は、とりも直さず月の形、縁と月日をまつ心
 で、關「水盃も祝言も、與兵「ほごは雲井にへだつとも、
 關「空行く月の、與兵「めぐり逢ふまで、關「割符の筐、
ト此内兩人茶碗の水を互にのみ、與兵衛茶
 わんを二つに分割り、片しを關屋にやる、與兵「われた茶碗
 も、關「繼合はし、與兵「夫婦も圓き、關「縁にまかせて、
 與兵「女中、關「お旅人様、與兵「かならず詞を、兩人「つが

ひましたぞ、ねなる、ト四ツの 關「アリヤ夜中、與兵「更けぬ
 うち〇ソレ、ト合方時の 關屋あたりをうかふうち、與兵衛首を持
 來り思入 出離生死頓生菩提南無阿彌陀佛、ア、持つべ
 きものは、關「エ、與兵「女房〇夫の首級じや、少しも
 早う、ト與兵衛關屋に 關屋さぐり廻り下の方流れ 關「か
 灌頂を引切り、與兵衛の首を是に包み關屋に渡す、
 たじけな、與兵「コレ、トおさへる、しのび三重にて上の方
薄原をさしわけ、甚兵衛いぜんの形りに
 て此體を見て居て、よいほごに出る、此うち與兵衛關屋に早くゆけ
 思入、關屋首をもち行かうとするを甚兵衛引留める、與兵衛甚兵衛を
 さぐり見て悔り、甚兵衛は兩人の顔見たき思入、與兵衛しら刃をわき
 かける、甚兵衛兩手にてあたまをさへる、兩人思入、甚兵衛尻餅を
 つく、これを木の頭甚兵衛横に 拍子幕、跡シヤギリ
 れる、三人此しくみよるしく、

當秋八幡祭四

第一番目六建目 山崎屋の場

役人替名

- 一 山崎屋與次兵衛 助高屋高助
- 一 山ざき屋淨閑 澤村四郎五郎
- 一 若黨丹平 小次郎
- 一 小揚百介 百右衛門
- 一 川瀧屋市兵衛 川右衛門
- 一 小揚九郎八 磯十郎
- 一 調布善太 米藏
- 一 肴屋ぶるんの七 仙藏
- 一 鬼あこや孫六 純五郎
- 一 ふぢや次兵衛 小野藏
- 一 米屋仁右衛門 門三郎
- 一 講中妙貞 次郎
- 一 手代權九郎 市川宗三郎
- 一 げいしやみやこ 市川團之助
- 實は幻娘おさら

一下駄の市

- 實は三原傳藏
- 一 山崎屋與五郎
- 一 次部右衛門娘お照
- 一 橋本次部右衛門

- 市川團十郎
- 尾上松助
- 岩井半四郎
- 松本幸四郎

當秋八幡祭四

第一番目六建目 山崎屋の場

本舞臺三間の間、上方障子家體、正面戸糊のう
 れん、下手に土藏引戸の門口、出は入りの番屋、
 すべて鳥越米問屋の懸り、權九郎番頭にて帳合
 してゐる、善太丁稚にてたばこ盆の掃除して居
 る、百介九郎八小揚の形りにて土藏へ俵をはこ
 び居る、次兵衛藝者の親方にて下もの方に控へ、
 淨閑魚の直をしてゐる、ぶるんの七魚荷をおろ
 し居る、此見えテント、にて幕明く、ト捨ぜりふに
米を藏へ
はこぶ
 ぶるんの七「モシ、旦那、其松魚は四百五十ではぢぎ
 りが切れ升わいの、淨閑「これはしたり、おぬしもまア
 めつそうな、ぢぎりのきれる商賣を、商人の身でなせ
 するのじや、ぶるんの七「ハテそこが商賣でムリ升、淨
 閑「損をするも商賣なら、ごてもの事にもう五十損して
 四百にしやれ、セ「イヤあきれた旦那だ、モシ拵へま
 せうかえ、淨「イヤ、其かはり手は頼まぬ、おれが

せにや魚にむだが出る、まづ片身刺身にしてかた身は鹽にして、あらは煮つけ、あたまはたいて鹽からじや、七「モシ」あたまをあげり升るか、淨「松魚のあたまが喰はれいでわいの、此男は商人のやうにもない、百介「コレ」巨那は松魚のあたま所ではない、毎日出入のおいらには、西瓜の皮の香の物をくはせるわ、九郎八「汗」といつてはかみ汁、びんに白髪何本有るといふ事が、百「あり」どうつる、善太「コレ魚やさん、ひたひでもぬかば、こつちの内へ来て、おつけを鏡にぬきなさい、イヤ奇妙だよ、淨「だまりをらう、又内の噂しをるか、コレ權九郎、あのがきめけふ一日くらはすな、我にいひつけたぞ、權九郎「ハイ」御了簡被成ませ、善太めはがきとも思ふが、コレ「こなたしゆまで同じやうに、御出入をどめられぬ用心さつしやいよ、百、九「それでもおまへ、あんまりしはいうちだから、權「これはしたり、其噂はいはずとも知れてをるわな、次兵衛「モシ」權九郎さまへ、若巨那の與五郎さまはまだお歸りではムりませぬかな、權「サ、さのふから出られてまだお歸りはないのよ、淨「コレ」權九郎、ありやごこの人じや、權「はいあ

の男は、どうぢう淨「コ、サ權九郎、何の用で見世へ来てゐらるゝのじや、間には茶の一ぱいものませにやならぬ、是も勘定の内身代へかゝるわい、モシこなさん、聞けば與五郎を尋ねさんすが、何の用じや、まうけ口ならわしにいはんせ、次「イエ」別してさやうな儀でもムりませぬが、私は吉原の藤やと申す茶やでムり升るが、先達て内の抱へのあづまど申す藝者を、爰の與五郎様から身受金の内百兩うけとり、跡金二百兩参り升れば、早速あづまをお渡し申升るが、今以て御沙汰がないゆゑ、夫ゆゑ参つたのでムり升る、淨「何じやあづまどやらが身うけするさて、三百兩にきはめて、あと金二百兩を取りにムつたのか、次「さやうでムり升、淨「だまらつしやい、次「ハイ」淨「此身代はあの與五郎に譲りくれないと、死なれた巨那の遺言ゆゑ、おれが實の子の與次兵衛にも家をやらす、養子嫁迄貰うて置けど、不埒者の與五郎、其上實の與次兵衛も、親の氣に違うて家出して居たゆゑに、隠居のわしがつけびんして、元へ歸つてお屋敷の勤、講中の衆が挨拶で、やうく内へ呼戻した忝め、實の子でさへ用捨はせぬに、家づきなれど他人同前の與

五郎、何で二分も出すものじや、さう心得てムれ、次「はい」さやうならいづれ共仕りませうが、夫では手附の百兩が流れに相成り升るが、ト淨閑是淨「コレコレまたつしやい、百兩の手附が流れる、アノ百兩が、ト思入有流れるなら相談ものじや、其手附を取こんで、跡金やつてわしが身うけしよう、次「エアノおまへ様が、權「あづまの身受を被成升るか、淨「コレ權九郎、聞けばあづまはアノ倉岡殿がほれてムるといふ噂、權「なるほどさやう、大金出して身受を被成丈左衛門様へ遣はしたら、まだ此うへにあなたのおねがひ、淨「サ、そこが有るゆゑつないで置けば、權「與五郎さまの手附の百兩ちらさぬ勘定、次「イヤモウ外のお家へやるではなし、御内へならばその證文で遣しませう、淨「そんなら何かはゆるりと相談、權「小あげの衆もたばこにさんせ、九「一つぶくやらうか、七「モシ巨那、松魚は爰へ置き升るぞえ、淨「錢は晦日に取りにごんせ、コレ善太鉢を持つてこい、善「アイ、次「さうなら御勝手で、ごりや御まち申ませう、ト唄に成衛百介九郎八ぶるんの七のれん口へは入る、善太鉢を持つて来る、ト次兵衛閑松魚をこしらへる、此唄をかり、向うより仁右衛門町人門徒肩衣を着たる形、市兵衛孫六町人にて門徒のた衣を着てじゆすをつまぐり出る、跡より與次兵衛羽織一本さし、供の男ふくさ包を持ちお寄り

講の歸り、妙貞後家のこしらへ、黒組の角隠しト與次「コレハごなにも御苦勞でムりました、仁右衛門「イヤモウ世話いたしたかひがムつて目出たうムり升、妙貞「けふのお寄りに與次兵衛様のお顔が出たので、講中も安堵いたしましたわいの、市兵衛「此後とも與次兵衛殿、親御に氣をもませぬやう、孫六「氣をつけさつしやりませ、與次「御講中の御執なし、何かと忝なうムり升、仁「親仁殿も待かねてムらう、サ、参りませう、與次「左様ならば、ト唄のきれにて皆々權「モシ巨那え、御講中が御出でムり升、淨「コレハ、仁右衛門殿、イヤ妙貞殿もごなにもまア、ト手をつきな、皆々あちらへ、ト手をつきな、皆々おゆるし被成ませ、ト内へは權「コレハ、ごなにもようお出被成ました、與次兵衛様お歸り被成ましたか、與次「オ、權九郎か、段々と仁右衛門様の御世話をもつて、宿老ごのにもお目にかゝり、山崎や跡式相違なくゆづりうけ、家相續いたすやうにと、町内の連印相濟み禮いうて歸り申したて、權「それはおめでたうムり升る、仁「是と申すも與次兵衛ごの、いつた町内の衆に悪う思はれぬゆゑ、先祖與次兵衛ごのゆづり状と相違いたしてあれど、そこをどやかう

申す者もムらぬて、シテ二男の與五郎ごのは、どれへぞ行かれましたかな、淨「イヤモウあの與五郎にはこまりはて升る、いは、死なれたる親旦那の實子、わしは其節番頭上り、のれん貰うて小見世を出し、女房持つてそれに出来たは此與次兵衛、其時の名は三之助、産後にかゝめは病死して、親子ふたりでくらす内、爰のお家の御新造も御病死、其時乳のみのアノ與五郎、殊に旦那は御病身、枕のもとへわしをまねき、どうで今度はたすかるまい、おれが死んだら我が身代片づけて此家の跡をふまへ、山崎やを立てくれい、代々鴻野の屋敷へお出入、有金は十萬兩、他人の我にやるほどに、悴の與五郎我子にして、そちが悴は兄にたて、主家來じやとてわけへだては決して無用、しかし末々此家を與五郎めにやつてくれと頼みはあれど、此頃のアノ不身もちを、與次「サ、其御先祖の御ゆるげんを小耳におぼえし私ゆる、兄とはいへど末々は、弟に山崎の家つがせんと思ふ内、親仁さまの氣に違ひ、暫く内を遠ざかりまかり在るうち、弟が不身持屋敷の勤、かれこれに御隠居被成た淨閑様、つけびん被成ていせんの與次兵衛、男形にて屋敷の手まへ御苦勞被

レ成るが氣の毒さ、仁右衛門様のお世話にて立歸つた私、御町内のひろめもすめば、すぐに今日只今より家の跡目は則ち私、弟が事はまた追つてわらいやうにもいたし升まい、仁「さやう〜、何をいふのも家の爲め、アノ與五郎ごのも藝者狂ひの悪る心やんだなら、ハテ身代は二つわけ、出見世出しても世間は濟み升、殊に在金は十萬兩、嫁御も貰うて有るといひ、此上の事はムらぬて、淨「サ、其貰うて置いた嫁の照は、鴻野の家中橋本次部右衛門といふお方の娘、是も實の娘でもないこの事、權「その次部衛さまも今ではお屋敷をお暇、浪人被成て橋場の邊に御出のやうす、まア何事もさて置きました、仁右衛門御宿老御町内にも、御總領に跡式をお譲り被成るを御承知でムり升るか、妙「ハテそりやモウ、女でこそあれ此妙貞が證人でムんす、ノウ皆さんさうじやムんせぬか、市「さやう〜、御子息與次兵衛様に山崎やを譲られても、町内に一人りでも不承知なものはムらぬて、孫「かう物がきまつたからは、早う跡式のゆづり引、與次兵衛ごのにも早う落つかせるがようムるわいの、淨「さやうムらば仁右衛門殿、此親仁が身代を與次兵衛に讓

るといふ慥な證據は、印形より書ものより、コレ是がたしかな證據でムるわいの、トつけわけつけびんを取ンレ仁右衛門殿、此髪おまへにわたし升るぞ、仁右衛門へなげて、仁「イヤモウ是でわしもあんどしました、コレコレ與次兵衛殿、親仁殿は此通り、けふからは在金の十萬兩家屋敷も大切に、かならず親御の恩を忘れさつしやるなよ、トつけびんをわたす、與次「何から何迄あなた方のお世話、大身代の山崎や、私がふまへ升る上からは、萬事に心をつけてまして、家の榮えが先祖へ孝道、いづれも様親仁様有難う存じ升る、トつけびんを此上ながら與五郎が身の納り、別家成りとも、仁「ハテ何事も又わしがよい思案がムるて、妙「イヤモウ是であんどしました、仁右衛門さんもおまへ方も、跡へ残つて譲り引の立合、わたしや女の事、居たというて役には立たぬ、モウお暇ませうわいなア、與次「ハテマアわざと御酒なりと、妙「イエ〜、わたしや大の下戸、お盃ならおあづけじや、追て何なとねだりませう、淨「ソレ〜、人にも振舞ふはあたまた敷のすけないが勝手じやて、市「孫、ハテ金持はあの通りじや、淨「然らば仁右衛門殿、御苦勞ながら、仁「ごりや御相談仕ら

うか、權「サアお出被成ませ、ト唄に成り、仁右衛門市兵衛孫兵衛殘る、妙貞向うへ〜、揚幕より與五郎出で来る、跡より下駄の市やつしの形、夜番にて與五郎に付き出で来り、花道にて妙貞はすれ違つて向、下駄の市「モシ〜、與五郎さんえ、又おまへ俄かえ、モシい、かげんになされませ、しはんぼうの大旦那が大抵な事じやアあるまいに、ちつと内にムりませぬ、與「何さ、おらア夕べから友達の所にうたひ講が有つて、そこへ泊つて今歸りがけよ、市「エ、うたひ講かえ、うたひ講やら念佛講やらございが出升ね、與次兵衛さんもけふ町の衆と宿老へムつたが、おほかた跡目は與次兵衛さんが、與「ア、もごつて居らるゝか、夫は重疊、逢うて此身の、ト思入、サ市ぼう来やれ、トうたに成り、市「モシお見世の衆え、若旦那がお歸りだよ、與次「オ、與五郎か、今もごつてか、與「ハイ友達ごにもさそはれまして、與次「俄はどうじやな、與「イエうたひ講へ参りました、與次「それはめづらしいの〇こりやたれも居ぬか、女子ごもは居らぬか、與五郎がもごつた、ふだん着をもつて来やいの、お照「ハイかしこまりました、ト合方に成り、ふり袖のち、のれん口よ、只今おもごり被成ましたか、サ御ふだんめしを、與「オ、お照ごの、下女のりくが居ように、コ

レハ手づから、いたゞき升、まア〜そこへ置いて下
さりませ、市「ア、お照さんかえ、モシわつちやア今途
でお目にかゝつたからおつれ申しやした、晝の内は
い、が、夜に入るとぶつそうでムリやす、必ずひとり
出し申しなさるなよ、照「サ、わたしもさやう思うてゐ
れど、いつの間にやら奥五郎さまのおひとりのあるき、
いかう御あんじ申し升るわいなア、奥「なんのあんじ
る事があつて、其やうに科もない者をだれがめつた
に、市「イエ〜さうでムリやせぬよ、お嘘はながい
事だが、わつちが親仁も人に切られやした、奥「ア、
手まへの親は人に切られたか、奥「シテそりやアい
つの事だ、市「何さそりやアわたしががきの時のお咄
さ、お聞き被成ませ、譯は存じませぬが、私が親仁は
足駄のは入れてムリました、奥「ア、親仁は足駄の
は入れか、市「ハイさやうでムリ升、足駄のは入れの
岩淵の權助と申しました、足駄のは入れの御子息ゆ
ゑ、そこで私が異名が下駄の市さ、奥「エ、そこでおぬ
しが下駄の市、市「さやうさ、親仁が切られたその時
分は、まだ跡先わきまへもなき水子同前、しかしよつ
ぼご小胸が悪いわしが親仁といふ噂、向うの相手は

關取株白藤といふ角方どりに、割下水で切られまし
た、その權介が實の息子、しかし町人のかなしさには
敵討に出られもせず、いづれも様のお取立で、どうぞ
一度は足駄の齒入に成たいが願ひ、薄ぎたない商賣
でも、親仁の職ならその筈の事でもあり、奥「兵衛さ
まのお世話にて、川岸の土藏の寐すのばん、ア、コレ
咄す内にも流石は親子だ、親仁が非道に死んだと思
やア心細く成るやつさ、照「エ、そんならこなさんの
ど〜さんは、アノ人に切られて、市「アイ夫だによつ
てお氣をおつけ被成ませ、夕べも吉原田圃にて、鶯
の長吉といふものが切られて死んだといふ噂、奥「ヤ
ア田圃でか、市「アイ合手はだれかしらねえが、其長
吉が死骸のそばに、された小指が落ちてあつたで、小
ゆびのきれた其ものが、人殺しの科人と、町中はき
びしい詮議さ、奥「是にて奥五郎 奥「すりやアノ鶯の長吉
が切られた場所に小指が落ちて、小ゆびがなければ
人殺しの、奥「ハ、思入、奥「兵衛何心なく奥五郎、小ゆび、奥
次「アノ小指のないが人殺し、奥「エ、ト、ハ、奥「ハ、
ぶつそうな事じやノウ、奥「思入、奥「成り、向うより次部右衛
門一人つれ出て來り、 奥「次部右衛門、橋本次部右衛門でムる、

あるじには御在宿かな、奥「コレハ次部右衛門様、マ
ア〜是へ、奥「ゆるさつしやりませ、奥「照「ど
とさんようお出被成ました、奥「オ、これは娘照
か、奥五郎も是におゐるし、見升れば總領の奥次
兵衛殿、此程は他行いたし居られしと承つたが、ア、
いつお歸りでムるな、奥「ヘイ昨日講中の世話をも
ちまして、奥「歸りめされたか、それは重畳〇こりや
娘、お茶一つ所望いたさう、照「アイ、私が、奥「ア
アコレ氣のつかぬ、お茶を持たぬかえ、奥「善「太茶を
善「ヘイお茶を上がりませ、お照を見て、オ、お照様、ど
んと忘れて居りましたが、先ほご小間物屋の清七ご
のが、此間中お詔への七寶崩しの櫛が出来ましたと
申して、私へあづけて參りましたが、サア御らうじま
せ、なんぞよくできたではムリませぬか、奥「藤繪七寶ぐ
ぐし紙につくみたるを出す、善「こりやようお似やい被成
ましたわいな、奥「ア、しつぽうくつしどは、ト見そり
やたしかわしが替紋を、奥「照「願見合せ、これははや
次部右衛門様、あなた様には御用ばしムりましてお
出でムリ升るかな、奥「いかに身共參つたるは別
儀でもムらぬ、知らるゝ通り實子なき身共、女房めが

存生の間、十次兵衛の末の妹此照めを養女にいたし
た所、母めは病死、其後身共はお暇たまはり浪人仕
り、もはや二君に仕へ升る所存なきゆゑ、照めを奥五
郎へ養子嫁、次部右衛門一代にてくちはてんとぞん
じ居つた所、又候古主より御たづねムつて召歸され
て、以前の如く劍術御師範仕れと、役人中より支度
金子二百金借仕つてムる、則ち是へ金子持參仕つ
たは、拙者貯へあつて益なき金子と、封印いたし參り
しは、娘照めが何成りと望みの品がムるなら、と、の
へて遣されませ、其儀を頼まん爲め計り、サ此金子御
預り被成て下されい、奥「入りの封印の二百、奥「さ
やうならば此金子を申うけ、アノお照に、奥「つむり
の道具何なりと宜しう頼みぞんじ升る、奥「此時奥
來、奥「奥五郎様御歸りでムリ升るか、早速申しませ
うがあづまが跡金二百兩の儀を、奥「は、奥「奥
「これはしたり〜、爰ではわるい、サア何事もナのち
方迄にナ、エ、コレ氣てんのかかぬ、奥「思入、奥「思入、
市「コレサ藤やの親かた、こなさんも粹な商賣する
程にもないあづま〜と、あづまとはア、何かおれ
をあづまッ子といふ事か、あづまッ子どころかおら

アマチりなしの江戸ッ子よ、與次「いかさまノウアづ
 まどやら何とやら、其金高も二百兩、次部右衛門様の
 御持参有りしも二百兩、ハテ割符をあはす、ト金を仕舞
 次部「アイヤ總領ごの待ちめされい、うけたまはれば貴
 公には別宅おしやり、與五郎事は未だお屋敷お目見
 えなき部屋住、それ故にこそ淨閑ごのがつけわけし
 て、おかみの御用聞きめさるとうけたまはつたが、す
 りや與次兵衛殿には立歸つて、與次「山崎やの跡式は
 今日只今私めが譲りうけ、親仁様は是迄の通り隠居、
 則ち山崎や與次兵衛と町内へも披露いたしましたして、
ト與五郎 照思入、次部「すりや跡式は其もどがふまへ、娘を進
 上いたしたるあの與五郎は、現在家つぎまぎれなき
 しん身でムれど、與次「サ其儀はぞんじてをり升る、御
 先祖の血のあまり、跡式ふまへる御身分でも、ハテ山
 崎やの家にはかへられませぬ、與「家にかへぬと兄貴
 のことば、此身の不埒がつりては、ものだねでも
 遠慮なう、與次「イヤ勘當は仕らぬ、與「アノ私をえ、エ
 イ、トこな 照「なんじややら與五郎さんの身に取つ
 て、もし間違うた事あらば、ト思 市「エ、こぢれつて
 いもつれた身代、是を思へば金持より貧乏人がはる

かましかえ、次「身受の跡金出来ませずば、大旦那の
 お世話にてあづまはおやしき倉岡さまへ、次部「ナニ
 倉岡とは、御家中にてそこのしれぬと噂ある、與
 「丈左衛門へ御隠居が身うけのお世話を、ト思入、よき時
分より淨閑出
 居、ト合 淨「イヤ跡金二百兩、わしがわたして身受す
 る、ト合 次部「こりやアあるじには以前の如くほつた
 いあつて淨閑殿、こりやかうなけりやかなふまい、淨
 「一別以來次部右さま、おはづかしいが只今のあづま
 が身うけは則ち我等、ハテ手かけめかけもムらねば、
 此淨閑が受出して、朝夕寐間のあげおろし腰膝もま
 する、コレ與五郎、其時どやかういふまいぞ、與「親仁
 様のなさる事、ナニ部屋住の私が、ト思 市「しかし是
 迄わか旦那も多くの金を○アイヤ先約なれば與五郎
 さんに、親方は義理が有るといふもの、マア何事も二
 三日待つてしんせさつしやい、次「おなじみだけにあ
 さつてまで、御隠居様も其通り明後日急度御返事、市
 「わしも番やの古あんど油の掃除に懸らうか、次「さや
 うならば若旦那、何分よろしう、ト思入、與五郎氣 市「ハ
 テマアムれな、次「ハイお暇申ませう、市「ごりや行
 燈そうじにか、ト合方に成り、次兵衛は向うへ、下駄
の市門口の番やへはいる、淨閑二百

兩の金 淨「コレ與次兵衛、さいふ入りのその金は、與
をみて、
 次「ハイ此金は次部右衛門様より此お照ごのへ、櫛笄
 など求めよとお心ざしの此金子、淨「ハテそれはお
 照は仕合な、ドレわしが預りませう、ト取らうとする、與
次兵衛さへへて、
 與次「アイヤ此金子は其まゝに、コレお照ごのそなた
 の手箱の内へなりと、照「イエ、それではどうやら
 我もの顔ないたしかた、やはりお内の金だんすへお
 仕舞被成て下さりませ、與次「なるほど用心もわるか
 らう、小間物やの見えるまでわしが預りませう、今に
 もいらばあの戸棚の内へ、コレそなた仕舞うてムれ
 サ、照「アイ、ト戸棚をあけ金だんすへ仕 淨「ハテ惜しい金
舞ふ、淨閑ちりく見て、
 を小間物やに取らるゝとは、エ、世はさましくなも
 のじやなア、次部「淨閑ごの、ちとおめに懸りたうムる、
 淨「アノ私に、次部「いかにも、トよるしくすまふ、 與次「コ
レお照ごの、親御様が何やらおはなしも有るやうす、
そなたは奥へ、照「アイ、 市「何じややら心がかり
 など、さんの御様子殊に大まい二百兩わざ、お持
 ち遊ばして、ト思入、與五郎 與「ハテマア奥へ、照「アイ、
ト合方に成り、お照心 淨「次部右衛門様、シテ御用の筋は
をのこし奥へはいる、 淨「次部右衛門様、シテ御用の筋は
 な、次部「イヤ別儀でもムらぬが、貴公御實子の是に居

らる、與次兵衛殿で跡式を納め召さるれば、誠に與
 五郎は無うてもすみ升る、シテ身共が娘と與五郎は
 いかいたさる、存寄でムるな、淨「別してぞんじ寄
 もムらぬが、お聞きの通り藝者ぐるひに大金を費す與
 五郎、親方筋でムらうが家にかへぬが年寄の片いち、
 事と品とによりますれば、トあさいひか 次部「そりやモ
 ウ親といふ字のついた其もと、よしや勘當いたされ
 ても、與「エ、次部「サ與五郎方に申分はござりますま
 いが、貴殿へ養女に遣はしたむすめ照めが身分はご
 こで立ち升る、サそこがどつくり御思案所、親子の衆
 何とおぼし召さるゝ、與次「こりやはや御尤のおたづ
 ねでムり升が、何を申すも爰に聞いて居り升るが、あ
 づま申す藝者に迷うて、次部「アイヤそりや若い時
 にはたれしも有る儀でムる、いは娘をしんせした拙
 者、此方より何とやら申す筈なれど、そこを申さぬが
 當世とやらうけたまはる、與五郎ばかりか、まだ外に
 藝者狂ひをいたさるゝ人もムるさ、それ式ならば何
 事も、ト思 與次「こりやあらたまつた次部右さま、外
入、
 に藝者にくるひ居るものがムるとおつしやらぬばか
 りのお詞、此與次兵衛も物堅き親仁様への氣がねし

て、女房氣のない男ゆゑ、かこひ女房隠し妻いたした
 ともそれほごに、ト少しむつさする、與五郎ト少しむつさする、立寄つて、與「サ御尤でムリ
 升、何を申すもみな與五郎が身持がわるさに〇私が
 わるうムリ升、かやうな事がいひつゝのり、ひよつと間
 違ひ出来ましては、私が迷惑仕り升、サ何事もおかま
 ひなう、次部右衛門さま、奥にて御禮に粗酒一つ、兄貴
 よろしく御馳走たのみ升る、淨いかさま折角お出の
 次部右さま、いひつゝのつては跡の後悔、そんならわし
 が隠居家々々々、次部御馳走に成りませうか、何を申
 すも娘がかはゆさ、與次「サ其お心は與次兵衛がよう
 くみわけて居り升る、次部「與次兵衛殿、與次「次部右衛
 門様、淨いかうムリませ、ト唄に成り、淨閑先に次部右衛門與次
兵衛ついて奥へは入る、與五郎のこゝろ、
跡合、與「日頃からかたましい親仁様、それに引かへ次
 部右衛門さまのお心ざし、お照が髪飾など買うて
 貰へと二包御持参有りしも、與五郎が金につまりし
 二百兩、情のほどは詞にもいふにいはれぬあのだら
 ら、あづまが兄の長吉を殺した科は、今の間に召捕ら
 るればいひわけないは小指、ト思入、よき時分より照「エ
 エ、トおどろく、與五郎與「こりやお照ごの、こなたは爰
 に、照「アイ與五郎様、そりやおまへ聞えませぬわい

な、與「そりやアなんで與五郎が、照「サアおまへとわ
 たしはいひなづけゆゑ、まだ盃はせぬけれど、貰はれ
 來て養子嫁、今に女夫にならぬのも、かたましい淨閑
 様、御實子の與次兵衛様に家をつがせ、もしもの事が
 有る時は、おまへさんを此お家にお置き申さぬ相談
 も、あの權九郎と度々の事じやわいな、親御様に其お
 心がムりましては、おまへのお身が立ち升まい、幸ひ
 さつきにと、さんがお持ち被成た二百兩、あの金で
 あづまさんの身受して、どうぞおまへは爰にお出な
 さんすやうに、與次兵衛さまへわけいうて山崎やの
 跡を納め、お内儀さんはあづまさん、其時わたしや物
 縫とも針妙とも思しめして、どうぞお内に置いて下
 さりませ、若しと、さんが其節に去り狀取らうとお
 つしやつても、どうぞ書いて下さんすなえ、おまへと
 縁を切る事はいやでムリ升、わいな、トナガリつ與
 「コレ、お照ごの、其心ざしはかたじけなうムる、一
 生此身に恩に着る、しかし不身持な與五郎、所詮山崎
 やの跡式は思ひもよらぬ、勘當うけて流浪する、科は
 のがれぬ事ながら、科ないこなたに苦勞をかけては、
 次部右衛門様へどうも申わけがない程に、ふつつり

おれが事思ひきつてはくれまいか、照「すりやどのや
 うに申しても、あづまさんに心が残り、わたしを縁切
 るお心かいな、與五郎さんそりや聞えませぬ、與
 「コレ、何のあづまに心がのこらう、モウ、
 モウ、身受もせぬ、ハテ今聞く通り親仁様が身受
 して、目かけ手かけになさるあづま、悴の此身でどう
 して親の、照「サア、おつしやれどなかく、御隠
 居様がどうして大金右左り出して身受を被成ませ
 う、ありや決してうそじやわいな、ト此時與次兵衛
出懸りぬて、
 與「サ、さは思へどもみす、親の、與次「心にたがは
 不孝のうはぬり、與「ヤ、おまへは兄貴與次兵衛ごの、照
 「與五郎様を御不孝とは、與次「ハテみす、いつはり
 事ながら、親の手かけにか、へるあづま、子としてよ
 もや身受も成るまい、其身のもや、思ふなら、モウ
 此内を、與「エ、與次「家出をしやれ、ハテうか、此家
 におやつては、悪い噂の弟與五郎、此跡式も何もかも
 隠居の自由にさせぬが與次兵衛、此程俄の歸りがけ、
 土手で頓死か急病か、ぶち殺しても死にそもないあ
 の長吉が、與「エすりやあの場所へ、ト思與次「サ夫じや
 に依て遠ざかり、暫くかげを隠すのがよささうなも

のじやぞよ、與「すりや私は暫く此身を、與次「隠れ忍
 ぶは、そなたのうばが娘のおしづは髪ゆひの世渡り、
 爰を頼んで少しの間、照「そんならわたしも御いつし
 よに、與「アコレどうしてこなたをつれられよう、照
 「イエ、わたしやおまへと共に、ト左の手與「アイ
 タ、トゆびの照「こりやコレ左の、與「指は
 あづまへ、照「アノ心中に、ト思與次「サそれゆゑか
 げを隠すがよからう、與「情のお詞、爰からすぐに、與次「氣
 遣はずとも、與「兄貴、與次「與五郎早う、照「どうぞわた
 しも、與次「ゆきやれ、ト行かうとするを與次兵衛へだて、與五
郎をつき出し門の戸をしんさす、與七
ツのかれ、與五郎向うへ走りはいる、引らがへ揚幕より四ツ手、この
たれをふるし、妙真ついですたく、さ出て來り、駕は門口へふるし、
妙真の者にさ、やく、わかい衆照「コレイナア與五郎さ
 ん、どうぞわたしもムんす所へ、與次「これはしたり、そ
 なたは他家より貰うた娘、與五郎が家出したとてどう
 して一所にやらりやうぞ、マア、わし次第に、照「シ
 テ與五郎さんは、ありやマアごへ行んしたのじや
 え、與次「ハテ内に置けば親御の心に違ふといひ、殊に
 家附の與五郎、勘當しては世間の手まへ與次兵衛が
 立たぬ、そこで首尾ようもくろんで家出さすれば、親
 を捨て家出の悴どうでお帳につけねばならぬ、照「エ

エアノ與五郎さんをお帳とやらにおつけ被_レ成升るのかえ、與次「ハテ我と我身を自滅の與五郎、毛蟲親仁も隠居させ、此跡式は枕を高く與次兵衛が、照「アノ此山崎やの身代は、與次「總領じやもの納めいで、弟與五郎日かげ者、嫁に貰うたそなたをば、コレ此兄が女房に持つ、照「エ、そりやマアおまへ眞實かえ、與次「盃もせぬ弟嫁、殊に世間へ廣めはせず、兄が女房に持つたどて何の大事が、照「イエ、わたしも武家の娘、左様な約束しませぬ、盃せねど許嫁、與五郎さんがムンせにや、わたしやお内に居りませぬ、與次「イヤ、さうはいはれまい、たつた今も此家を出る事はいやでムるといふたじやないか、弟は身より出たるさび、そなたに何も科はない、了簡しかへてわしが女房に、照「イエ、道に背きし夫は、どうして持ちませぬ、與次「そこを我等が持たせて見せう、照「どうしてあな

つたが固めの印し、返事さつしやれ、照「エ、與次「心中見せても男に持たぬか、照「サそれは、與次「女房に成るか、照「サア、與次「照「サア、與次「お照、切つた此指必ずむだには、トふりかへる拍子に次部右衛門と顔見合す、次部右衛門障子びつしやります、與次兵衛思入外よりみやこ妙貞つかくこは、いと、與次兵衛みやこ胸づくしを取つて思入、權九郎何心なく出か、つて窺ふ。「コレ悪性男の與次兵衛さん、與次「ヤわりやみやこ、なめらさんぼう、妙「外からしつかり見届けました、エエこなさんは、與次「コレハお袋、尤も、みやこ「イエ、イエ其尤はモウ、聞きたうムンせぬ、とてもそなたについた身の代の金は如何程有る連も、立金はわしがして女房にするゆる、けふ爰へ同道せいとお頼に、か、さんと相談して、門には親子が居るとも知らず、妙「與五郎さんの言號のお照さんに指を切つての悪る口説、コレ與次兵衛さん、お前アノわたしが娘都が事は、どうさんす、お前を爰の代取にせうと宿老殿迄かけあるき、骨を折つたも娘を爰の御新造様にしたいが山、向うの見えぬにか、と世話やくやうな妙貞じやムンせぬ、サ山崎やの御新造様は娘の都じや、さう思つて貰ひませう、エ、仇あほらしい、照「ほんにお前はたしか講中、妙「アイ妙貞でムんす、わ

しが娘は藝者の都、とうから主の圍ひ者、けふ改めて山崎やの御新造、わしや姑御さんじや、アイ大身代のお袋様じや、さう思うて下さんせ、照「そんなら都さんは與次兵衛さんの、與次「アアコレ、モウ、何もいうてくれな、立派顔した此與次兵衛、面目次第も、權「イヤないとはいはさぬ、堅い顔する兄御様いやはや呆れた身持だわえ、與五郎殿はあづまへ打こみ、手附は濟んでも跡金の二百兩にゆきつまり、身受の出來ぬをつけこんで、御隠居様が百兩安いと聞くこと其儘、拂物なら買ふべしと、あづまを手かけに抱へる心、兄貴は都を引ずりこみ、それがたらいでお照様に足をつけ、指を切るとは言語道斷、有りやうは與五郎殿をほいまくり、お照様を申うけ、別家と成つてみせでも出して貰はうと楽しんで居る此權九郎が手まへもはぢず、あまりふらちな與次兵衛殿、イヤハヤ爰の内にろくなやつは一人りもない、モシおてる様、只今から私へ、トしなだれ寄る照「エ、何じやぞいな、そなた迄がおなじやうに、こゝはなしやいのう、ト奥へは入る、ト奥へは入る、ト奥へは入る妙「サア、娘、きけば聞くほごゆだんのならぬ爰の内、モウ、一寸も待たれぬ、我も早う與次兵衛さん

から、身の代の百兩今取つてわしによこしや、サアはやうしや、サア立金して女房にさんせ、與次「これはしたり、マア、静かにいうてくれい、權「コレコレみやこさん、おまへ藝者の身で生娘に見かへられては立ちやすまい、おまへもつら當にゆびを切りなさい心中しなさい、コレ、ト出刃を取つて來りサ此出刃で指を切りねえ、みやこ「エ、めつそうな、どうしてわたしが、妙「さうじや、めつたに娘をきづものにはさせませぬ、權「エ、卑怯な事をいふお袋だ、指の切りやう知らずばわしが教へてしんせう、マア此出刃をかうもつて、コレちよつきりちよつと出刃をかうもつて、左りの小指と見たならば、右にもつた庖丁でまつ此通り、ト思はず我が手にゆびを切り、わつと倒る、皆々おどろく、みやこ「ソレいつそ血が流れるわいな、妙「どうでも今が沙時で有らう、權「ア、痛い、コレお照様、血留を下さりませ、血留はどこにあるごこだ、堀留は近所だが沙留は遠いわ、トいたく、ト手みやこコレ與次兵衛さん、アノお照さんへ切らしやんした心中は、ありやほんまでムんすかいな、與次「何をマアわけもない、身受せうと呼よせたそなたは女房、ありや正眞の

座興といふもの、コレ此切指は我身へ心中、取つてやる、みやこ「すりやわたしへおまへが心中、與次「切つた小指が夫婦のかため、妙「そんなら娘をいよく祝言、ト此時與 仁「千秋萬歳の千ばこの玉を奉る、市、孫「アアめでたい、ト肩衣のまゝ、仁右衛門、鑢子盃、仁「サ、おふたりのかための盃、みやこ様から與次兵衛さまへ、幸ひ我等講中の此肩衣の役にたつたる仲人役、跡式何かのゆづり引、親御が得心いたされて、又候二度のほつたいで、市「もの事丸うあたまたまのごとく事納めた上からは、わしが勘定吳服代、みやこ殿の身のまはり積つた所が五十五兩と三分二朱、孫「さて小間物やべ高が四十三兩二分あまり、妙「娘が立金百兩と、與次「合せてわづか二百兩には足らず、ドレ勘定して、ト戸棚を 取り出し、明けようとする、此内淨閑障子家體に出かけ、此體を見 てきもをつぶし、此時つかくさ出で、明けんとする金箱をあさへ、淨「ごつこい、さうはさせぬぞ、マア、 ざこの國にか、此親が爪へ火ともしたといはうか、うまいものも喰ふやくはず、十萬兩の在金のまた其上へためたかね、湯水のやうに遣ふとは、さうはさせぬぞ、與五郎めはアノふらち、實の子の偏屈者、我がかうした心とは今迄知らぬわい、ヤイ、此マア同行の

仁右衛門殿、こなた衆迄おなじやうに藝者を引込み、親にもさたなし祝言さた、吳服代も小間物の金もやる事親がならぬ、一もんきなかもならぬぞ、ト千箱へまたがりお 仁「これはしたり淨閑殿、こなたらうもさへ居る、うさしたか、淨、何で淨閑老筆せぬ、仁「ハテそれで もこなたは身代を、あの與次兵衛へ譲つたではムらぬか、與次「其上おまへは元へもどつて樂隱居、此山崎やはわしがもの、十萬兩の金の内、二箱三箱違うたとて、別していたまぬ此身代、おまへは御隱居かくれる文字の通りに、ごごぞへかくれてムりませ、淨「エ、マアおのれは、與次「ハテわしがものでムり升、ト淨閑を箱の内よりみ だけ二包出し、それよいやうにわけ取、妙「エ、忝い、 つて、ト金を取 跡はさし詰おまへがた、よいやうにわけさんせ、わたしや百兩取つたその上に、山崎やの姑御様じやホ、ト、、〇ソレおまへがたよいやうに、ト百兩 市「オットこつちの勘定も、二口びて百兩あまり、孫「ふたりはたしかに受取りました、仁「コレコレみやこどの、あなたは爰の御隱居じや、行末の事たのまつしやれ、みやこ「そんならあなたは舅御様、此上ともに嫁のわたし、お氣にいらすと御隱居

様、實の娘と思しめし、ト思 淨「エ、しらぬわい、ト腹 入、妙「内祝言は奥座敷、 わしや開いてから跡の片付、トウ 與次兵衛さん〇アイヤさんじやない與次兵衛殿、わしや姑御じや、孝行しなさんせえ、仁「然らば講中宵のほど、日暮れぬ内にひらさせうか、ト皆々門 出、ト 與次「コレハごなたも何かと御苦勞、明日お禮に、市、孫「イヤモウそれには及びませぬ、與次「扱金箱も不用心、ごりや錠前をびんとおろして、ト取 淨「ドレその鍵を、ト與次兵衛が腰の 與次「オットさいせん此鍵もお譲りなされし上からは、御隱居様でもめつたに是は、淨「エ、腹のたつ、勝手にしをれ、與次「そんならみちまで仁右衛門さま、仁「同道しませう、淨閑ごのけふからお樂じや、淨「知らぬわい、與次「サ女房は居間へ、みやこ「御隱居様、淨「知らぬわい、仁「與次兵衛殿ゆるりとおしげり、與次「講中方、妙、市、孫「ひらきませうか、淨「知らぬわい、ト眼に成り、 與次兵衛みや、ト手 妙真花道にて百兩を一寸仁右衛門へわたし、市兵衛孫六もめい 心いき有つて向うへは入る淨閑一人うつりしてある、入相のかれ合、淨「何の事じや、家附の與五郎め不孝ものじやと思つたが、どうでもまた眞實しん身の與次兵衛は、其上を行く覆輪かけた不孝もの、イヤ又悴は違つた

ものじや、ト手 ハテわるい夢を見た事じや、ト手 してゐる、ト手 は入り入相のわかれ明にて、向ふより丹平若黨の形にて出で來り、門口をうかり、丹平「ア、爰じや、 鳥越の米問や山崎やは爰じや、ト、コレたのまう、ト、淨「エ、やかましい、知らぬわい、丹 丹「これはしたり、山崎やはこ、か、淨「しらぬわい、丹 平でムる、淨「しらぬわい、丹 コレサ氣をしつかりと持たつしやれ、知らぬ事は有るまい、丹平でムるわ丹平でムるわ、ト是にて淨閑 淨「ア、丹平どのか、ト見 丹「さやうさやう、丹平殿は三十に成るかならぬに主人のお使ひ、ア、くたびれました、淨「左様でムらう、辻駕にでものられいで、丹「さだめて足が、淨「あいたかつたでムらうに、なせ、丹「ツン、、淨「かごにでものらしやらぬぞ、ト上るに 丹「エ、何をおつしやり升、コレ與次兵衛様、密事の御用もムれども、書いたるものほもし落ちるの大事をぞんじ、拙者すぐさま御口上にて申すでムらう、淨「それは御苦勞、此方もよん所なきとり込ムつて只今のふあいさつ、シテ倉岡氏より御用のおもむきうけたまはりた、丹「イヤモウ丈左衛門殿と同腹中の貴公様、先達て十次兵衛が落度と成つ

たる胡蝶の香合、屋敷へ置くも氣遣はしく、幸ひ主人のいせんの家來、今は駕の甚兵衛と申す者、大丈夫を見こみし故、かれに暫く預け置いて、まだ御口上がふる、かの藝者あづまが事、身受金三百兩と承る、何卒貴公方にて右の金子を調達有つて、ト淨閑が見イヤ與次兵衛様には、こりや又候御元服でふるな、淨「さやう、けふよりいたして又候淨閑、丹、夫はお目出たう存じ升る、時に只今申しかけたる三百金の御返事はな、淨「アコレ、丹平殿々々々、お詞のちうでふるが、今日よん所なう身代を悴にゆづつて跡の後悔、御覽の通り又候あたまは隠居淨閑、金だんすのかぎ迄も取りあげられ、イヤモウ二朱の工面もいたしにくい、其儀よろしうお断をたのみぞんじ升る、ト能き時分より下駄の市番やの外にて、火の用心の行燈の掃除してあたりしが、ふつとふたりが相談を聞き、門口にて聞耳立て丹「それは近ごろ氣の毒千ばん、まだふる、イヤ別儀でもふらぬが、家中橋本治部右衛門娘お照事、丈左衛門殿いたつて御懇望の所、貴公の御息與五郎ごのへ養子嫁、只今もつてお照事も、淨「サ、お待被成い、其お照が事はちと御相談ものでムる、それを申すも與五郎めをばいまくる手段、さすれ

ばお照にかまひはらぬ、こりやかう被成、貴公にはのちほど夜に入りお照がむかひ、其節をつとおわたり申さう、ふんじばつておつれなさい、丹「然らばのちほどお照をぬすみに參るほどに、急度おわたし被成いよ、淨「何がさて、コレ、丹平ごの、かねぐした、め置き申した倉岡ごのへ遣す御狀、届けておくりやれ、丹「承知いたした、早速身ごもへ、淨「おわたし申さう、箱守りより封じたる狀を出し、此狀たしかに倉岡ごのへ、丹「心得てふる、の市門にて思入、然らば後夜の鳴るを相圖に、お照をあげに、淨「御太儀ながら丹平ごの、丹「のち方參らう淨閑様、淨「何かと御苦勞、丹「ごりや出直して、ト合方暮六ツの、丹平向うへさなつけ向ふへ走り、淨「こりや日が暮れたに、見世へあかしをともしぬかえ、神棚へみあかしあげぬか、こりやイヤ善太め、男共はをらぬか、トつぶやきながらのれ方時の、障子家體よりお照様と書置の書きしまひ、照「さつきに、と、さんが、わたしが方へ持つてムんしたアノ金は、心あつての二百兩、あづまさんの身受の跡金、先へわたした其あとは、さうで此身を、ト、き置へ思入有る、こりや戸棚へ窺ひより、そつと戸を明け、たんの引出しより、さいふ入りの二百兩を取り出し、さいふへ書置をむすびつける、やはり相

方捨がれ、此時向より下駄の市丹平狀をばひやひ、立廻りながら出て來り、門口へ來て狀をばひ取る、此とたんにお照窺ひ、門口をあけんとする、下駄の市丹平を當てる、うんと聞絶してたち、番やの内へ倒る、下駄の市しやんと戸をさす、此の音にお照あざろき、戸にすがつて外を窺ふ、此音を聞き、權「だれだ、門口で今の音は何だ、トあんごをあげ見る、外にて下駄の市思入、お照はつと當惑の體、權九郎よく見て、ヤそこにもるはお照さんではらぬか、コレおまへはマア何をしてムり升、ト手を取る、照「ア、コレわしやちつと、權「モシ、ごうかお前はあぢなをぶらだわえ、サア奥へムりませ、照「サアわしやちつとナ、權「エ、來なさいといふに、トお照が持つたるヤこりやおまへそりやア金だが、照「ア、コレそれを、權「ヤこいつはゆだんが、トお照をむりに奥へ連れ行かうとする、此時下駄の市つる、此まに嬉しきこなしにてさいふを持ち向うへ走りはいる、權九郎ふりはごいて下駄の市へ懸る、立廻りにて權九郎が左の手を急度ねぢあげアイタ、、、、、ト小ゆびの跡いたむ思入、市「左の小ゆびのされたるは、こいつもせんぎの、權「ヤうぬは夜番の、トいほうとするアイタ、、、、ごうするごうする、市「まさかの時は、ト土藏のあいてあるを見つけ思入ちこみ、ぐわら、ト奥にて、次部「與次兵衛ごの、ト聲するゆゑ、さ戸をさす、奥にて、ト下駄の市こなし有つて門口へ出て、番屋へは入る、合方に成、ト奥より次部右衛門與次兵衛出て來り、與次「次部右門衛

様、モウお歸りでムり升るか、次部「日暮れましたればもはやお暇仕らうが、與次兵衛ごの、先刻と申し御家内の様子、いち、身が心にゑとく仕らぬ、お手前の家督となれば部屋住の與五郎に女房はいらぬもの、娘照めを受取つてまかり歸る、さう心得て下されい、與次「すりや與次兵衛めが家督とムれば、弟嫁のあの照を、次部「ハテ添はせる男がふるまいが、與次「イヤ品によつては私が、次部「ア、おいやるな、弟嫁が兄の女房に成りませうか、殊にこなたはみやこといふ藝者とやらを引いて、身持だじやくがしたらいで、娘の照めをなぐさみ物にいたさる、そりや此親がまかり成らぬ、いけ馬鹿々々しい、サ娘を爰へ連れてムれ、與次「さやうムれば是非がない、こりや女子ごも、お照をコレへ連れて參れ、ト奥の方へ、次部右衛門様、お照をお渡し申すからは、先程あなたの御持參なされし二百兩、おもち被成て下さりませ、ト合方に成り、金なきゆる思入有、ヤ、、、、さいせんお照が仕舞ひ置きしさいふのま、の二包、次部「いかいたしたな、與次「若し強慾の親人が、次部「ヤ、ト思入、奥はたくし出で來、善「モシ旦那様、お照様がお居間に御見え被

レ成ませぬ、與次「何アノお照が見えぬと申すか、善、ご
 こを尋ね申してもつきりお見え被レ成ませぬ、與次
 「すりや此金の行道も、次部「どう仕つた、與次「アイヤ
 夜みち厭はず心願にまた観音へ、入、それ挑燈付け
 て迎にゆきやれ、善、かしこまりました、ト奥に七、オ
 ットがつてんだ、トのれん口よりぶんの七、山崎やサアご
 うで歸りだ、おれが一所にいつてやらう〇コレのお
 お照さんはたしか驅落じやないかえ、善、ア、これさ
 〇やくにも立たぬ事を、ハイいつて参りませう、ト五ッ
拍子木にて、三人さも次部「娘へ遣す二百兩、大金持のお
 内故、そこらあたりへまぎれこみ〇金の行衛が知れ
 たなら、娘がありかも、與次「歸り次第にお跡から、ご
 うムつてもお照が縁を、次部「是迄なが、御世話の
 段、氣の毒ながら取りもごし、與次「其お心ならお照が
 諸道具、いひつけ置いたをそのま、爰へ、百、九、かし
 こまりました、トのれん口より、さねだんすはさみ箱を、九
 「お照様の三荷のお荷物、百、九、残らず爰へ、與次「持來
 れ、百、九、ハイ、ト奥へは與次「次部右衛門様、お照殿を
 おもごし申す上、おつけなされし此荷物、コレあなた
 へ、次部「うけ取りませう、諸道具よりは照めを去り

狀、三くだり半貫ひたい、與次「御尤、さやう有らんと
 與次兵衛が、聲與五郎の名代にした、め置いた數通
 のさり狀、お氣にいつたをされなりと、次部右衛門様
 ござらん被レ成て下さりませ、ト次部右衛門思入有つて、次
 部「アこりや去り狀と思ひの外、所々へ貸しつけ置か
 れたる、或は估券貸金の、與次「サ、其證文をしばらくあ
 なたへ、次部「預り置いた納りは、與次「我なき跡は弟が
 家督、其節目出度與五郎へ、其さり狀をお歸し有り、
 お照どのとも末長う、それゆゑあらたに去り狀を書
 かぬ心を御察し有つて、次部「身が預りの數通の去り
 狀、様子有らんす心ざし、さほご實儀のお手まへが、
 さいせんみだらなあの振舞、さだめてあれにも、與次
 「サ、夫といはれぬ實の親淨閑殿のむごくん、血をわ
 けたりし我さへも、つらくあたれば猶更に、義理ある
 お主の血のあまり、子で子にあらぬ與五郎に、家もゆ
 づらずあまつさへ、大恩うけし鴻野のお家、佞人ばら
 に一味して、此山崎のお家にもかゝるがどうも御先
 祖へ、次部「扱こそ讒者の倉岡に、ト思入與次「サそれゆ
 ゑ又も無理隠居、弟に難儀もかけまい爲め、次部「心望
 みのお手まへが、藝者ぐるひにアノみやこ、トよき時分

世話女房の形に着かへ、仁右衛門 みやこ身の代の百兩ね
 年季證文を持ち出、り居て、 だり取り、女房約束しやんしたみやこといふは、與五
 郎さんに乳を上げたるうばが娘、今は駕やの甚兵衛
 が、夫婦かせぎの女わざ、おしづと申す女髪結、與次兵
 衛さんのお頼みゆる、似付かぬ藝者のこしらへもの、
 與五郎さまは此賤がお預かり申しました、さはいふ
 ものの常々から心よからぬこちの人、ア、又ぬしの
 心も、ト思入 仁「みやこへやつた立金百兩、殊に呉服や
 小間物やへ渡した金を取りあつめ、都合合せて二百
 兩、あづま殿へ跡金に持つて行つたは、講頭此仁右衛
 門がたのまれて、受取つて來た年季證文、ト見せ 次部
 「さうとは知らずはやまつて娘が家出、さいふの金行
 方しれぬも、まさしくあづまが身うけをと、與次「貞女
 のお照も此家に置かれぬ義理に、持かへす荷物のう
 ちをあらためて、トたんの引出しをあげる、内は 次部「受
 取り歸るは次部右衛門〇こりや引出しに包金、與次「荷
 物の内は在金の、十萬兩をお照につけて、次部「すりや
 與五郎が家督と成らば、與次「其節目出度それ迄は、橋
 本氏へあづける荷物、次部「娘が品はうけ取らんが、故
 なき多くのあの金は、トよき時分下駄の市ついで、 市代

代つゝ山崎や、役目には是非なく封印いたす、トつかつ
通 次部「やすりや此家へ封印の、市「役目は則ち三原
 傳藏、鴻野の大恩うけながら、そこたくみある丈左衛
 門、身が別家たる有右衛門、それに組する此家のある
 じ、與次「サ、其親人をたすけたく、講中方と連だちて、
 宿老ごのにて何かのやうす、ト所詮おかみのお疑ひ、
 與次「はれる迄牢舎の此身、トはたなわぐ、下着の みやこ
 「ヤ、與次兵衛さまはあの繩め、與次「小手をゆるめし
 羽がひ縮、市「それもたれゆるゑ、強慾の親の難儀に義理
 有る弟、うきめを見せじと其身に引うけ、次部「たごへ
 牢舎をいたすとも、いひわけた、ばすぐに赦免の、與次
 「すまぬは人を殺せし科人、市「わるもの鷲の長吉を
 殺せしものは證據の小指、仁「與五郎ごのにも疑ひが、
 與次「イ、ヤ弟計りでない、此與次兵衛も小ゆびがム
 らぬ、みやこ「そりやソレさつきにお照さんに、與次
 「こりやいらざる女の扣へてゐやれ、市「小指のない
 はまだ外に、うちこみ置きし權九郎、トつかつ、土藏を
 て、きやつも左りの小指がムらぬ、次部「すりや人殺し
 は權九郎、權「アコレどうして私、トうづくまる、淨閑 淨「毛
 頭知らぬ權九郎、其人殺しはあの與五郎、シテ又何で

此家へ封印、市科は其身におぼえが有らうが、淨シテ其證據は、丹平出で、丹其お使は此丹平、旦那の悪事を見限つて、傳藏様へ歸り忠、歸り仕事のこなたの此狀、ト密書を、淨ヤ、其狀までもうま〜と、ト立、兵衛引さらへ、與次「コレお年寄りの老耄が、何であらう急度成つて、」
とおまへは御隠居、狀の宛名はやはり與次兵衛、あなたは淨閑、すりやその返書は此與次兵衛、こなたに科は懸けませぬ、うろたへすともナモシ、ト思入有、イザ傳藏様、市「縁の切れたるお照が諸道具、かまひムらぬ引取りめされい、與次「エ重々厚き、淨「どうやら荷物に、權、まさしく在金、ト兩人、ト、次部右衛門淨閑を引締る、皆々「コレハ、市「お上みのお咎め、いちまきは是非なくかゝる山崎や、外に決してとがめはムらぬ、與次「でも此小ゆびの疑ひが、市「イ、ヤきやつにも指はムらぬ、其人殺しは權九郎、あまりよこあひ出ぬうちに、與次「御苦勞ながら、次部「引取る諸道具、市「引とるめしうご、丹平繩をひかへる、丹「科人立たう、仁「やがて赦免の、みやこ、其時目出たう、與次「命ムらば、ト思入、市「次部右衛門どの、次部「傳藏どの、與次「御役目御苦勞、淨「多くの金を、ト、次兵衛淨閑を引つけ、與次「親仁様、

淨「ヤ、トきつこ、與次「これが此世の、トほりりとして次部思入有、市「武士にもまさる、次部「男一びき、與次「アモシ、ト淨閑を下へひき廻して、サお引なされませ、ト兩手を廻し、ト、引する、木のかしら、サお引なされませ、す、めいしく、拍子幕

當秋八幡祭五

第二番目大切

淨瑠璃 千種の花色世盛
鴻野下屋敷倉岡閑居の場

役人替名

- 一 大和團子賣月見三五郎 坂東三津五郎
- 一 三五郎女房おいし 岩井半四郎
- 一 山崎や與五郎 尾上松助
- 一 げいしやあづま 澤村田之助
- 一 三原有右衛門 嵐新平
- 一 入間彦助 坂東鶴十郎
- 一 葶法印篋坊 坂東義助
- 一 嫩巫女小松 岩井松之助
- 一 倉岡丈左衛門 松本幸四郎
- 一 南方十次兵衛 坂東三津五郎
- 一 入間彦助 坂東鶴十郎
- 一 中間 市川栗藏

- 一 捕手 坂東善次
- 一 同 澤村川藏
- 一 同 市川仙藏
- 一 同 松本米藏
- 一 同 松本富藏
- 一 同 坂東熊平
- 一 同 市川團兵衛
- 一 同 中村次郎三

當秋八幡祭五

第二番目大切

淨瑠璃 千種の花色世盛

本舞臺三間のあひだ、むかう淺黄幕一めんに柱木の垣、下の方にふげんぼさつとあかく記せし石の勝示杭、こゝに有右衛門彦助着流し尻からげ大小にて、有右衛門彦助をひきこめてゐる、寺鐘にて幕明く、トすぐ木魚のおこ、

有右衛門「またつしやい、すりや彦助にはあのいよいよ、彦助「ハテ先刻よりも申す通り、紛失の香爐を十次兵衛が手よりさしあげて返さんしたゆゑ、倉岡どのの是迄の悪事もどうやら露顯のやうす、さすればわれ〜いつまでも敵役で居つたなら、しまひの程もとぞんするゆゑ、これから心を改めて、次部右衛門との十次兵衛へ詫いたして勤める了簡、貴殿も身ごもと御一所に、有「イヤ、此三原有右衛門は神文までもとりかはした丈左衛門と、ごこまでも同ぶく中と悟道を定め、しよてからかたんの今になり、何しに心を變じ申さう、貴殿も武士のいぢをたて、ごこかくも倉岡

ア卑怯な彦助、百姓ぐるめお身もごも〜、彦「それみなぬかるな、四人「のがしはしないぞ、ト禪のつこめに、鎌をもつてたちかゝる、有右衛門そのまゝ彦助へぬいてかゝるを、彦助身をかばす、四人有右衛門へうつてかゝる、此間に彦助は向うへのかれて走りに入る、有右衛門四人をあいてにしてよろしくありて、ト四人は向うへにげてはいる、有右衛門跡を追はうとして、おもひれありて刀をおさめ、それ下座へいつさんにはい、トやばり禪のつこめに、此道具ぶんまはす、

本舞臺三間のあひだ、むかう草土手こゝに常磐津連中ゐならび、ぶたいは一面に萩すゝきの土手板、花道へかけて見事に飾りつけ、日覆より染葉のもみぢの釣枝、下座の口の奥深にあづま権現の幟を大ぶんたてならべ、此道具おさまる、ト頭取いでて上りの名題役人ぶれありて、そのため口上さやうさありて、へびきに、上るり「せんだんの實をむすぶてふ暮の秋、月の友ごちいたづらと、わやくざかりがあとやさき、見るを見まねの錫杖に、すいもふりよき神いさめ、ト大太鼓をふるし、宮がぐらになりて、向うより小松びらりぼうし、ちはやゆふだすき、巫女のなりにて細女の面をうしろへかけ、鈴と扇をもち出できたり、上るり「まだしよわけさへしらぎぬや、ちはやふるふる袖ふる巫女の、あづさの弓もはりつよき、お江

ごのと、彦「イヤ〜その武士かたぎは昔のこと、今の世界を御ぞんじない有右どのなら、たつてはすゝめぬ、拙者一人身のおさまりを、ト振切つて行かうとする、有右衛門またこれをさへて、有「待ちやれ、さう聞いてはこのまゝにお身をやつては、あることないこといひあげられては、いつときも身のたゝすみのならぬわれ〜、此場に於て武士のごもぐひ、入間彦助かくごおしやれ、彦「そりや身ごもより貴殿かくごを、有「イヤ〜お身まづ覺悟おしやれ、彦「はてさて辭宜には及び申さぬ、まづ〜そこもと、有「イヤ〜お身まづ、ト互にあらそひ顔見合せ、彦「しからは、有「たがひに、兩人「覺悟いたそう、トおもひれ、このおこけはしく、下座よりわかいし四人百姓にて、のさき木魚のてんでに鋤鎌をもちはしり出で、兩人をさりまき、四人「うごかつしやるな、有「彦「こりや百姓ごも、いかゞいたす、○「百姓ごも、すさまじい、十次兵衛さまからひそかに仰附けられて、△三原有右衛門入間彦助若しこのあたりへみえたなら、□ひつく〜してつれてこいと、いま庄やどのからいひつけられ、×「そのもごりあし見つけた二人、サアかくごして、四人「繩かゝらつしやい、彦「ア、これ〜はやまるな〜、身ごもはもはや十次兵衛がた、悪人はその有右衛門ひとり、有「ヤ

戸のうまれの目のほりも、鈴ふるてもどかはゆらし、やがて色仕と三つ扇、トすりかえ入りの浮いた合方になり、あさより糞坊きめ頭申すいかけ法印の形にて、錫杖と扇をもち出で來り、「それと三ツ大こゝらで大山、大聖ふごうはこちらがお旦那、朝からお神酒でのたまくさわぐだ、ばあさんちいさん晩にや庚申茶めしで甲子、ふくとくえんめい家なんは三ぼう、松「こう神のおまへを見れば松之助、みの「こちは巳、松「みの助さんおやはないかどゆふだすき、みの「かけてぞねがふ御ひいきの、松「めぐみにぞだつ二葉巫女、みの「みばへ法印うちつれて、中よきごうし來りける、トよろしくありて、糞坊「コウ〜松さん、上るりのはじめから、おいらばかりこんなに出ちやア、あなたがたに叱られやアしまいかのう、小松「サアそれでわたしもこはうてならぬが、みのさん、ごうぞ仕様はないかいなア、みの「まちたまへよ、ト手をくんで、思案の思入、かうせうわな、もし皆さんに叱られたら、おとつさんと太夫さんにわびごとをしてもらはうじやアないか、松「ほんにそれがよいわいな、トこのさき向う揚幕にて、きちかひよぼうさみ、みの「アレ〜氣ちがひだ〜、爰へ來たらばな

ぶつてやらう、松、こりや面白からうわいなア、みの「そ
んならこ」で、ドレ松助としやれようか、

上るり「萩のうは風萩の露、菊にも野路のみだれざ
き、

トカケリになり、むかうより奥五郎のたれ紫の病ひはちまき着
ながし、片肌ぬぎかけしどけなき形にて、萩の枝をかつぎ扇もち
狂亂にて出て來
り花道にて、

「みだれそめにしはじめより、あづまうけだせ山崎
と、うき名にたちし戀中も、まかせぬことのかずか
ずに、此身ひとつのものぐるひ、くるふこゝろはわ
れのみか、蝶もちぐさともつれあひ、ひらり〜
ひらりひらり〜、

ト此文句にて奥五郎くるふうち、ばたくにて向うより
あづま對の形、着ながし〜へ帯にて走り出て來り、

「こゝよこゝよその人の、ゆくへをたづねやうや
うと、それを見るよはしりつき、かはるすがたの
あさましと、いはでなみだの露しぐれ、わしじやあ
づまじや奥五郎さん、きをしづめてくださんせ、こ
れなアもうし盡さへも、つがひはなれぬ揚羽の蝶、
われ〜とでもふたりづれ、みらいまでものなか
なかを、あだにはせじととりつけば、いやおもひ人
はあれ〜、あづまの森とうつ〜なく、かけゆ

くたもとひかゆる袖、しどけなりふりとも〜に、
人のみるめもうやつらや、

トふるしくあつて、ぶたい、みの、松「そりや〜〇きちがひ
へ來る、寝坊小松見て、ト手をたいてはやす、あ、あづまア、
よほうさいよ〜、づま奥五郎をかこつて、

コレ〜、見ればマアかはゆらしい巫女さんに法師
さん、そのやうに氣のちがうた者をなぶらすと、どう
ぞ正氣になるやうにおまへがたの御祈禱で〇しかし
頑是のない子供衆に、こんなこというたどて、みの「コ
ウ〜姉さん、なんぼ形りはちいさくつても、山椒は
小つぶでからいといふによ、松「ソレ〜、なんぼわた
しらが子どもでも、その御祈禱はよう習うておぼえ
てゐるわいなア、あづま「なんじやえ、アノおまへがた
おふたりが、みの「頼むといふなら今こゝで、松「かみ
すいしめを、あづま「そんならどうぞたのむわいなア、

「おつとがてんといふま〜に、「さんげ〜」の法印
さまに、神おろしきめうてうらいと、錫杖をふりた
てまいかいな、コレナしやく杖をふらしやんせん
かいな、エ、しんきな人さんじや、おもしろや、「や
んおもしろや庭火たく、あまのうすめのながれと
て、お釜のまへのお徳女郎、あつちのなべではちよ

こ〜、こつちのなべではちよこ〜、たれに見し
よとてべにかねつけて、品やるふりも親ゆづり、お
ちやつびいではないかいな、「月夜がらすをナアよ
あけとおもひ、てんてつてんとおきの石、かはく間
もなき水仕わざ、ま〜もたいたりしらじもごろご
ろと、なんにつとめのやるせなや、「ませた世帯も
ならをより、七つか八つかむつまじと、見えても
さすががんせなし、たちまちなにかあらそひの、中
へ狂人わけいつて、松「コレ〜これはどういふも
んちやくか、わけはしらねどゆびつきりなかよし
こよし、ホツホほらの貝、めでたくひとつうつてお
け、しやん〜、庄やかりうご狐のよめ入、臺がさた
てがさ伊達どうぐ、ふりやれおふりやれ日でり雨、

「その雨よりもしつぼりと、ぬれてこひぢのおごも
りを、だいてながめてねん〜ころろんころ〜
よ、いとしねんねになにやろぞ、でん〜たいこに
ふりつゝみ、すゝやつぼ〜手にもちそへて、あい
しそだて、たのしみと、おもひし事もいたづらに、
あはどなしたる腹だちと、萩のしもとをてう〜て
う、みの、松「うたれてびつくり巫女法印、おいらにや

いかぬ氣ちがひごの、わらへ〜とふりすて、も
と來し道へにげてゆく、

ト此文句の内、あづましじう奥五郎を介抱しなげらよるしくふりあり
て、トみの坊小松わい〜こはやしなから、向へにげてはいる、ひ
きつ〜いて

「あづまはさ〜へひきごめ、なさけなや誰あら
う、山崎奥五郎さまとては、人におくれぬみだれ
髪、あづまが顔もみわすれてか、うつ〜なやと制す
れど、「風に尾花のさそはれて、ちり〜ばつとち
るふせい、せんかたなくぞみえにける、

トくるふ奥五郎を、やう〜ひ
きごめ介抱する、直に上るり、

「ありふれし世のすぎはひを又〜に、
ト祇園はやしになり、むかうより月見三五郎やつし片だすきにて、手
ぬぐひを鉢まきにして、蝶花形と子車の紋つきたる團扇もち、女
房あいに同じくついの形にて、あつらへのやまこ團
子の荷をさしになひかつぎ出できたり、花道にこまる、

「こんご仕だしじやなつけんけれども、雪か花かの
上白米を、ちわとてくだでさらしてひいて、なさけ
でこねてしつぼりと、色でまるめてふたりして、よ
なべ仕事についてやなげし、名物をめしませ〜
家づこに、買はうならいまじやく〜、今をさかりの
花道を、になふめうとの大和團子え、

トよろしくありて、ト此うち三五郎衛のうち 三五郎「サア、買はつしやい買はつしやい、おみやにめしませつきうりの、三、いし」大和團子の評判々々、トこれをき、 奥五郎「ヤア吉原の俄が爰へ来た、サア、大和團子が所望々々、あづま「アレせうごもない、そのやうな、三「ア、モシモシおかみさん、旦那が所望とおつしやるに、おまへがどやかうおつしやるは、エ、さてはひだりがき、ますな、いし」モシ、わたしごものいし、は、どんな上戸のおかたさまでも、酒のさかなになされ升ぞえ、三「まづお目ごほりて夫婦がつき賣り、いし」ふるからふともナアもうし、ト此うち三五郎衛のうち 三「ソレ、かア、らで、兩人「しつかとせ、

「いまの世の中なかうごいらぬ、しつちくはつちくつぎぎせる、ヤレモサウヤレ、サテナ、さぎみたばこがヤレ仲人する、しやうねめ、

「ウヤヤレ、サテナサテナ、落ちよ、とおどしておいて、壁に葛の葉のきごころ、「イヤ、團子にかこつけて、ていしゆをのろくせうわるめ、コレなにもかもしつてゐる、このごろとなりの候と、

あぢな目つきであいそうに、にばなの茶から袖口の、ほころびかゝるいろごとと、へ、見ればちがひはござんすまい、「コレそりやおまへなんじやいな、そなたを戀にわしが身は、三味せんのことよりもほそくやつれてなんよえ、白ひく唄がとりもつて、引木の手に手しめられし、あく性男にほれたのが、わたしがふせう、女房になりふりさへもいとひなう、ほんに男猫もだいて見ぬ、まじなこゝろをしりながら、ごうしてそんなとまくしかけ、いはれてそれは團子やの、やきもちげんくわとみゆる内、「また狂亂の心つき、たちあがるより、「しづまるこなた、あづまはそのまゝ、いたきとめ、

あづま「コレもうし奥五郎さん、心をつけてください、せ、あれよそのおかたはあのやうに、お内儀さんをおもうてじやに、おまへはわたしがつゆほども、かはゆるはないかいなア、ト奥五郎あつ 奥五「ムウ〇さうしてそなたは、あづま「あづまじやわいなア、奥五「なるほどそなたは藤やのあづま、こゝもやつぱりあづま〇の森、そなたはげい子こなたは名しよ、ごちらも〇ごちらも〇オ、あづまじや、

「あづまといふ名はそのむかし、たけき尊のおかもじさん、お船ゆさんにすいとなる、そのすいさまのしたはしく、戀を信濃のうすゐにて、わが妻やいのどのたまふより、あづまこそはなづけたり、われも尊にあらねども、わがつまこひしあづまはと、そぞろなみだにいと猶、

あづま「マそれほごまでに、

「わたしをばおもうてくだんすおこゝろは、うれしいながらにくらしい、おまへのくせであふたびに、げいこゝで内せうは、三みせん枕に客さんと、ねからないことむりな事、いうてじらしてくせつして、女子をなかつほごでマア、きちがひどはやばらしい、正氣になつてと取すがり、なみだぞこひのまことなれ、

ト此うち三五郎あ 三「道理こそ、さつきからをかしいそぶりを思つたが、へエそんならあなたはおさちかえ、いし「さうして奥五郎さまとおつしやるからは、もしやあの山崎やの、あづま「アイその奥五郎さんじやわいなア、三「それなればさつきから、いたしやうもあらうもの、わたくしは兄御の奥次兵衛さまに御恩にな

つた、月見の三五郎といふもの、これは則ち女房おしいし「うけたまはれば十次兵衛さまとやら、香合がお手にいつておやしきへ御歸參あそばし、それ故のさまの御婚禮もちか、そのおめでたに奥次兵衛さまも御赦免なされ、三「山崎やの家は奥五郎さまで新たに立て下さるよし、それゆゑ所々を手わけて、奥五郎さまのお行衛を、ト此内あづま あづま「そりやマアほんのことかいなア〇モシ、奥五郎さん、アレ今のおまへ聞いてかいなア、奥五「なんじや聞いたか、きいたかとはほど、ぎすか〇但しは辛子か異見の事か、トあづま あづま「なにをいうてもあのやうに、三「サア、ようムリ升、ごんな事をおつしやうと、オイ、ご御意次第、いし「ソレ、お氣にさからはぬやうにさへなされば、しせんと狂氣は直るぞやら、三「マア、いふなりさんぼうがようムリ升、ト此せりふ 奥五「アレ、あそこへゆくのは、隨とく寺の角連坊め、さてはあいつも、エ、エ色のうき世じやなア、

「坊さんが、醫者のまねして小脇ざし、それへそれへ、それ、羽織着て、伽羅でしきみの香をかく

し、世の中はこはやの酒にもまれてすいとなり、すが身をくふ蝟坊主、お足のふそくはなせでんす、おと姫さんへの心中に、てもそれはぶしつけせんばんな、

奥五「ハ、ハ、ハ、蝟といへば、コレ〜田子七二のかはりの俄の趣向、どうじやき、たい、サアみなもはなしてきかしや〜、ト三人顔見 三「ハ、アさては先生よし原きざりとみえるな、いし、あのやうにおつしやるもの、なんなどはなさずばなるまいぞえ、あづま、ソレ〜どうなりと間を合せて、あの狂氣の靜まるやうに、三「サアおまへは町の藝者ゆる、俄はしつてゐなさらうが、こちらは俄を見に行くひまさへ、あづま、さうではあらうがわたしもはなさうほどに、マアおまへ方よいやうに、三「か、アや、酒やぼた餅が出たら用心しやれ、こりやアおきつにばかされたも知れないぞえ、いし「なんのいな、マアなんなりとよいかげんに、奥五「サア〜俄のはなしはどうじや、早う聞たいく〜、三「よいはてんぼの皮とやらかさうか、いし「それがよいわいな、

「あづま吉原の全盛あそび、牽頭末社もうちむれ

て、女げいしやわれ〜と、綾羅をまとひきんしうの、かざりをなして趣向なす、あるが中にもどりわけて、むく鳥おどりのひやうしとり、「しげさ〜と戀にしやるしげさ〜の御勸化、山ざと越えても参りたや〜、しげさ〜の御勸化、山ざとこえても参りたや、「たかい山から谷みれば、おまん、おまんはかはいや染分たすきで布さらす〜、おまなんおまんはかはいや染分けたすきで布さらす、「佐渡でさく花、いやさのさつさ、新がたでひらくえ、さかく新潟はいやさのさつさ色所え、さつてもおもしろ雁つばめ、

トすぐにあさの唄のか、ハリになり、うかぬあづまを兩人してむりに踊らせる、あづま是非なくふりになる、

「しのお夜はそちらむかんせお月さん、いろのせかいじやに、「しんきらし〜あうた夜はついておくれなわけのかね、いろのせかいじやにな、しんきらし、エ、しんきらし、

奥五「おもしろい〜、いまの俄を見るにつけ、あとの月見は藤やの二かいで、そこいくまなき夜と共に、のみあかした大さわぎ、ソレそのときの總踊り、サアサア音頭々々、

「音頭々々に不狂人、くるはかされてひと踊り、これもめいわくかしのへ、

トこれより四人すりがれいりの手踊りになり、

「色のちぐさのなんなか〜に、萩の下露ぬりよとて萩の、うはきな〜うは風に、割木瓜のいたづらな、桔梗としらぬおとこめし、葛のうらみを刈かやに、ほんにこぼる、藍の花、かはゆらしさのおみなへし、

いし「こりやどうしても直らぬわいなア、三「ソレ〜思出した事がある、コレ〜こ、に此法性寺の聖人よりいたいた妙見さまの祕符のお守り、利生はすみやか奥五郎さまに、トふさこころより錦 いし「ほんにそれではお氣も直らうかいな、あづま「サア〜ちやつとお守を、三「オット承知〇こんなざいせせこう良薬病即せうめつ不老不死南無柳島妙見大士、ト守りを奥五郎即せうめつ不老不死南無柳島妙見大士、へいたつた、五郎つさあがり本性になりし思入、あづま「モシ心をたしかにもたしやんせ、三人「奥五郎さま〜、ト奥五郎あつまを 奥五「ヤあづまじやないか、三人「心がつきま見たかえ、奥五「さうしてそなたはいつの間に、あづま「サアおまへにわかれしその後、兄御さまのおなさ

けで、わたしは身ま〜になつたれど、山崎やお答めゆゑ、そなたはごこへも出されぬと、やつぱり藤やにをるうちに、おまへが狂氣の噂をきくと、あるにもあらぬすやう〜と、めぐりあうてもしごないお身、奥五「ムウそんなら田中にしのぶうち、甚兵衛はじめおてるが身のうへ、兄じや人のなんぎの様子、そなたの事も苦になつて、ハツと思ふとそれから夢、さうしてあのおふたりは、三「わたくしどもはお兄御さまのたいてい御恩になつたもの、いし「マア〜お心がついて此やうな、あづま「もう〜わたしはうれしさ、お二人さん推量してくださいさんせ、三「イヤもうその筈、お氣のついた上からは、何もかもめでたいづくし、くはしい事はみち〜おはなし、マア〜早う私かたまで〇しかしそのお姿では〇コレ〜か、ア、おれはちよつと小梅へいつて駕をやとつてくるあひだ、おぬしは此おふたりに、いし「アイ〜しつかりとおつき申してゐるほどに、おまへはちつとも、三「オ、サおきさま、あづま「そんなら早う、三「ドレ往て参りませうか、

「こ、ろもすぐな土手つゞき、小梅のかたへと、

トこれにて三五郎むかうへ急いでいるさ、すぐにはたたくになり、下座より右衛門走り出て来り、むかうを見送つてゐるあづまにゆきあたり、互にお、有「ヤ、わりやアあづまだな、あづま」さういふおまへは、與五「有右衛門有、與五郎うぬもこ、にうせたな、十次兵衛が歸參より、身に火のついて来たわれ、倉岡どのもこれからす、めて高飛をする有右衛門、あづまに丁度あつたも幸ひ、丈左衛門どのへつれてゆく、そのうへ權九がゆびの身がはり、本人なれば與五郎、われをひつたて、ゆく、ふたりともさきり、うせろ、あづま與五郎をひきたてようとする、いし「イヤわたしがあづかるおふたりさん、めつたにさうはならぬわいな、有「こしやくな女め、ならぬとぬかせば、いし「どうさんすえ、有「身ごもがかうして、いし「何をかきのけ兩人へかゝる、いし「有右衛門が帯をさらへて引もどす、あづま與五郎ありあふ白をふたりしてひきすりへだてにする、此内上

「シヤめんどうなとたちかゝるを、ありあふ白にてさそくのへだて、ふりきり又もむかふづら、眉間をさねのしゆもくづき、うたれてごつきり尻もちつき、「めでたくの若まつさまよ、枝もさかえて葉もしげる、おめでたや千代の子おめでたや、

ト三人にて有右衛門さあかしの立廻よろしくありて、トおちるたすきにて立廻りの内にわなをこしらへ、有右衛門を打倒す、有右衛門はつみに倒れると上り、いし「身をかせにおさへる、與五郎あづま白をころがし有右衛門がせなかへおしをおく、有右衛門もかく、あづま、與五「此間にともく、いし「サアおいでなされませ、

「千秋萬せい萬々歳と、手をうちつれてぞ、ト與五郎さきに、あづまが手をひき向うへはい、三重にて此道具ぶんまわす、

鴻野下屋敷倉岡閑居の場

本舞臺三間のあひだ、正めん九尺の屋たい大和ぶき、あつらへ打ぬき障子三枚、左右建仁寺がき石ごうろう植ごみ寒竹のやぶ、あつらへの門口四ツ目がき秋草手水ばち、すべて鴻野家下やしき倉岡丈左衛門閑居の庭さき、こゝに丈左衛門着ながし一本ざし、庭下駄をはきて手燭をもち、家體にこしかけやぶに目をつけ、竹のもとにすゞめの大ぶんむらがりある見え、時の捨がねすゞめの聲にて道具とまる、トすぐあつらへの相方、四方なく風調にうつ、丈左衛門思入ありて、

丈左衛門「ハテいぶかしき、庭前に夜いんにむらがる

小鳥のなくねはこゝろえぬ○野に伏勢あるときは飛鷹つらをみだすのたさへ、ことさら四方にうちたつるさつばつの音聲、ときを揚げゆく木にあらず、こゝは鴻野の下やかた丈左衛門が閑居といひ、此身のいひわけたゝずして、身ごもをめしとる手くばりなるか、ハテこゝろならざるこよひのふるまひ、ハテなんどやら、トあたりへこゝろをつけ小鳥に目をつけ、子すめさびさすたさいで来り、彦助「丈左衛門どの、彦助でゐる、ひそかに小門を、トほこく、丈「いる間氏、夜ふけてくるはこゝろえぬ、助内へはいり外へ思入ありて、彦「丈左衛門どの、もはやこの所に住居は無用、サこく、こゝを、丈「すりやそれがしがたくみのあらまし、彦「十次兵衛めが言上なし、ことに胡蝶の香箱をあいづが手よりさしあげて、貴殿やわれらが身のうへのがれず、有右衛門にもうらざりなし、明朝未明に上屋敷より御めしといひたて、なにげなう貴殿をよびよせ、つめばらきらせん企てムれば、當所のすまひも只今かざり、身共もちくてんつかまつる、サ貴殿も早々おたのきなされい、サ、おたちのき、トせりたて、丈左衛門思入あつて、丈「すりやかくしおいたる胡蝶の香箱、十次兵衛が手

にわたり、きやつは立身、丈左衛門はいひわけなく、いのちにかゝはる時節到来、ハテせひもなき、彦「サをれゆるこゝを、丈「しばらく此身をかくすには、古郷でムれば本國河内へ、彦「遠路と申し北海道は人目ござらん、丈「晝は忍びて夜ごとの旅、それも間道山越えに、彦「片時もはやく、丈「承知いたした、貴殿もはや、彦「心得ました、トすてがれ合方にて彦助むかうへかゝる、丈「れ箱をさりだし、内より數通の書物をさりだし見る事、彦助花道にて向うへつぶてをあひづする、揚まくより仲間号はりをこもし、あさより善次、次郎三くる具より手の形、善次、次郎三「彦助どの、彦「御兩所、善シテ丈左衛門がおちゆくさきは、彦「かれが本國まさしく河内へ、次郎「身をかくさんどのかれが白狀よな、彦「御兩所にはコレ、トふたりへ、兩人「心得た、いほりの左右を、ト思入、仲間提灯をけす、善次次郎ぶと、彦助仲間にも、やき、そらくこ門口へくる、丈「身ごも此うち丈左衛門密書をよくあらため見て、

へ一味の家中の諸武士、とりおく神文内意の密書、のこしおいてはかはいやかれらが、ト思入あり、書物をだんてやすする、此さき兩人門をうかぶ、すてがれ合方、むかうより川藏はらまき陣笠たすき野袴大小かされわらじにて十手をかまへ、あさより、ま平、仙藏、米藏、團兵衛、黒真捕手の形、わらんじにて十手をかまへ、ひそくこゝろひ出て来り、彦助川藏にさしやき、門

口に手くばりし家名をしるせし數通の書もの、やきうし
 なへばあとのうれひも、ト思入此とき彦助 彦「丈左衛
 門どの、ト丈左衛門 丈「彦助殿か、彦「おあけなさ
 れい、御あんごでふる吉事ト是にて丈 左衛門口
 をそつこ、ト思入あり 丈「又お來やつたか、彦「御あんごなされい、
 おめでたうぞんずる、仲間「丈左衛門さま御あん
 ごなさるゝめでたきおしらせ、ちうをそんでまゐり
 ました、丈「彦助どの、下部をめしつれ丈左衛門が吉事
 とは、彦「およろこびなされい、貴公のお身に恙はご
 ざらぬ、丈「ヤ、ヤ、ヤ、そりやごういたして、仲間
 「御あんごなされませ、十次兵衛めがぢさんの寶はま
 つかなにせもの、丈「ヤなんと申す、あの寶が、彦「サ、
 寶はにせもの、上を詐るお咎めにて、又候や十次兵衛
 御前のおもては不首尾のやうす、下部が只今ものが
 たり、丈「あの十次兵衛めが、彦「サ、此うへどもに其元
 に氣遣ひムらぬ、もはや御あんご、仲間「た、今これ
 へ殿より赦免のお使者の來來、彦「きづかひめさるな
 丈左衛門どの、丈「さうおいやるが實説でムるか、彦
 「何しにいつはりを申さうや、身共もまことにあんご
 いたした、仲間「およろこびなされませ、トすてせり ぶにて兩人

左右より近づき、ゆ 兩人「どつた、ト兩人むなづくしをさる、丈左
 だんをうかひ、衛門心得、わざしをさうさ
 する、彦助手ばやくとつて門の方へなげやる、丈左衛門はつさおごろ
 きふたりをなげのけ、つかく、さゆかうする、外より富藏とつたさ
 かけこむ、丈左衛門へかゝる、このとき奥よりわかい衆二 若い衆
 三人仲間あるひは着ながしの若衆にてつかく、さ出で、
 「何者じや、ト見 イヤ、ヤ、ヤ、トあごろきにげてはいる、三
 人立廻りにて、丈左衛門やた
 いのうちにかけたる刀を手ばやくさり、組つく三人を見、ささる、
 門口にうかふ川藏いちく、下知する思入、團兵衛、仙藏、米藏、くま
 平だんく、さか、り見、ささる、此うち物すこきなりもの、奥
 より次郎三、善次走り出て丈左衛門へかゝり、立廻りよろしく、丈左衛
 門兩人をきつて、手水鉢の柄杓をさり水をくみ一口のんで思入
 あり、ゆうく、さ門口へ出ようとする、そこにうかふ川藏身こしら
 へしてさつたさかゝるを、丈左衛門めきうちにけさに切り倒し、血刀
 をひつさげ向うへかゝる、此内始終すてがね早びやうし木、ものすこ
 き相方、あげ善より十次兵衛くさりほちまき大小よてんの形り、十手
 取繩をもちつかく、さ出、丈左衛門をさへ、本ふたい迄おしもとし、
 立廻つてきつと留 丈「ヤ、ヤ、ヤ、そちは南方十次兵衛、
 ずりや鴻野家へ歸參なし、十次兵衛「汝をめしとる役目
 をこひうけ、二番手おそしとひかへしに、組子をなや
 めてにげゆくとも、もはや叶はぬ天のあみ、身が落度
 たるお家の重寶たづねいだしてさしあげたれば、い
 せんにかはらぬ十次兵衛、弟與兵衛が切腹も、みな其
 方がなすところ、弟のかたき丈左衛門うでをまはす
 か、たゞし又此場でふみつけ繩かけうか、サア、サア、
 サアなんと、丈「こしやくな南方十次兵衛、丈左衛門

がしにもものぐるひ、きつて、きりぬける、みちあけ
 て通まじきや、十次「お家に仇する國賊め、腕まはせ、
 丈「かたなのきれあぢかくごなせ、十次「こしやくな、ど
 つた、トわらじをうちつける、丈左衛門きつてあさす、十次兵衛十手
 人になやかなるさり者のたてよろしくあつて、ごつこいさ留る、う
 しるへわかいしゆのさりて大せいすはり十手にてばらくさりま
 き、若い衆「うごくな、兩人「ごつこい、丈「まづ今日は是
 切り、ト目出たく打出し、

當秋八幡祭六

第二番目八幕目 大川橋の場

役人替名

- 一夜そば賣與兵衛 坂東三津五郎
- 一野手の三 尾上松助
- 一かごかき土手の又 萬藏
- 一山崎屋娘おてる 岩井半四郎
- 一かごの甚兵衛 松本幸四郎
- 其外若い衆大勢

當秋八幡祭六

第二番目八幕目 大川橋の場

本舞臺三間の間、向う黒幕千部開帳札澤山に建
て、橋のたもとに番屋あり、都て大川橋夜の體、
水茶屋のよし床几片よせある、此上に單物を
すつぱりかぶりし男寐て居る、四ツの鐘拍子木
の音にて幕明く、トよき所に四ツ手かごを置き、甚兵衛土
衆女部買の仕出し其外表方の仕出し、捨ぜりふにてわかれば入る、

土手の又「ハイ旦那、おやすく参りやせう、ハイかごか
ご、ア、今夜は歸りがねえわえ、コレ甚兵衛どの、一ぶ
くのまつしやいな、ト是にてかごの内、甚兵衛「又や、今夜
はきつい物だな、又「さればさ通りは有るが、みんな
俄をひやかすむく鳥同前さ、トたばこすひつけて居る、やは
屋の手代にて、小でうちん
をさげすたく出て来る、ハイかご、おやすく参りや
せう、甚「モシ歸りかごでふりやす、酒手で参りやせ
う、ト善六につく、善六「ヤアこなたは甚兵衛どのじや
アねえか、甚「ア、善六どのか、善「見つけたぞ、コ
レ内へいつてもお留守ゆるゑ、大かた爰へ出てゐよう

と思つて来たが、もつけの調法、コレ彼の品はどうし
てくれるな、甚「コレサこなたもたいがい知れたもの
だ、二朱や三朱の質ではなし、さう是が急に、善「ハテ
大金だゆゑこつちも催促せにやアならぬ〇約束は十
日切り、親方はわし計りせがむわな、シテありやアい
よ、屋敷の、甚「知れた事だわな、かごかきがあん
な香箱を持つて何にするものだ、かうさつしやい、あ
したおらが内へ來さつし、善「行きませう、おどけは
のけ、さうぞ片を付けて下さい、時にわしが方からや
つた書物は有るかえ、甚「なくつてはコレ、ト大かますの
札を出し、是で有らう、善「見せさつし、トてうちん
の札を出し、あかりにて、
一札の事、一金二百兩也、右は胡蝶の香箱質物に預
り置候處實正也〇よし、おれが書た預りに違ひな
い、しかし紙たばこ入れへひつばさんで落すまいよ、
甚「ナニ落すものか、相談が有るわ、あした來さつし、
善「必ず頼むよ、是から向河岸迄いつてこねばならぬ、
甚「夜ふけたよ氣を付けていかつしやい、又「がうてき
にせいだすな、善「ドレ早くいつてこようか、ト捨鐘に
へか、つては入る、甚「べらぼうエ何金があるものか、又
「シテこなたは請けないのか、甚「先づア、いつたが

今晚の茶番さ、ハ、、、、又「大笑ひだ、ハイかご
かご、ト呼かけて居る、湯
幕東の口にて、九郎八、百介「迷子やア、おてる
様ア、ぶふんの七「迷子のおてる様ア、ト揚幕より百介山崎や
九郎八わかい衆鐘たい、を打ち、東の口よりぶふんの七おなじ弓張
棒をつき、吉次郎首へ鐘たい、をかけたきながら出て來り、本舞臺
にて落百、九「だれた、善「太に七じやアねえか、七「イ
合ひ、ヤア百助ごんも九郎八ごんも來たのか、九「まだおて
るさんの居所は知れねえか、百「コレエ、鐘どたいこ
を首へかけて、うぬはまたいたづら、い、きげんなや
つだなア、善「コレサむだ所じやアねえ、手がたりぬか
ら鐘どたいこを二役勤め升る、則ち八人藝がはだし
でにげる、九「大べらぼうめ、モウ一人りたのむがい、
わえ、善「それでもすけてくれてがねえわえ、ト思入、
見、コレ、かごの衆や、何と駄賃はいくらでもやる
から、一役すけてくれまいか、又「物は相談だ、駄賃が
よくばいつてしんせう、コレ甚兵衛ごん、いつてもよ
からうか、甚「すいぶんいつてしんせろ、したが行が
けに番所に虎か糸が居ようから、よこしてくれろ、又
「合點でござんす、甚「シテおまへ方はどこからふつた、
九「アイわしらは鳥越の山崎やでふるが、娘御が家出
をしましたよ、甚「エ、アノ山崎やの娘が見えねえ

のか、皆々「さうさ、甚「ハテそりや氣の毒な〇コレ又や、
早く棒組をよこせよ、又「合點でござんす、サア行きま
せう、百「是から本所の方を尋ねませう、七「おいらは
江戸の方へ行かうわえ、皆々「迷子のおてる様ア、
ト土手の又は此内へまじり、鐘をた甚「ア、そんなら米問屋
たき向うと橋へわかれては入る、
の山崎やの内、の娘が驅落と見えたらわえ、ト捨鐘に成り、
やつしの形にて、八わたやと書いたるあんどうを付けたるふうりん
そばの荷をかつぎ出て來り、すぐに本ぶたいへ來り、甚兵衛を見て、
與兵「ヤ甚兵衛ごんか、此頃はあひませぬの、甚「オ、
そばやの與兵衛ごんか、さうだあきないがござんせう、
與兵「アイもう十四五有りやす、今に賣つて仕舞ひや
す、甚「そいつはい、の、一ぱいつけてくれねえ、與兵
「アイあつもありか、甚「オイからみをしつかり入れて
下さい、與兵「承知さ、ト荷の内よりそばをさるへそばを入れ、思
入るしく、捨ぜりふにてもつて出し、思
サア出來やした、唐がらしはしつかり入れたよ、甚「其
事サ、トさらく、こもう一ぱい下さい、與兵「オイおかは
りかな、ト皿を甚「コレ皿がうつりかゝするによ、ち
つと洗ひねえ、與兵「ア、さうしたの、洗つて盛りやせ
う、ト片荷にある手桶にて洗はうとする、此時甚「ア、何の音
だ、ト切れたる音して桶の水こぼれる、甚「ア、何の音
した、與兵「桶のたが切れて水がみんなこぼれ

たいく、こいつは大變々々甚、こいつはとんだ事だ、そばやに水がないは、河童が皿をわつたやうなものだ、與兵「ア、コレどのみち水がなくてはならぬえが〇ア、い、事が有るわえ、コレ甚兵衛どん、おまへにちつと御むしんが有るわ、甚、なんだな、與兵、わしは向河岸の番所で米かし桶に水を一ぱい貰うて来るから、其内此荷をこなたちつとの内見て居て下さいな、甚、オイよし、見て居てしんせう、早くいつて來さつし〇エ、コレ棒組の糸野郎でも來そうなものだが、與兵「そんなら頼み升よ、此桶も番太が所へ預けて置かう、桶を取つて、一寸いつて來升、頼むよ、甚、早く歸らつしやいよ、與兵「おきにいつて來升、桶をもつて捨ぜりふに橋の、甚「ハテあの野郎共はもう來そうなものだが、呼かけて居る、向うはたくにておるはだしにて、ゑ、りへさいふをかけたつさんに走り出て來り、すぐに本舞臺へ來、甚「ハイかご、おかご參りやせう、おやすく參りますぞえ、呼かける、お、てる「モシ、かごやさん、甚「ア、女中だね、お召被成のかえ、てる「アイどうぞ乗せて下さいな、早く乗せて下さいな、甚「かしこまりました、ア、コレアノマア野郎めら、何をしてうせるやら、アノ又野郎めもあの位にいつてや

つたに〇モシ、おいそぎならマアおめし被成ませ、てる「どうぞ早うつれて行て下さいな、甚「よ、ムリやす、サアお乗り被成ませ、介抱して、こへ乗せつかはしてつまづき爪をけかへす、此、てる「アイタ、はみづに懷の金財布ぶらりささる、甚「どう被成ました、てる「爰の石につまづいて、爪をけがした、アイタ、ぶ、甚「ア、そりやおあぶなうムりました、ドレたばこ入れに治丹ぼうがあつたかしらぬ、紙たばこ入れの内、ア、又折わるくみんなにした、待ちなさいゆはへてあげやせう、紙があつた、たばこ入の半紙を出し、ひきさいて足のゆびの血をふき、捨ぜりふにて介抱する、此時よりかけたるさいふ甚兵衛がむりを見つけ、思入れ有つて、甚「モシこりや何でムリ升え、てる「金でムんす、甚「ア、金かえ、思入れ、捨鐘は、モシぞうりを買うて下さいな、甚「何さおまへ、おかごでござりやす、ぞうりはいりやせぬが、シテおまへはおひとりかえ、てる「アイひとりやゆゑに犬がこはうてならぬわいな、甚「モシそしておまへごこまでムリ升え、てる「エ、甚「イ、エサ、先きはごこ迄行きなされるのだえ、てる「アイ與五郎さんの居さんす所迄つれて行て下さいな、甚「エ、與五郎、そりやごこに居られ升、てる「サア其居なさんす先きは知れぬわいな、

甚「そいつはくうな尋ねものだ、今懷から出か、つた高もしつかり、娘の身でかちやはだしの驅落は、てつきりおまへは山崎やの、てる「よう知つて居なさんすの、甚「モシ向うから爰へ追手の衆が、てる「エ、向う揚幕にて、皆々「迷子のおてるさまア、呼ぶ、おてる大ぜいの聲して、皆々「迷子のおてるさまア、呼ぶ、おてる、てる「早うつれて行て下さいな、甚「兵衛がうしろに、甚「ようムリやす、こんな事がわしらが商賣、おまへを尋ねる人がこようが、めつたに渡す事じやアムりませぬ、落付いてムりませ、てる「それでもごうも心がせていならぬわいな、甚「よし、今つれていつて、所があれ、エ、コレ棒組めらはおらしやがるわ、一人りでもかけまいし、又向う、皆々「まよい子やアイ、甚「ア、コレこまつたものだ、トそば荷を見付、モシお嬢さん、かごでおまへをやりたいが棒組が居ないから、あの大せいに見らる、がいやならば、かうしなさい、ちつとの内此そば荷の中へ隠れなさい、さうしてわし一人りでかついで行き、わたしが内から送らせてやりやせう、さうなされませ、てる「ごうなりごよいやうにお頼み申升る、甚「そんなら爰へは入りなさい

し、ドレ、片荷づらねえやうに、こちらの道具をこちらへぶつこんで、此拍子に紙たばこ入を落す、てる「サア早う隠して下さいな、甚「ようムリやす、わしがついでぬちやア指でも付けさせる事じやアムりませぬ〇ソレこいみなさい、つむりがあぶないよ、介抱しておの内へ入れ、又さいふぶらりさ、皆々「まよい子やアイ、兵衛がうしろに、皆々「迷子のおてるさまア、呼ぶ、おてる大ぜいの聲して、皆々「迷子のおてるさまア、呼ぶ、おてる、てる「早うつれて行て下さいな、甚「兵衛がうしろに、向う揚幕より出て下の間のあゆみを通り、甚「此間に内へ、東の口へは入る、甚兵衛きつと見送り、思入れ有つて甚兵衛そばをかつぎ向うへは入る、やはり捨鐘、橋の方より與兵衛小桶に水を汲み捨ぜりふにて出、與兵「ヤレ、甚兵衛さん待遠でござんせう、やう、水の工面をして來ました、大きにお世話でムリやした、見廻し、コリヤアごうだ、甚兵衛どのもおれが荷もねえわ、こいつはごうだ、サア、大へんだ、荷が見えないわ、手かごを見つけて、四イヤア、コリヤア體甚兵衛どののかごだが、此かごが有るからは、爰らに甚公居るで有らうが、イヤハヤぢらすわ、大事のト身代だ、何でも尋ねてこいやアならねえ、ドレ一走り、又立戻り、イヤ、おれが荷計りさがしても、あのかごを爰へ捨て、もいか

れまい、何にしる甚兵衛が内へ此かごを持つていつ
 たら、おれが荷の行道がわからう、ア、コレとんだ咄
 した、あのかご甚が内は慥田中で有つたわえ、こを一人
 りして、つぎ、行かうとして落ちて有るたば、こ入れにつまづき、此
 たんに時の鐘はげしく、床臺の上に寐て居る男手足をのぼしぐつこ
 のびをしておき上る、野手の三月中代古ひさへ 與兵衛「何だたば
 物をふるつてくる、與兵衛たばこ入を取上げ、
 こ入が落ちて居たわ、ア、内になんたか書いた物が
 有るわえ、何だ、ト思入有つて、たばこ入の中より書付を出す、此
 て来る、空へ月出る、與兵衛「ア、何だ、一札之事、一金二百兩
 かき物を月にすかし見て、
 也、トよむ、野手の三をつさ前へまはり、かき物を下からとる、與兵
 衛「こなし有つて野手の三をさらへる、野手の三ふり切りにつ
 とする、與兵衛野手の三をさらへ、おもしき立廻り有つて、ト與兵
 衛野手の三書き物を争ふ、書き物ちぎれ、初のかた與兵衛の手に残り、
 名あてのかた野手の三の手にのこる、これより兩人くらがりの思入、
 かごをかせによろしく立廻り有つて、かごを横に倒す、與兵衛「こへ
 は入り、兩手にてかごをごろぼうめ、トいふを木の頭、野手の三思
 横にも思入有つて、入有つてかきものをすかし
 見る、與兵衛「とんだやつだ、トいふをきさみ
 思入あつて、
 シヤギリ 拍子幕 跡

當秋八幡祭七

第二番目九幕目 田中かごやの場
 役人替名

- 一夜そば賣南與兵衛 坂東三津五郎
- 實は南方十次兵衛 新平
- 一三原有右衛門 善次
- 一質や手代善六 萬藏
- 一かごかき土手の又 栗藏
- 一同田中の辰 團兵衛
- 一同入谷の金 照之助
- 一下女おなべ 熊平
- 一藝者おみつ 市川團之助
- 一甚兵衛女房おしづ 鶴十郎
- 一入間彦助 尾上松助
- 一野手の三 尾上松助
- 一山崎や與五郎 尾上松助
- 一次部右衛門娘おてる 岩井半四郎
- 一甚兵衛妹おはや 岩井半四郎

一かごや甚兵衛

松本幸四郎
其外若い衆大勢

當秋八幡祭七

第二番目九幕目 田中かごやの場
本舞臺三間の間、かや家根の二階作り、小家根に
 引窓あり、はぐ張障子を建て、よき所に丸太はし
 ごをかけたる上り口、下家ははぐばりの壁、のれ
 ん口一枚びらきの押入れ、上みの方寒竹の藪の
 外隣りの二階を見せ、四ツ目垣に葉雞頭しをん
 萩秋草の盛り、よき所に井戸繩つるべおろし有
 り、門口にかご甚と書いたる掛あんごう、路次口
 都て田中かごやの内の體、外に前幕のそば荷を
 おろし有る、隣り二階の琴歌にて幕明く、
 おろし有る、隣り二階の琴歌にて幕明く、
 け女房女髪結にて、おみつ藝者の形りふだん着にて鏡臺に向ひ、
 おしづおみつが髪を結うて居る、おなべ下女のなり、團子を丸め
 て居る、此見えて幕明く、花道へ入谷の金、田中の辰、かごかき
 にて土手の又をかごに乗せ、花道の内を捨せりふにてかごのけ
 居て、

おなべ「サア、おしづさんへ、月見の團子も私がみ
 んな丸めてしまつたぞえ、おしづ「そりや太儀でムん
 した、サアおみつさんモウようムり升、ヤレ、お

前も嘸待ごほでムりました、けふはごうでも月見ゆゑ、大ぶ仕事がムんしたわいなア、みつ「わたしも夕べ結うて貰はうと思つたに、夕べもお屋敷がムんして、結ふ間もなうなで付けて、けふまた下谷の御客と根岸のお下屋敷じやわいな、しづ「そりやおほかた夜がふけませう、けふはマア是で堪忍しなさんせ、又あすは結ひ直してあげようわいな、みつ「なんのいなア、ずいぶんようムんす、外の手と違つておしづさんの結はしやんしたは又違ふわいなア、なべ「イヤモウそりや世間で評判の有る濡髪のおしづさん、わつちもおまへの弟子になつて、ぬれがみが弟子の塵紙のおなべといふ急度した女髪結に成る氣じやわいな、しづ「ア、モウあんまりならはいいでもよいものじやわいな、ト手をふいて居る、門口 土手の又「ヤレ、かごの中でおの三人けいこをやめて、らアカめのをがいたかつた、田中の辰「どうでも龜井戸だけに、かめほごひねるやつさ、しづ「又は乗りざまがわるい、びく／＼としてかけるものじやアねえ、又「よしてもくれろ、此五月からおらア乗りづめに乗るやつさ、辰「ときにおしづさん、頭はごこへぞゆかれたかえ、しづ「何のいな、夕べ遅う戻らしやんして、眠

いというて二階に寐てじやわいなア、又「モシ一寸おこしてこようかえ、ト行かう、しづ「ア、コレおこすと跡できげんがわるい、かまうて下さんすな、入谷の金「モシおしづさんへ、あのそば荷はごこから来て居るえ、しづ「さればいな、夕べぬしがあの荷を預つたというてかついでムんして、ぬしのかごは先へ預けてムんしたわいな、なべ「ほんに道理で門にふうりんの荷が有ると思つた、そんならわたしやアあした結うておくれえ、しづ「アイ、どうぞけふはゆるして下さなせ、みつ「そんならわたしも行きやんせう、ト行かう、みつ「ほんにおはやさんはごこへムんしたえ、三人「成程おはやさんが見えねえの、しづ「あの子は月見の買物にいてじやわいな、おまへ歸りがけにあひなさんしたら、戻らんすやうにいうておくれえ、みつ「アイアイ合點じやわいな、又「おみつさん送つてあぎやうか、みつ「アイおかたじけ、辰、金「エ、つきやいなさるの、なべ「わつちを送つておくれぬか、三人「狼にたのみな、なべ「オヤすかねえノウウ、みつ「おしづさんあしたえ、しづ「ようお出たえ、ト隣り二階の歌に成り、お、又「アレ、アノ歌はごこだ、辰、ありや隣の下屋敷よ、金「ア、今

夜の月見にしやれるのか、ほんにけふは今戸の八まん様もかげ祭だな、又「さうさ、いざり家體を拵へたな、ちつとはやしに行かうか○アイヤそりやアさうと、月見の仕度はい、かえ、しづ「今おなべどのがほしいしをこしらへて居てじやわいな、三人「ドレ見せなさい、ト桶の中の團 辰「コレ見なさい、かう有らうと思つた、うぬがつらを見るやうに丸めやアがつた、しづ「よいやうに直して下さんせ、三人「おつと合點だ、ドレ丸めべいか、ト捨せりふにて團子を丸める、おしづ七輪を引よせ土びより善六質屋にてすた、善六「おしづさんおいそがしいの、しづ「善六さんかえ、善「アイ夕べの約束、甚兵衛ごのはお内かえ、又「何さ頭は二階に、しづ「コレ○イエ留主じやわいな、善「ア、またるすかえ、さう有らうと思つた、毎日々々留主だ、くも久しいものだ、若い手合は二階といへばお内儀は留主だといはるる、どうするものだ留主ならよし、コレおしづさんいつぞや千住で、忘れはしまし十日限りだといふ故に、香箱一つが二百兩、あいつも此頃わるい噂、マア冗な事は跡へ廻して、コレかみさん、受けらるゝなら受けなさい、あの時わしが立引で質に取つたばつた

りで、こなさんは勤をしねえじやアねえか、すんでの事に賣られる所を、善六が丁簡一つで勤奉公に行かねえよ、サうけて下さい、といつた所が二百兩の金は有るまい、おしづさんサア來なさい、取つて引立る、しづ「善六さん、わたしをどうしなさんす、善「ハテ香箱とおまへと入替にして二百兩うめかたをするわな、サア來なさいな、しづ「エ、放しなさんせ、トふり切る、三人「又「なんだ此質屋のとうへんぼくめ、かしらが留主だといふに、かみさんを取らまへてどうしやアがるのだ、辰「さうだ、何だ入替物にかみさんをつれて行く、コレエ、うぬが内じやア人間で質の出し入れをするか、おもしろいわ、コレ盆前につつこした結城木綿の單物と黒七子の帯のかはりに此金野郎をやるから、入れ替へて貸してくれや、コウ金公一寸いつてくりや、金「いかねえでどうするものだ、コレてつてわ質屋のさばてん野郎め、うぬが内へおれをおつれ申してな、此辰が雜物を入替へて貸してくりや、コレ代物が米を喰ふよ、三度づつ据膳で菜肴を付けやアがれ、御酒もあがるぞ、とつけもねえ猿唐人めだ、善「なんだ此極樂とんぼめら、うぬらが知つた事じやア

コレか、アや、外の所じやアない、ツイいつてあげやな、しづ「それじやというてわたしやアノ押入に、甚な入、しづ「押付け行かう程に、マアおまへは先へ、な、サア一所にお出な、甚、ハテ一寸行きやれな、ト歌ふにてせり立て向うへは入る、甚兵衛二階より跡を見送り、成り、びんしやんとして押入へ心のこし、おしづをな、捨せり、甚「妹もか、アも居ないから、心置なくあの子の素性、ト相方に成り、二階の障子を明け、おてる前幕の形にてさいふ二百兩の金と書置を持つて居る、コレ、娘御さん、おまへひもじくはないかえ、おてる「イエ、ただほしうはムんせぬが、夕べから深切にいたはつて下さんすおまへ、お禮は詞にのべられませぬ、有難うムり升る、甚「何の禮に及ぶものかな、聞けばおまへも大身代のあの山崎やの娘御とあれば、まんざら先の知れない人でもなし、定めて智どのがおまへの氣に入らぬのか、又舅がむづかしく、よん所なく淵川へ身を沈めるといふやうな事と見たゆゑ、夫れでそば荷へ入れてつれて来たは、おまへの心いきを聞いて、内へ歸して上げようと思つて、夕べから二階へ隠し妹にもか、アにも沙汰をせぬのは、悪く氣取ると小むづかしいから、コレたいがいな事ならわしと一所に、晩には歸りなさいよ、てる「なる程しんせつなお詞

嬉しうムり升るが、わたしやその智さんが氣に入らぬの舅御に飽いたのと申すやうな事じやムりませぬ、一旦家出したからは、もう内へは歸られませぬ、甚「ア、内へ歸られぬとは、外に色でも、てる「エ、何のマアさういふ事じやムんせぬ、わたし殿御は與五郎さん、大身代とはいふ物の、まだ部屋住の心にまかせず、苦勞さしやんす二百兩、どうぞ心をやすめうと、何をお隠し申ませう、親御さんの目を忍びて持つて參つた二百兩、與五郎さんに渡したうムり升る、此金渡した其跡は所詮わたしは、ト財布入りの金を出し、甚「そりやアノほんの金か、てる「ア、二百兩ムり升る、甚「ハテ有る所には、トちるち、其書いた物は何だ、てる「ア、イこりやちつと私が、ト思、モシそこらに私が櫛は落ちてはムんせぬかえ、甚「ナニ櫛が、てる「ア、イ七寶つなぎの蒔繪のくしが、甚「ア、そりやアタべ落しはしねえかの〇マアその書物をちよつと、ト寄るをちやつ、てる「イ、エこりやちつと、ト思、甚「ハテ大まい二百兩、娘の身分で、ト急度目をつける、しづ「おはやさん、私が持つてあげようわいなア、ト思入、テツツ、に成り、向うよりおしづげ籠に入れし蛤を持ち、片手に、ト思、枝豆を持つて出で来る、跡よりおはやさん、二三把持つて出で来る、花道にて、ト思、おはや「モシおしづさ

ん、私が持つて行きやんせう、サ爰へよこしなさんせ、しづ「是はしたり、おまへ計り持つ役でもムんすまい、私が持つて上げようわいなア、はや「シテ兄さんは目がさめてかえ、しづ「アいたしかおきてムんした、月見の買物も、其やうにせわしなうせいでもすむ事を、朝からおまへを便に出して、わたしや氣の毒じやわいな、はや「イエモウ兄さんのせわしいは、今はじまつた事じやムんせぬ、嘘おまへうるさうムんせう、しづ「イエモウあの氣性を知らないでは、どうで一日も女房に成つて居らりやうぞいなア、ホ、ホ、ホ、サア來なさんせ、トやはリテツツ、にて、はや「兄さん今戻りましたぞえ、ト上方の井戸端にある手桶の内へす、甚「大ぶ使がおそかつたの、おしづはもう歸つたか、しづ「ハイはやい筈じやわいな、ツイなでつける計りじやわいな、甚「道理で早かつたな、コレ蛤を買つたか、はや「アイ買つて戻りました、甚「よく洗つて砂をはかしておかつし、はや「アイ洗つて置きやせう、ト立たうとするを、甚「コレ、か、アにさせやな、はや「何のいな、一寸私

した、ドレ取つて来て、ト行かうとする、甚「ア、コレ二階なら行くにやア及ばぬ、そんなら寐ころぶにも及ばぬ、サアコレおはや一寸來さつし、咄しが有るよ、はや「アイ、ト相方に甚「妹や、今手まへに蛤を洗はさず水しわざをさせぬえも、手足をふとくしまいために、此間からいふ事だが、おぬしはさうでも手かけめかけの口が有つても、その奉公は不承知か、はや「アイ、今此様に兄さんのお世話になる身を以て、不承知のな人のご其様な我儘な事も申しませぬが、甚「サ我儘な事をいはねば、コレ爰にか、アも聞いてゐるが、まさかの時に力になるは兄弟の役だわ、おぬしは知るまが、いつぞや牢へは入つたも元は金から起つた事、其時はまだ竹の塚に居た時よ、あの土地にも住居がならず、此頃田中へ引越したが、其砌りはすでにか、アも賣らうとしたが、其借金が今におれが骨がらみ、質屋にはせがまれる、屋敷からは催促、イヤモウやせぼつたくてなるものじやアねえ、はや「サアそれもないが、おしづさんの噂に聞いて知つて居やんす、よしまたおまへが事わけいうて頼まんせいでも、親のな跡は兄さんは親もどうせん、おまへの爲に成る事

なら、私がやうな女でも、めかけ奉公月がこひ勤奉公に賣られても、甚、大事がなくば相談して、はや「サアあげたいものじやがどうも私は、甚、亭主が有るか、はや「アイ、甚、亭主は何だ、しづ「ハテそれまであらはに聞かなくても、甚、コレサ兄が聞くのにだれに遠慮、妹が亭主は、はや「アイ侍でムリ升、甚、ア、武士か、名は何といふ、はや「それはどうも、ト思 甚「いはれねえと、ハアあんまりろくな者でも有るまい、はや「サア身性がよいかわるいかは、親兄弟のゆるしなきあひだ、いづくのころびやひでも、急度した夫は侍、今にも尋ねてムんすりや、女夫にならにやアならぬ約束、それゆゑどうも兄さんの手詰も知つても儘ならぬ、我身ながらもぬし有るわたし、聞わけ有つてめぐり逢ふ迄、甚、兄が所の居候、妹ながら愛きやうも色氣も持つた生れ付、今金に成るさいちうに、向うの知れぬ男を待つは、しづ「ふんめうな事ながら、先のお方も侍の今にもムんす其時は、いは「おまへは兄の事、はや「武家の小舅不足なう、左り團扇の樂隠居、孝行盡すは妹の役、甚、かごのふとんも綾錦のあんべらで張り、四手かご扱息杖は紫檀か黒檀、はや「なんなどおまへの

すき次第、甚、やつぱりかごをかゝせるか、コレ妹、おぬしは一人り呑込んだが、いよゝ尋ねて來るといふ證據が有るか、はや「ムリ升る、互にめぐり逢ふといふ證據は爰に、ト相方に成り、片わきのほり箱の内より、モシ 兄さん此茶碗の片われを持つてムるが私が夫、つぎあはすれば夫婦一對、甚、われた茶わんが證據なら、おぬしが亭主は武士じやア有るまい、てつきりそりやア、はや「エ、甚、焼つぎ屋で有らう、しづ「何をマアあほらしい、コレおはやさん、いは「茶わんの其かけは、おまへの爲には殿御じやぞえ、はや「アイなア、いは「しんすりや男もどうせん、わざとけふは祝ひ日の、夫をうやまふ此神だな、茶わんの片しを、トふくさのま わんの片し、しづ「ホンニ今もらうた此酒、おみきに上げて置かうわいな、甚兵衛見て 甚、成程酒が有るならこいつは幸ひ、鼠いらすにしやけの焼いたが、ドレ一ぱいやらうか、トすつと立つて押入れへかゝる、 しづ「アアめつそうな、どうして爰に、はや「でも今朝迄もあの膳棚に、しづ「ア、コレそれはさつきに、あの猫が、甚「ひいていつたか、しづ「アイ、はや「それでも今迄、しづ

「ア、申し、そさうな事をしやんしたわいな、ト思入、お 衛合點の行かぬこなし、歌になり、向うより有右衛門彦助羽織大小にて出て來り、跡よりいぜんの善六付いて來り、花道にて三人耳打して、善六は路次の内へは入 有右衛門「かごの甚兵衛、宿にをるか、甚、是は有右衛門様よう、お出被成ました、ト思 有「サ彦助ごの、貴公にも、兩人「心得ました、ト兩人上 甚「コリヤ彦助様も御同道でムリ升るか、彦助「今日は内内用事有つて參つた、有「ちと密々に、甚、うけたまはりませう、コレかゝアや、手まへは妹をつれてわざと團子でも拵へねえか、しづ「アイもうふかす計りでムんす、はや「ふかすといへば、あの蛤も洗うて置かうわいな、しづ「さうしやんせう、甚、コレついでに酒もかんをつけさつし、しづ「合點じやわいな、はや「ハイあなた方ゆるりとお咄しなされませ、ト歌になり、おしづ蛤さ ちを見て奥へは入る、有右衛門は始終おぼや、團子を持ち、おぼや樽を に見され居る思入、甚兵衛思入有つて、 甚、モシ旦那方、シテ今日のお出は、アノお預り申した、有「イヤ其儀もあれど、内々頼みと申すは、コレ此人相書じやて、繪姿を出し し、 甚、エ、其繪姿を、彦「甚兵衛へ頼みとは、則ちあれ成る人相書、其方も聞いたで有らう、先達て切腹なし、獄門にかけ置きたる寶の盜賊南方十次兵衛、きやつ

が死首まぎらしくは存すれども、もしや身よりの者共が尋ね參つて、誠かうそか實性たゞさん其爲に、平岡ごののはからひにて獄門にかけ置く所、按にたがはぬ首の紛失、跡にて様子を聞く所、十次兵衛には高頻に一つのほくろ有り、かの死首にほくろのないは合點行かずと、面體ごとく評議のうへにて、ト此あた はや鏡子盃を持ち、何心な 甚「エ、其南方十次兵衛といふやつは、此間獄門にかゝりましたを、アノ盗んだ奴が、トうしろにて 有「サ、もしや身寄の者成るか、又は十次兵衛めがいきのこり、隠れうせるもはかられずと、した、め參つた人相書、ふうらい者の入込む此家、もしや似寄の者有らば、甚兵衛取つて 甚、かしこまりました、幸ひ爰へはり置いて、入込むやつらをいちいち吟味は、ト鏡子のびん付油をつけ、繪姿 かやうに致して張置けば、町々小路の建札どうせん、彦「十次兵衛めは高ほにはくろ、きやつがせん議と、有「首を盗んだまぎれ者、甚、せんざしぬいて甚兵衛が、はや「エ、しづ「鏡子盃を取落す、三人 甚「コリヤ妹、何をうろたへて、はや「ハイ、是はマア不調法な、ごめん被成ませ、ト右衛門思入有つて 有「コレた方御ゆるされませいな、

コレ、何か甚兵衛の妹か、はや「ハイさやうでムリ升、有」ても扱もよいきりやうじやの、甚「コレ、おはや、だれも呼びもしねえに、なせ爰へ来たよ、はや「アイ御酒のかんが出来たによつて、サア一つ呑みなさんせ、トそへ差 甚「コレサ、あなた方のお出といひ不作法な、あなた方へ御馳走には、そんな鬼ころしは上げられない、何も用はない、奥へ行けよ行けよ、はや「アイ、さやうならあなた方ゆりとおはなし被成ませ、有右衛門引留め、有「ア、コレ、ちと爰で咄していきやれ、ト行かうとするを、甚「酒なら身共もおあひ致さうか、ト兩人おはや、甚「モシ、おまへさん方は、めつたに妹に足をお付け被成升な、是にやアおまへ亭主がムリ升よ、兩人「ヤ、アノ亭主が有るか、甚「あるだんか、しかも御侍でムリやす、兩人「イヤア、何だ侍だ、彦、おなじ武士とはちと氣がもめの吉祥寺、有「シテ其武士の家名はなんと申すな、ト是にておはや當惑の思入にて、はや「サア其名はごうも、兩人「申されぬとは、あやかり物じやなく、甚「モシ、いかにわしがやうな者でも、そばに兄が居り升るわな、ちつとマアコレコレ妹、我も爰に居る事はねえ、勝手へいつて團子の

手傳ひでもしやれな、はや「アイ、参り升るが、今おまへが屏風にはりなさんした物を、ト言寄るを、甚「是サ、何も女の見る物じやアねえ、勝手へゆけよ、はや「でも何やら屏風に、甚「ハテ行けといふに、はや「アイ参り升るわいな、ト屏風へ心をのし奥へは入る、有「コレ、甚兵衛、此間中から妹のおはやが事を頼んで置くが、どうでもおぬしは不承知か、甚「私に不承知じやアムりませぬが、妹めが女房約束した先の男が侍と、それもたつた今聞きました、男まさりな妹め、こりやアおまへ様のお頼みは、有「断ると申のか、甚「さやうなものサ、彦「有右衛門ごの、此者が断るとあれば、此方も亦一寸も待ちませぬぞ、有「さやう、妹が事が出来ぬなら、丈左衛門ごのよりおぬしが方へ、彦「此彦助が預け置いた胡蝶の香箱、今渡しやれ、甚「へいお跡から持つて参りませう、彦「イヤ、跡も先もいらぬ、身共が手から渡した品、身がうけ取るにたれにゑんりよ、サ甚兵衛渡しやれよ、甚「ハテ丈左衛門様へ私が持参致せばい、じやアムりませぬか、有「イ、身共兩人がうけ取らう、甚兵衛わたされぬか、よもやわたされまい、どうして、二百兩といふ金がなくては

渡されまい、甚「どうしましたと、有「知つて居るわえ、善六來やれ、善「かしこまりました、トるじより、コレ甚兵衛ごの、けふあなた方がわしへのお尋ねで、成るだけは隠したが、モウかなはねえ、こなたが香箱を二百兩にわしらが内へ預けたも、みんなわしが申あげたわ、彦、あの通りだ、主人の大事の道具を預り、二百兩の質に入置き、有「いはおのれは引追ごうせん、使をよこせばてうらうし、あひも變らぬあいつ致し、善「質屋も毎日催促に足をはこべば、ぶちちやうちやく、イヤハヤおへない代物でムリ升、有「只今わたすか返答ぶて、彦、甚兵衛ごうだ、甚「返答ませう、有「彦「スリヤ今もどすか、甚「いやだ、三人「ヤ、甚「返す事はならねえ、いやだ、有「彦、そりや又なせ、甚「盗み物だわ、三人「ヤア、甚「鴻野の家あの寶、盗みはぬすめど置所がない故に、我を頼んだ胡蝶の香箱、こつちに金が入用ゆる、質に置いたが何とした、金の工面の出来るまで、またつしやりませ、いやならすぐに代官所へそつちから持だしやれ、盗み物ゆるつうくつに置いたがどうした、賣つたら大じか、待たぬとい、ば命づ、トのれん口より出刃庖丁をひ、サ歸られざア死つくら、高で

金なら二百兩、出来さへスリヤアうけてやる、きりきりぶさたち歸らつしやい、ト急度いふ、三人ぶ、彦「有右衛門ごの、サ、歸らつしやませ、有「さやう仕らう、身もさいせんより罷歸らうとぞんじをつた、ヤ、質や、われは何しに來た、善「おまへ方がお頼み故に参りました、彦「ヤ、たわけめ、こいつよう嘘をつくやつだ、我々は歸る、われも歸れ、善「歸るのをおまへ方におそわるものか、しかし親方のまへへ此儘にはごうも歸られまい、ト門口へ、甚「歸りにく、ば出刃庖丁のつるぎの舞を、ト立かゝる、皆、三人「ア、コレ、歸り申す、ト三人花分ちへ、善「かうもあらうか、有「彦、なんぞ、善「うんつきじ、有「嵐がさそふわるだくみ、彦「切つてしまつた金の鶴十、有「おはやごのには亭主ができる、彦「香箱はてにいらす、有「彦、これじや築地へ歸られぬ、善「ハクシヨ、ト合方に成り、三人捨ぜりふにて向うへ、甚「二本ぼうだといつてこはいものか、こつちがふとけりやアそつちもふといわ、質をうける二百兩が何あるものか、よしあつたごて二百兩ナニやるものか、アノ大まいの二百兩、トよき時分二階よりおてる出か、引窓より下を窺ふ、甚兵衛おてるが金の事をふつさ心づきたることに、鏡臺にかけ

て有る鏡に、引窓よりおてるのかげうつるを見付けし思入にて、きつ
 と見て持つたる出刃を口にくはへきつと思入、是なきつかけに時の
 かけさなり、二階の歌になり、蟲の音しておてる思入、甚兵衛井戸端
 の石を持つて来り、奥の方へ思入有つて、すゝきを入れし手桶をひつ
 さげ出で、石のうへにて出刃をさぐ事、思入有り、しじう相方、歌き
 る甚兵衛手拭へ出刃をつ、みうしろへはさみ、跡をたづけ、合方
 捨鐘にてそりり、姉さん、ひもじからうぞえ、をあげ
 る、をあげてる「イエ、お構ひなさんすな、モシどうぞお
 まへ、アノ與五郎さんにあはせて下さんせいな、甚急
 度わしがあはせてしんせるわ、姉さん、おまへさつき
 見せたものは有るかえ、てる「さつき見せた物とは何
 でムんすえ、甚ハテ二百兩の金は持つてゐるかとい
 ふ事よ、てる「アイそりや持つて居り升るわいな、甚サ
 其金の事さ、與五郎さんに渡さうから、わしに預け
 な、てる「アノ此金をかえ、ト財布へ書物を甚サおれに
 渡しな、ト取るてる「ア、モシこりやおまへに渡す
 程に、アノ與五郎さんにどうぞ今あはせて下さんせ
 え、甚あはせてやるよ、其金を見せな、てる「是かえ、
ト出す、甚兵衛さいふ甚サアつれて行く、わしと一所に、
をつかみ思入有つててる「アイ今ゆくのかえ、サア参りませう、ト二階の
方へ行くを、うしろより出刃にてア、コレ與五郎さんにあは
 せて下さんせ、甚、やかましい、聲を立てるな立

てるな、ト金をもぎ取りてる「ア、コレわたしを切るの
 かいのう、コレどうぞ與五郎さんにあはせ、此金渡し
 たうムんす、コレどうぞ與五郎さんに、甚、エ、やか
 ましい、あはせるわ、聲を立てるな、トめつた切にす
る、此時隣階に
 て何かたいこ入り所作のなり物に成り、此音にまがらし、二階にて甚
 兵衛おてるさ立廻りの内、さいふをばひるひ、おてるおもての方へな
 げる、此さいふ書物もろ共引まごの引戸の間へは入る、程よく繩へま
 さびつく、甚兵衛おてるををしごめ、思入有つて、死がいた二階のへ
 きはへ押付け、上へ寝、さなをぶせ、手に血のついた、金は慥に引
 る思入にて小屋根へ出、引まごの間へ手を差込み、まごの間に、思入、此時向うにて、與兵衛「エ、向うの内
 かえ、忝うムりやす、トテントツに成り、南與兵衛前幕の形、夜
この棒へ結び付け、杖を腰にさア、向うの門口に有るは
 おれがそばの荷だわえ、そんならあすこが甚兵衛が
 内だらう、よう、尋ねつけた、トやはりテントツにて本
舞臺へ来る、此内甚兵衛
は二階よりおりて、井戸端與兵衛「モシ甚兵衛ごのは内かえ、
にて出刃と手を洗ひ居る、甚「オイだれた、ト出刃を疊
の下へ隠し、甚兵衛は内に居るが
 だれた、ト門口をア、そばの與兵衛ごのか、與兵衛「コ
レ甚兵衛ごん、こなさんマアタベ一寸預けたわしが
荷を先へ持つて歸つて、こなさんのかごをうつちや
つて置いたゆるゑ、捨てちアや歸られず、コレ、あ

にめんじて、トしゆつた與兵「女房にさへなるならば、
き思入、別していふにも及ばぬの、はやなる程おまへと約束
 通り、佛をちかひに添ひ升る、甚、イ、ヤ兄貴がなら
 ねえの、はや「エそんならおまへが、甚ならなわいわけ
 は、今迄も亭主は武士だといひちらし、我身も出世此
 兄も大金に成る先々をへんがへ、かごかきの妹に夜
 そば賣はあたりまへ、左り團扇はごこで遣はせる、濫
 團扇も遣へまいわえ、トおはやじゆつたき思與兵「コレコ
レ甚兵衛ごん、そんならこなさん不承知かえ、コレナ
かごかきを小舅に持つからは、聲の與兵衛が商賣は
 晝は見得で、夜計りふうらいものがふうりんの、甚
 「そば荷をかつこなさんに、此妹はやりにくい、しづ
 「ハテさういはいでもすいた事なら、甚、いらざる事
 を、のいてゐる、トつきのけて立上るを、與兵「妹をくれね
ばいひがかり、女房約束した時の、はや「ア、モシ其事
ばかりはどうぞ爰では、き思入、甚「妹もよしにし
 ろ、其日暮しの聲ならば、幾たり成りと取つて見せ
 る、我にはしつかり持参のつく、與兵「甚兵衛ごの、持
 参のつくが望みなら、わしにも持参が付き升の、甚、ナ
 ニこなさんに持参がつつか、與兵「のぞみとあらばわ

しが持参、ドレ見せませうか、ト合方に成り、いざんそば荷
物のちぎれ與兵衛が持参は是でござんす、ト三人目を付ける、書
物を出し、出、ト居る、甚、ほぐにくるんだ蒔繪のくし、しづ「ご
門口に窺ふ、ぎ出し蒔繪のしづぼうつなぎ、はや「つむりの道具は
 女子のたしなみ、それをおまへが持参にかえ、與兵「心
 覺之のない櫛が、わしがそば荷にあつたから、甚、ヤ、
トぎつ、與兵「サ、出所いはぬが舅御へ、聲が寸志の此
持参、殊にやぶれた質やの預り、其金高も二百兩、大
金持の山崎やの娘が家出も二百兩、割符の合うた、は
や、しづ「エ、思入、甚「聲に取らう、與兵「ヤ、甚「持参
の道具が氣に入つた、妹をしんせる聲に取らう、はや
「スリヤアノ私をぬしの女房に、しづ「それで物事納ま
るかたち、與兵「しかししはちめて持つ女房、つむりの道
具をやる時は、縁が切れると世のたごへ、今更どうか、
ト思入、はや「もどめませう、與兵「ヤアノおぬしが是を、
はや「賣上げの付く其櫛をもどめてさせば、おまへか
ら別して貰うた品でもなし、氣にかゝるなら賣らし
 やんせ、わたしを買うてさしませう、與兵「女房に賣る
 はいなものと思へど、與兵衛は商人、商賣違ひの拂ひ
 物、お氣に入つたら賣りませう、シテ其價は、はや「サ、

衛が實名は、首になつたる十次兵衛、はや「ヤ、ハ、ス
 リヤ船中にて夫婦の約束、其のち大事を打明し、三年
 つれ添ひ其跡は、尼になされて下さんせと、いひやく
 そくのお方もやつぱり、與兵衛、サ、月は一つの日かげも
 の、船のやくそく茶わんのむすび、其節かうとは思へ
 ども、首に成つたる十次兵衛、其首盗むも南方氏、み
 すく、貞女と知りながら、包むも言ふも大事をか、
 へし此身、うらんでくれるなコレおはや、はや「二度迄
 むすびし女夫のきづな、切つても切れぬ重縁にはか
 なくされし、シテ又首級は、與兵衛、それこそ弟南與兵
 衛、面體似たるを幸ひに、兄にかはつて生害なし、我
 は與兵衛と變名して、ゆだんを見ます寶のせん議、
 まさしく此家の甚兵衛が、丈左衛門より預り有る證
 據は則ち此質札、殊にあれ成る引窓に隠し置いたる
 金といひ、まさしく不通の妹お照、した、め置いたる
 あの書物、殊にしたる血汐といひ、せん議は此家の、
 ト行かうとする、立廻つ ばや「お顔を覚えぬおまへの科寶
 を失ひ閉門と聞くご其ま、様々と金拵へて、寶の在
 家手掛りもごむる其内に、死なしやんしたと聞いたも
 の、悲しうなうて何とせう、貯へ僅かの金ながら、與五

郎さんの手詰と見て用立てましたも、あつて益なき五
 十兩、それに引かへ兄さんの、慾に目がくれいとしほ
 なげに、ようマアやみく、與兵衛、サ、其人殺しの詮議し
 て、ト行かう ばや「ア、モシ悪人乍らも血筋の兄さん、ご
 うぞ一旦、與兵衛、イヤそば賣の與兵衛なら、見のがして
 くれん事あらんが、寶の行へ知れたる上は、我は南方
 十次兵衛、助け置いては刀の手まへ武士道立たぬわ、
 トよき時分よりかこき 又「與兵衛といふは十次兵衛、倉
 三人門口に窺ひ居て、 又「與兵衛やらじと立廻り、うしろより田
 岡様へ、 ト行かうとするを、與兵衛やらじと立廻り、うしろより田
 入谷の金を草井戸へつきこむ、兩入はつき思入有つて、 與兵衛、身
 が實名を知つたる下郎め、跡追かけて、はや「早うムん
 せ、與兵衛「合點じや、こる、よき時分より生垣の外より小屋根をつ
 たひ、野手の三窺ひ寄り、引窓へ、はや「あの二階にはまさしく
 手差こみさいふを引出し、 トあがらうとする、野手の
 死骸、兄へ難儀のか、らぬ内に、 トあがらうとする、野手の
 階の様子 三「扱こそおてるがあの死がい、證據の櫛
 で見、 三「扱こそおてるがあの死がい、證據の櫛
 で人殺しの訴人のうへに、隠まふ與五郎、はや「ヤおま
 へはさつきの、三「すぐに訴人に、 トよき所より飛降り、行
 留め ばや「コリヤこなさんは兄さんの訴人のうへに、
 其金迄、三「オ、持つて行くのだ、コレおはや兄の命

がたすけたくば、此三さんの女房になれ、はや「イ、エ
 わたしは、こなさんも今見るまへで女夫の盃、三「あい
 つも慥か十次兵衛、のこらすかいだ野手の三、是から
 だんくじゆんぐりに、仕事にか、つて金にする、そ
 れでもわりやアなびかぬか、はや「なんのこなたに返
 事しよう、殊に書物添うたる其金、立廻り有つて、三「金
 がほしくば、トおはやを引つける、立廻り見えに成り、是より鳴物
 おはやを引しく、此時甚兵衛うしろへつか、こ出で、ござの下よ
 り出刃を出し、野手の三を切倒す、おしづ走り出で是を留める、おは
 やもさへるを、二人りをつきのけ、野手の三をすたく、 しづ「コ
 レこちの人、はやまつてこなさんは、はや「悪る者なが
 らも人をあやめて、甚「サごうでこつちは行がけの、駄
 ちん入らずに二百兩、悪念きざしてあのおてる〇其
 いひわけは、ト出刃を腹へつきた しづ「ヤア、ハ、ハ、甚
 兵衛どの、こなさんは、はや「取りのぼせてかコレ兄さ
 ん、甚「イ、ヤのぼせぬ氣も違はぬ、ふびんや花のお
 てるごの殺したるうへからは、幾たり切つても殺し
 ても、命は定まるおれ一人り、惡のむくいは刃のさび
 に毒くはハ皿、ト引廻す、おはや しづ「悪人ながらも此
 深手、おはやさん、はや「おしづさん、心がらどはいひ

ながら、兩人「エ、あさましい、トなき落す、向うはたくに
 有右衛門彦助身がまへして出て來り、窺ひ、 與兵衛「ヤ、ハ、ハ、
 つけて來り門口に居る、與兵衛内の方を見て、 與兵衛「ヤ、ハ、ハ、
 ヤ妹が敵の甚兵衛は、はや「我ど我手に此生害、只此上
 の願ひは、しづ「娘心のおてる様、御持参有りし此金
 にて、あつまさんの身請を首尾よう、與兵衛「イ、ヤあづ
 まは兄與次兵衛身請はすれど、情なや御上みの疑ひか
 かりしゆる、山崎やの家は封印、親に難儀をかけたまじ
 と、又は義理ある弟與五郎、かれにかはつて與次兵
 衛が繩めのうへに牢舎なし、はや「しづ「ヤ、ハ、ハ、ス
 リヤ與次兵衛さんは牢舎とや、甚「それも大かた長吉
 を殺せし科の、身にかはる弟思ひの與次兵衛どの、せ
 めて是なる二百兩、寶の質請あなたのお手から、與兵
 「娘が一念と、まる此金、ト二百兩を取、しづ「與五郎さん
 へ死顔なりと、ト押入をあけ 有右衛門「寶の盜賊、彦「十
 次兵衛、トおはるを與兵衛 與兵衛「此間に與五郎、はや、しづ
 「心得ました、ト押入をあける、内より與 兩人「與五郎さま、
 何かの様子を、ト與五郎二人 與五「ヤ、ハ、ハ、そなた衆
 二人りはふじやのあづまか、戀しいあづまがオ、オ
 オふたりじやく、トよき所より、 ばや「コレイナアなんで

そのよなあどない事、スリヤお内のやうす兄御實義を聞かしゃんして、しづ「氣がどりのぼつて其様な、コレ心を慥に與五郎さん、與兵衛さては心がみだれたか、與五「オ、みだれ心じや秋草の、尾花がまねく今そこへ、ト行かうとする、有彦「十次兵衛うぬを、トかけいり五郎扇をひらき狂ひく行かうとする、與兵衛二人りを相手に立廻り有り、與五郎此内へまじりつきのけく花道の方へ行き、ふり返つて、與五「さばへア、トかけいりに入る、しづ「アノ與五郎さんは、有彦「所をうぬを、トかゝるを與兵衛引つけ、二人甚「女房妹必ずほへるな、ト引ま、はや「最早ちしこの、しづ「甚兵衛どの、トすが、與兵衛「妹が敵は現在小舅、甚「身をすたくくに、ト與兵衛方へはいより出刃をぬ、與兵衛「おはやが事をあんじすとも、甚「お頼み申す、ト出刃をぬ、はや「しづ「南無阿彌陀佛、彦、有彦「うぬを、トかゝる、與兵衛急兵衛はつたり落入る、木の頭、おはやあしづすがつて泣落す、與兵衛二人りをひつ敷、甚兵衛と與五郎が跡を急度見やり、與兵衛「ハテ是非もなき、ト雙方見やつて、ひやうし幕

先今日は是切り、是より大切り淨るりの幕近日御覽に入升る、さやうドンドン~~~~~

當秋八幡祭終

山田安榮
伊藤千可良 校
本居清造

徳川文藝類聚第六終

大正四年十月二十日印刷
大正四年十月廿五日發行

(徳川文藝類聚第六)
非賣品

編輯者兼

早川純三郎

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

國書刊行會代表者

印刷者

高橋赤次郎

東京市京橋區新榮町四丁目三番地

印刷所

國書刊行會第一工場

東京市京橋區新榮町四丁目三番地

不許
複製

發行所

國書刊行會

東京市京橋區新榮町五丁目三番地



